先生方とともに高校生の今と未来をつなぐ

http://berd.benesse.jp

# VIEW21

〈ビュー21〉
高校版
Volume 3

2014
August
8月

# 生徒の今と未来をつなぐ 2つの力

特集

## 10年後を見据えた人材育成

―変化する社会を生き抜くために―

新課程 指導最前線

新課程先行実施生
3年生後半の指導のあり方

指導変革の軌跡

長野県
上田高校

奈良県大和高田市立
高田商業高校

半歩未来を考える教育オピニオン

「21世紀型能力」の明確化で
教育はどう変わるのか?

ベネッセ教育総合研究所

# 弊社通信教育サービス等のお客様情報の漏えいに関するお詫び

平素は弊社ならびに弊社教材にご高配を賜り、厚く御礼申し上げます。

この度は、「弊社通信教育サービス等のお客様情報の漏えいの件」に関しまして、多大なるご心配とご迷惑をおかけすることとなり、誠に申し訳ございません。お詫びとご説明をさせていただきたく、以下の通りご連絡申し上げます。

報道発表にもありました通り、弊社通信教育サービス等のお客様情報が漏えいしている事実が発覚いたしました。現在、流出の経路や影響範囲について、警察の捜査が行われており、弊社は捜査に全面協力しております。先生方、ならびに生徒・保護者の皆様に、多大なご心配・ご迷惑をおかけいたしましたことを、深くお詫び申し上げます。

なお、**進研模試やスタディーサポート、進路マップおよびGTEC等、また、中学校でご実施いただいております学力推移調査等、学校にてご活用いただいております成績データ等につきましては、今回お客様情報が流出した環境とは異なるシステムにて管理しており、一切流出していないことを確認いたしております。**また、**FINE system ならびにインターネットフォルダ等、電子データで情報をご提供しているシステムにつきましても、安全性を確認いたしました。**

今後は、二度とこのような不祥事が起こらないように、信頼回復に向けて一丸となり努力して参る所存でございます。今後ともご指導ご鞭撻のほど、よろしくお願い申し上げます。

2014年8月

株式会社ベネッセコーポレーション
代表取締役社長
小林 仁

●本件に関するお問い合わせは、下記お客様サービスセンターまでお願いいたします

0120-350455　受付時間／〔日・祝日、年末・年始を除く〕
月～金 8:00～19:00　土 8:00～17:00

今、振り返る教師としての原点

**私を育てた あの時代、あの出会い**

# 「対話」こそが生徒を勇気付け前進させることを理解した

秋田県立秋田南高校 庄司 強（つよし）

「生徒を優先する」ことは、多くの教師の信条であろう。だが、どのような局面でその信条を体現するかは、教師の個性によって様々だ。生徒との対話を最重視する先輩教師との出会いを通じ、庄司先生が自らの教育観を磨き上げ、血肉としていった日々を振り返る。

## 進路指導は教師の醍醐味

教職16年目に秋田高校に赴任しました。1年目はハイレベルな教科指導に試行錯誤しましたが、授業に慣れてくると、進路指導にかかわりたいという気持ちが強まっていきました。生徒に寄り添い将来をつくり上げる進路指導は、授業と同様に教師の醍醐味と考えていたからです。しかし、すぐにはその希望はかないませんでした。

赴任6年目を迎える直前、ある会合で進路指導主事の佐藤健公（けんこう）先生の隣に座りました。それまで佐藤先生と同じ学年になったことがなく、あまりお話しする機会もありませんでしたが、教師にも生徒にも厳しい先生というイメージは持っていましたので、内心緊張していました。

その時、驚いたことに、佐藤先生から「後で発表になるけれど、来年は進路指導部の副主任になってもらうよ」と声を掛けられたのです。佐藤先生は常に学校全体のことを考え、全ての先生に目を向けられていました。そんな佐藤先生が「庄司先生を副主任に……」と、校長に直談判されたと聞き、光栄に感じると同時に、期待に応えたいという気持ちになりました。

## 対話を通した信頼関係

「学校改革は進路指導から」が、佐藤先生の口癖でした。将来の明るい話をすると、生徒は前向きになり、学校が変わっていくというのが持論でした。

その言葉通り、佐藤先生は分掌の仕事を驚くほど迅速に終わらせると、その他の時間を生徒と話すことに割いていました。先生の面談は、廊下で立ち話をしたり、ベンチで語り合ったりと自由なスタイルで、「20年後、君は何をしているだろうか」などと問い掛け、今すべきことを生徒に考えさせるのです。

佐藤先生は、添削指導も生徒との対話に活用されていました。毎日、数十人分のノートを添削して当日返していましたが、そのベースにあるのは「添削はカウンセリング」という考えでした。ノートを通して語り掛けてくる生徒に対し、手書きの添削を通して語り返してあげると、生徒は見守られていることを実感し、安心して学習に取り組める。そんな考え方に感銘を受け、私もそれまで以上に熱心に添削指導に取り組むようになりました。

佐藤先生は、生徒の間では「厳しい先生」として通っていましたが、誰からも深く慕われていました。対話を通した絶対的な信頼関係があったからこそ、どの生徒も厳しさを受け入れたのでしょう。佐藤先生の指導を通して、生徒たちの中に、将来への前向きな気持ちが確かに育っているのを感じました。

やがて佐藤先生は異動になりましたが、その3年後、教頭と

進路指導主事だった私は、庄司先生の力が必要だと感じ、副主任に強く推薦しました。多くの教師が生徒の本音を引き出すのに苦労する中で、庄司先生は相手が気を許したくなる懐の深さを持ち、いとも簡単に生徒と心を通じ合わせているように見えました。「この先生がいれば、3人分の力になる」と思ったものです。そんな人柄ですから、授業で生徒を引きつけるのも実に上手で、若い数学の先生には「庄司先生の授業をのぞいてきなさい」とアドバイスしていました。庄司先生は私の期待以上の成長を見せてくれて、今は教育専門監として、秋田県全体でリーダーシップを発揮しています。

**先輩教師の言葉**

## パソコンを消して職員室を飛び出し生徒と語ってほしい

秋田県立秋田南高校　校長
佐藤健公（けんこう）

左 さとう・けんこう　英語科。秋田県立秋田高校、秋田県教育庁高校教育課などを経て、秋田高校で教頭、副校長を、角館（かくのだて）高校で校長を務める。その後、秋田南高校へ。校長。

右 しょうじ・つよし　数学科。秋田県立大曲（おおまがり）高校、秋田高校などを経て、秋田南高校へ。赴任3年目。教育専門監、進路指導部副主任。

撮影◎秋田南高校にて

して再び秋田高校に赴任されました。この時、私は進路指導主事でした。当時の秋田高校は生徒の能力に進学実績が十分に伴っていないということから、東北では「眠れる獅子」と言われ、その状況を抜け出そうとあがいていました。

佐藤先生は赴任早々、例年のおよそ倍の東京大10名、東北大50名という合格者数目標を掲げ、自ら迅速に動き始めました。例えば、図書館の開館時間を延長してほしいという生徒の要望を聞くと、翌日には閉館時間を18時から19時30分に変更されていました。そんな佐藤先生の姿を範として、私も自分が出来ることを考え、教師間の情報共有を充実させたり、個別試験対策講座を更に強化し、自ら複数のコースを担当したりしました。佐藤先生や私の気持ちが連鎖するように、他の先生方も目標達成に向けて意欲的に行動し、成果に結び付けることが出来ました。

幸運な巡り合わせで、現任校でも、佐藤先生は校長として、私は進路指導部副主任として一緒に仕事をさせていただいています。また、私は、秋田県の高校に対して進路指導の助言をする教育専門監を兼務していますが、そこでもお話ししている「生徒優先で考える」「100%の自信がなくてもまず行動してみる」は、どちらも佐藤先生の実践から私が学んだことです。そうしたポリシーに沿って行動した結果を分析し、素直に反省して改善することで、これまで私は成長してきましたし、今後もそうし続けたいと強く思っています。

最近、リーダーシップを取ろうとしない先生が増えているように感じます。大きな責任を持つことを避けたいという気持ちがあるのでしょうが、誰かが動かなければ組織は変わりません。どんな組織でも、「変えたい」という気持ちを持つ人が3人いれば必ず変わります。特に若い先生方には、自分がその3人の中に入って、学校を改革しようという志を持っていただきたいと思います。

そして、せっかく教師になったのですから、パソコンとにらめっこばかりせず、他の先生と、生徒について語り合ってください。次に職員室を飛び出し、生徒と対話しましょう。教師の仕事は全てそこから始まります。

教師が忙しいのはどの時代も同じことで、この先も状況は変わらないでしょう。いかに業務を効率化し、生徒のために時間を割けるか。今も校長として、この課題に向き合い続けています。パソコンなどのツールを使いこなすことが得意な若い先生方から、ベテランにはない斬新なアイデアが積極的に提案されるようになれば、学校は大きく変わっていくはずです。

# CONTENTS


2 私を育てたあの時代、あの出会い

「対話」こそが生徒を勇気付け前進させることを理解した
秋田県立秋田南高校◎庄司（しょうじ） 強

5 特集

## 10年後を見据えた人材育成
——変化する社会を生き抜くために——

6 座談会
これからの10年における変化を生き抜くために必要な力とは
慶應義塾学事顧問 安西祐一郎 ／ ソフトバンクモバイル株式会社 常務執行役員 喜多堅裕明（きたの） ／
株式会社ベネッセコーポレーション 取締役 山河健二

10 インタビュー
「軸」を持ち、しなやかに生きる！ 変化に向き合った3人の生き方
Classi株式会社 プロダクト部 企画グループ 鳥山恵美子 ／
NPO法人グリーンバレー理事長 大南信也 ／ ファイナンシャル・プランナー 花輪陽子

22 座談会
変化を生き抜く力を学校の日常の中で育む
岩手県立一戸（いちのへ）高校 副校長 川村俊彦 ／ 東京都立新宿高校 安藤直樹 ／
大分県立中津南高校 遠藤源治（げんじ）

26 新課程 指導最前線 新企画

新課程先行実施生 3年生後半の指導のあり方
北海道札幌西高校／愛知県立豊田南高校

30 指導変革の軌跡

長野県上田高校
進学実績向上◎生徒個々に応じた指導を全校体制で徹底し東京大合格者数を回復
奈良県大和高田市立高田商業高校
進学実績向上◎全校体制の小論文指導で進学にも就職にも強い商業高校へと変貌

38 生きたデータの徹底研究

1年生夏休み明けの意識付け

42 半歩未来を考える教育オピニオン

「21世紀型能力」の明確化で教育はどう変わるのか？
国立教育政策研究所◎西野真由美 白水（しろうず） 始（はじめ） 後藤顕一

48 未来をつくる大学の研究室

課題の発見・解決を繰り返し より豊かな社会を実現する
東京大公共政策大学院・法学政治学研究科 城山英明研究室

52 VIEW'S REPORT

教育再生実行会議委員の知事たちが語る
地方における教育の重要性、学校教育が担う役割とは
高知県知事◎尾崎正直（おざきまさなお） ／ 熊本県知事◎蒲島郁夫（かばしまいくお） ／【聞き手】専修大学附属高校理事◎鈴木高弘

58 【告知】ウェブで参観できる「シリーズ 授業大公開」がオープン！

64 Reader's VIEW


http://berd.benesse.jp 本誌記事は、ベネッセ教育総合研究所のウェブサイトでもご覧いただけます


VIEW21

2014 August 8月

高校版 Volume 3


今月の表紙メッセージ

**生徒の今と未来をつなぐ 2つの力**

◎今号から表紙のデザインを一新し、毎号、特集のコアメッセージを最も目を引く形で表現していきます。今号の特集では、生徒が10年後の社会を生き抜くために、今から育成が求められる力として、2つの力を挙げています。それはどのような力なのか。先生ご自身のお考えと照らし合わせながらページをめくっていただけたら幸いです。

『VIEW21』高校版
編集長 柏木 崇


＊本文中のプロフィールはすべて取材時のものです。また、敬称略とさせていただきます
＊本誌記載の記事、写真の無断複写、複製および転載を禁じます

SPECIAL ISSUE

# 特集

# 10年後を見据えた人材育成

## ―変化する社会を生き抜くために―

高度経済成長、バブル経済とその崩壊、リーマンショック……
いつの時代の社会においても変化はあった。
しかし、グローバル化やデジタル化などの環境要因により、
これからの社会には、ますます大きな変化が訪れることになるだろう。
今の生徒が10年後、変化に対応しながら社会を生き抜いていくためには、どのような力が必要なのか。
今号から、その力の育成と、高校教育において必要な指導について考えていく。

**Q** 現在高校生である生徒たちが社会に出る5～10年後は、これまで以上に変化の激しい時代であることが予想されます。そのような変化に対応し、社会を生き抜いていく上で必要とされる力は、どのような力だと思われますか。

◎自分が置かれたどのような状況にも対応するフレキシブルな力。（青森県）

◎柔軟性と適応能力。更に「笑う力」。笑える人、笑える人生が目標ではないか。（福島県）

◎創造力。ＰＤＣＡが自分で回せる。当然幅広い基礎学力をベースとし、タフにチャレンジし続ける力。（静岡県）

◎周囲に流されることなく、自分の夢や目標をしっかり持って日々を着実に取り組むことが出来る力。ただし、自己中心的ではなく、協調性を持っていることが前提。（静岡県）

◎変化への対応と並行して、その変化で良いのかどうかを一度立ち止まって検証し、必要なら後戻りをする勇気。（京都府）

◎未曽有の事態に対処できる柔軟性と行動力。（奈良県）

◎目標（課題）を見付け、実現（克服）に向けて自己管理が出来る能力。（広島県）

◎時代が変化しようとも、ぶれない「軸」を自分でつくること。10年後に新しい薬をつくるとか、ぶれないことが良い人生をつくる方法だと思う。（愛媛県）

出典／『VIEW21』高校版読者モニターへのアンケート結果より。アンケートは、2014年6月にウェブとファクスで実施。有効回答数は49

座談会

# これからの10年における変化を生き抜くために必要な力とは

**今の生徒たちが5年後、10年後に社会人、職業人として生きる社会の有り様は、今と比べ大きく変化しているであろう。見通しを立てにくい社会の中で、所属する集団の中での自分の役割を果たし、より良く生きていくために必要な力について考える。**

## 変化の時代に求められる「軸」と「修正力」

**安西**　生産年齢人口の減少、地域間格差、グローバル化などの問題を乗り越えるために、今後10年間で日本は大きな変化を迎えます。これまでとは異なる環境の中でも、人生をより良いものにする力をどうすれば若者たちが身に付けられるのか、教育にかかわる者全てに投げ掛けられている問いです。

**喜多埜**　安西先生がおっしゃる通り、人口そのものが減る中で、日本はグローバル化を進めなければ立ち行かなくなるということを、産業界が切迫感を持って受け止めているのは事実です。グローバル化に対応するためには、異なる価値観の人たちと協働する力や、コミュニケーションツールとしての英語力の育成など、これまでの教育からの大きな質的転換が迫られているように思います。

**山河**　ますます大きく変化する社会だからこそ、それまでの正解、やり方が通用しない場面にこれまで以上に多く直面することになるでしょう。私たちのような職業人であれば、仕事の内容や働き方が大きく変わることはもはや珍しくありません。そうした変化を前にした時、会社やチームにおける自分の役割を果たしつつ、しっかりとした人生を歩き続けるためには、柔軟に変化に対応する力、修正力が求められると思います。そして、変化する社会に漫然と流されず、変化を真正面から受け止めながら必要に応じて自己修正していくためには、自分の中に譲れない信念やこだわり、目標といった生きる上での軸と、それをつくる力が、これまで以上に必要になると思われます。

**安西**　生きる上での軸を持てるかどうかは、変化の大きな社会では、一層切実な問題になっています。現実に、大学に入学したけれども、大学生活の目標が持てない学生は少数ではありません。高校や大学において、若者たちが目標を自分で設定するトレーニングの場はもっと必要でしょうし、目標をいったん決めながらも、社会の変化や自分自身の成長に応じて目標そのものを柔軟に修正する訓練も行うべきだと思います。実際、学生たちと接していても、変化に応じた修正力が不足していることを感じます。

**喜多埜**　私たちが高校生、大学生だった頃は、目標を持つこと自体がまだ容易だったと思います。しかし、社会がより豊かで便利になり、いろいろなものが手軽に手に入るようになって、選り好みをしなければ大学に入学するのも簡単になったことで、若い人たちがしっかりとした目標や軸を設定しづらくなりました。

そのことを私たちはもっと理解した上で、若者たちへの働き掛けを行っていくべきなのかもしれません。

## 軸を育む冒険を生徒に促す社会に

**山河** 変化する社会に柔軟に対応するためには修正力が確かに必要ではありますが、何よりその土台としての軸をつくりにくくなっている今、私たちに何が出来るのでしょうか。

**喜多埜** 目標や軸を持ちにくい社会になったのは事実ですが、その半面、その気にさえなれば大胆なチャレンジがしやすい社会になったと私は思っています。近年、自分で起業する若者は増えていますし、わずか数年のうちに大きく成長し、社会に大きな影響と存在感を示している企業は少なくありません。ハングリー精神は持ちづらくなったかもしれませんが、冒険が出来る選択肢は実は増えていることを、高校生にも知ってもらいたいと思いますし、高校の先生方にはそうした社会の実情を知って、生徒に話していただきたいです。

**安西** 冒険は高校時代にもぜひ経験してほしいものです。勉強はもちろん、勉強以外のことにも挑戦し、一生懸命取り組んだ生徒を入試で評価する仕組みを大学は考えていかないといけません。今の大学入試は、大学で学ぶために必要な学力、あるいはそれ以上の学力を入試段階で測りますが、困難に向き合う力や人の気持ちを感じ取るセンスには十分に目を向けられてはいません。学びへの情熱を持った生徒をまず選抜し、その生徒に大学レベルの知識を身に付けさせるのが本当の大学の姿ではないでしょうか。教科学力以外は客観的に測りにくいのは事実ですが、主観的でもその分責任を持って選抜し、育てていこうという覚悟が大学には必要だと思います。企業の採用ノウハウなども学びながら、入試のあり方を考えていくべきです。

**山河** 今、高校現場では、多くの教師が「学力とは、人間的な成長が土台にあってこそ、定着していくものである」と考えています。教室でも、人間的素地をつくることに多くのエネルギーが注がれていますから、高校時代につくった軸・身に付けた力を大学が責任を持って評価する仕組みが望まれますね。

## 高校の内外でタフな経験を積ませる

**喜多埜** ソフトバンクモバイルでも、近年、グローバル化によって働き方は大きく変わっています。海外事業に携わる可能性は全社員にあると言えます。しかし、変化はそれだけではありません。ベネッセコーポレーションが介護など新しい分野に進出しているように、情報・通信業のソフトバンクも、最近は感情認識

慶應義塾学事顧問
**安西祐一郎** あんざい・ゆういちろう
前・慶應義塾長。文部科学省中央教育審議会大学分科会会長、教育再生懇談会座長などを歴任。

ソフトバンクモバイル株式会社 常務執行役員
**喜多埜裕明** きたの・ひろあき
ヤフー株式会社取締役、BBモバイル株式会社取締役などを経て、現職。株式会社ULA取締役を兼任。

株式会社ベネッセコーポレーション 取締役
**山河健二** やまかわ・けんじ
高校事業関連の営業担当、高校事業営業本部長、高校事業部長などを経て、現職。

ロボットの開発など、新しい分野に挑戦しています。そのため、今日までスマートフォンのコンテンツ開発を担当していた社員が、明日からロボット開発に携わる現実が実際にあるわけです。そうした環境変化に自己修正しながら対応できるのは、やはり学び続けることが出来る人、ものの考え方を知っている人です。

**山河**　変化を厭わないタフな修正力は、高校時代のいろいろな体験を通しても身に付けられるものでしょう。例えば、部活動や学校行事に全力を尽くした生徒が社会でタフに活躍できるのは、リーダーとフォロワーの両方を豊かに体験しながら修正力の素地を培ったからだと考えられます。

**安西**　これまでにもあったそうした教育の場を大切にする一方で、今後は、高校という枠から離れた世界に生徒を送り出すことも重要だと思います。例えば、高校生のうちに企業の現場の本当の厳しさを知ることが出来れば、彼らはタフでありたいと切望するようになるでしょう。社会で求められるタフさを持っているかどうかは、すなわち「自分からやるか、言われてやるか」の違いだと思うのです。高校という枠の中では教師が導いてくれますが、社会に出るとそうはいきません。自分から動くタフさが求められる場面を学校の内外にこだわらず、意図してつくることが大切でしょう。私が理事長を務めるFuture Skills Project研究会（＊以下、FSP研究会）に参加する大学では、入学直後から産学協同で授業を行っていますが、そこでは、社会人講師にも答えが見えない問題に、初めて会ったばかりの学生がチームになって取り組みます。そうした、自分でやるしかない状況を高校時代にもつくってほしいと思います。

「達成感と挫折感を交互に味わいながら、自分の可能性を広げる場を学校の外にもつくっていくべき」**安西**

「先生には、変化に向き合う楽しさ、そこから得た気付きを自分の言葉で生徒に語ってほしい」**喜多埜**

**山河**　FSP研究会に参加する中で、私にも想定外の発見がたくさんありました。その1つが、タフなチャレンジを体験した大学生が、一般教養などの座学にも真剣に取り組むようになったことです。社会人と話し合ったり、仲間と課題について考えたりする中で、教養や背景となる知識がないと前に進まないことを実感し、学びに向き合う上での軸が出来たのでしょう。タフな体験を経て、社会は学び続ける場であるということを痛感したのだと思います。

## 異質なものと出合うほど生徒の可能性は広がる

**安西**　学校外の機関とも連携しながら、これまでの高校での学びとは一線を画するような異質な場面をつくり、修正力を育むタフな体験を生徒に提供できるか。教師自身のバイタリティが問われていると思います。

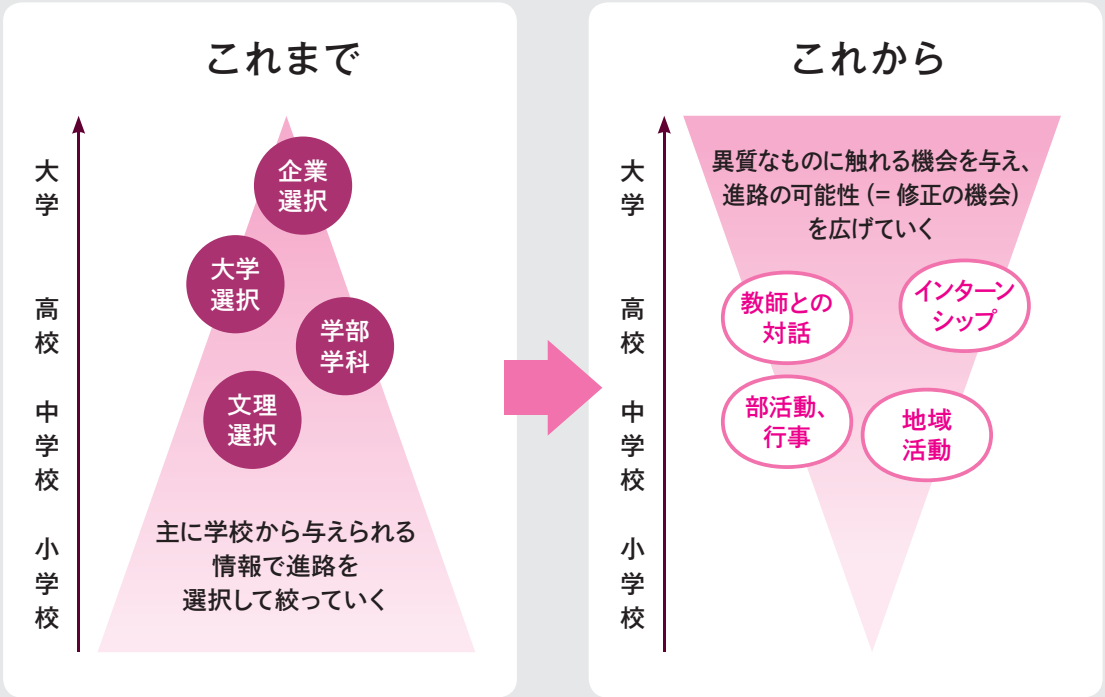
**喜多埜**　高校の先生が生徒以上に社会の変化を知ることが大切だと思います。だから私は、学校の先生にもインターンシップに参加してほしいと思っています。参加すれば、きっといろいろな発見があり、生徒への言葉も変わるでしょう。

**山河**　FSP研究会の活動も、最初は大学教育の中では異質な存在でしたが、今では少しずつ活動の輪が広がっています。きっと、変化に向き合うためには、教師が異質なものを恐れてはいけないのでしょうね。異質なものを恐れる限りは、実はそれがチャンスであっても、脅威として目に映り続けます。

**喜多埜**　Eコマースにしろ、インターネットオークションにしろ、最初は「そんなえたいのしれないものに参加する者なんかいない！」と皆が異質なものだと捉えていました。しかし現実には、一気に広まって、大きな社会構造の変化をもたらしました。「無理だ」「違う」と目を背けるか、良いチャンスだと前向きに捉

＊「社会で活躍できる人材をどのように育成すべきか」をテーマに、企業人と大学人が問題を共有し、主体性と応用力を持った学生を育てる「産学連携」や「アクティブ・ラーニング」「PBL（課題解決型学習）」などのカリキュラムの研究・開発に取り組む。ウェブサイトは、http://www.benesse.co.jp/univ/fsp/

## 進路選択の三角形を逆にして考えてみると……




年齢と共に進路が絞られていくイメージ。自分が掲げた目標を達成することが成功であり、出来るだけ描いたコースから外れないように努力をする。

年齢と共に増える経験、身に付けた知識・スキルを生かして、選択できる進路が広がることを自覚する。状況に応じて目標や目標到達手段を修正する。その際、修正するかどうかの判断の基準となる軸が必要になる。

えるかで、変化の受け止め方は全く異なります。では、生徒を指導する先生は、「変化はチャンスなのだ」という気持ちを持っているでしょうか。先生が変化をチャンスと捉え、そこでの気付きや楽しさを自分の体験から生まれた言葉で生徒に語ることが出来れば、先生は変化する社会をリアルに、しかも共感度高く提示できる存在として生徒の前で輝くのだと思います。

**安西**　変化に対応する修正力とその土台となる軸があれば、人は達成感と挫折感を交互に味わいながら、自分の可能性を広げ続けることが出来ます。私は、幕末期と現代を比べて、似ていることが2つあると考えています。1つは急激にオープンカントリーになっていること、そしてもう1つは、若い人にチャンスが広がっているということです。喜多埜さんもおっしゃっている通り、私たちは「今、チャンスが広がっている」と若い世代にもっと知らせ、小さな挫折と達成を繰り返すことで軸と修正力を育む多様な場をつくっていかなければと思います。

**山河**　生徒は高校生活の中で様々な進路選択を行いますが、ややもするとその度に自分の進路が狭まっているようなイメージを持つことがあります。しかし実際には、授業で知識を身に付け、部活動や学校行事でタフな体験をし、異質なものと出合っていくことで、自分の可能性はむしろ広がっているはずなのです。自分の力を信じ、軸を大切にしながらも、自分を柔軟に修正して、多様なチャンスを生かすことが出来る若者を育てるために、私たちも高校の先生方と共にチャレンジを続けます。

「自分の可能性が広がっていることが分かれば、変化を恐れず、自分を修正することが出来る」山河

インタビュー

# 「軸」を持ち、しなやかに生きる！変化に向き合った3人の生き方

国際化や高度情報化、高齢化と少子化……これからの社会環境の大きな変化を示すキーワードは様々だ。しかしそのいずれもが、既に今、着実に進行しているものであり、人々の人生を翻弄する。環境変化に流されることなく、たくましく変化を受け入れ、自己のあり方を修正してきた3人がそれぞれの生き様を語る。

## 職場や業務が何度も変わる中、変化を楽しみ、自身の成長を期待するたくましさを身に付ける

Class-i株式会社 プロダクト部 企画グループ **鳥山恵美子**さん

今の時代は会社員でも、勤めている会社でM&A（企業買収・企業合併）があったり、ジョイント・ベンチャー（合弁事業）や関連会社への出向を命じられたりするなど、本人の意思にかかわらず職場環境が激変することは珍しいことではない。

現在、通信サービス会社のソフトバンクモバイル株式会社に籍を置きつつ、同社と株式会社ベネッセコーポレーションとの合弁会社・Class-i（クラッシー）に出向している鳥山恵美子さんも、そうした職場環境の変化を経験してきた1人だ。

働く者にとって、予期せぬ環境変化は、時に精神的にも身体的にも少なからぬ負担となる。しかし鳥山さんは、「不安よりも、この職場でどんな成長が遂げられるのかという期待の方が大きい」と環境変化を成長のチャンスと読み換える。鳥山さんの仕事に対する考え方や姿勢から、変化の時代を生き抜く力を探る。

### 2回の社名変更と2回の出向を経験

2002年、大学を卒業した私が就職したのは、携帯電話会社のJ-PHONE（ジェイフォン）という会社です。しかしJ-PHONEは、イギリスに本社を持つボーダフォンの傘下になり、03年には会社名もボーダフォン株式会社になりました。社名の変更と共に経営陣や上司が入れ替わり、会社の雰囲気も大きく変わりました。イギリス人やドイツ人など多様な国籍の人たちによって経営陣が構成され、私の直属の上司もオランダ人になりました。当然、仕事に関する資料は全て英語で作らなくてはいけません。また、外資系企業は意思決定の速度が速いため、私たちはそれまで以上のスピード感を持って仕事に取り組むことが求められました。

そうした社風や働き方に慣れたのもつかの間、06年にはボーダフォン株式会社の日本法人がソフトバンク

に買収されました。このようにして私は、ソフトバンクモバイル株式会社の社員として働くことになったわけです。

私は仕事の内容の面でも、これまで様々な業務に携わってきました。J-PHONEに入社して最初に配属になったのは、携帯電話のメール機能やウェブ機能など、プラットフォームと呼ばれる基礎部分の規格を決める部署でした。会社がボーダフォンに変わってからしばらくすると、携帯電話の発売前に携帯電話の機能の動作テストを管理する部署に異動になりました。

そして、会社がソフトバンクモバイルに変わってからは、私は音楽コンテンツに関する部署で働くことになりました。そこでは、楽曲の権利を持っている会社と交渉をしながら、ユーザーが好きな楽曲を携帯電話の着信音や呼び出し音に使用できるようにするなど、様々な配信サービスを実現していく仕事に携わりました。

この部門は、私が携わっている間にもどんどんマーケットが拡大していきました。そのため、音楽や映像の配信サービス専門の会社を設立することになり、ソフトバンクモバイルとエイベックスグループとの合弁で、ULA（ウーラ）という音楽・映像配信サービス会社を設立しました。私もソフトバンクモバイルからULAへと出向になりました。

そして出向が終わり、ソフトバンクモバイルに戻ると今度は、ベネッセコーポレーションと合弁会社をつくることになりました。ベネッセコーポレーションとの合弁会社・Classiは、高校の先生方が生徒の出欠状況や成績の管理などをパソコンやタブレットを活用して行える校務支援システムの開発とサービスの提供を事業の柱としています。私は、合弁会社の設立準備業務を行うことになり、再び出向を命じられました。現在はプロダクトマネージャーとして、来年度から本格的に高校の先生方にサービスを提供することを目指し、現在準備を進めているところです。

**とりやま・えみこ**◎名古屋大情報文化学部卒。J-PHONE株式会社に入社後、企業買収によりボーダフォン株式会社、ソフトバンクモバイル株式会社と会社組織が変遷。その間、携帯電話に搭載するプラットフォームの企画、楽曲や映像といったコンテンツサービスの企画など様々な業務に携わる。

## サッカーで言えば中田英寿さんのような役割

このような話をすると、「経営陣が突然外国人に代わったり、2回も出向を経験したりと、さぞかし大変な思いをしてきたのではないか」と思う人もいるかもしれません。けれども私自身は、それほどつらいと感じたことはありません。というのは、「どんな職場で、どのような仕事に取り組む時でも、求められる力は根本的には実は同じなのではないか。その力さえ身に付けておけば、どこでも何とかやっていけるものなのではないか」と思うからです。

少し古い例えになってしまうのですが、私はプロダクトマネージャーという役割を、元プロサッカー選手の中田英寿さんが現役時代に果たしていた役割と同じだと思ってきました。中田さんは守備陣と攻撃陣をつなぐ司令塔の役割を担っていましたが、私の仕事もそれと似ているのではないかと思うのです。

私たちの仕事は大きく、次の2つ

## 「どんな職場でどのような仕事に取り組む時でも、求められる力は根本的には同じだと思います」

に分けられると思います。1つは、特定の分野について深い知識や技術を持つ「スペシャリスト」。もう1つは、そのスペシャリストをコーディネートしたりマネジメントしたりしながら、より良い成果を上げることを目指す「ジェネラリスト」です。

私の場合は明らかに後者です。例えば、今Ｃｌａｓｓｉで取り組んでいる校務支援システムの開発にしても、私がシステムを開発するわけではありません。システムエンジニア（ＳＥ）に成果物の仕様とイメージを伝えて、実際の設計や開発はその方々にお願いすることになります。また、完成した商品・サービスを学校の先生方に紹介するのも、私ではなく営業担当者です。そのため営業担当者に対し、商品・サービスのセールスポイントを分かりやすく伝えることが私の役割となります。

サッカーの場合は11人のプレーヤーがいますが、仕事もまた、多くの人たちの協力によって成り立っています。ですから司令塔である私には、的確なタイミングで、適切なパスを相手に出すことが求められます。しかも、相手の性格や得意・不得意、知識や技術の深さによって、「この人については細かく指示を出した方がいい」とか、「この人の場合は、大まかな方向性だけ伝えておいた方が良い仕事をやってくれそうだ」と、相手に合わせてパスの種類やコース、速さを変えていくことも重要になるわけです。音楽配信サービスにかかわる時でも、校務支援システムの開発に携わる時でも、必要とされるベースの力は同じで、それはコミュニケーション力やマネジメント力といったものです。

もちろん、通信サービス会社で仕事をしていく上では、通信やＩＴに関する基本的な知識は必要不可欠です。また、音楽配信サービスや教育サービスに携わる時にも、音楽ビジネスや学校現場に関する一定の知識がそれぞれ必要になります。そのため私は今、教育関連の知識を一生懸命蓄積しているところです。

ただ、最も重要なのは、様々な人と協力しながら円滑に仕事を進めていくためのコミュニケーション力やマネジメント力を磨くことです。そうしたベースの力さえ身に付けておけば、たとえ職場環境が急変したり、携わる仕事が変わったりしても、その変化に適応することは十分に可能だと思うのです。

### ジェネラリストかスペシャリストかを意識する

私が高校時代や大学時代に、「自分はスペシャリストよりもジェネラリストに向いているのではないか？」といったことを考えていたかというと、決してそうではありませんでした。

ただ、高校時代を振り返ってみると、やはり当時からジェネラリストタイプだったと思います。何にでも興味を持って物事に取り組む半面、部活にしても習い事にしても、何か1つのことを究めることは苦手でした。また、私は理系クラスに所属し

ていたのですが、進学先として選んだのは工学部でも理学部でもなく、学際系の情報文化学部でした。そして就職をする時にも、情報文化学部ではSEの職業を選ぶ学生が多かった中で、私自身はどうしてもSEには気持ちが向きませんでした。きっと無意識のうちに、スペシャリストではなくジェネラリストを志向していたのでしょう。

自分がジェネラリストタイプかスペシャリストタイプかは、大学・学部の選択にもかかわってきますから、高校時代から意識しておくに越したことはありません。ですから、高校生が社会人から仕事内容や職業観についての話を直接聞ける機会がもっと増えればよいと思います。社会人をモデルにしながら、「では、自分は何に向いていて、どんな働き方がしたいのだろう」と考えるきっかけになりますから。

ただし、自分がどちらのタイプかは、働いてみないと分からない部分も多くあります。実際に就職して働いて「実は自分の資質は逆だと気付いた」というのはよくあることです。そうなった場合は軌道修正を図り、スペシャリストならスペシャリスト、ジェネラリストならジェネラリストに求められる能力を磨いていくしかないでしょう。一番避けたいのは、マネジメント力もなければ専門性もない中途半端なままで年齢を重ねてしまうことです。

## 前向きに取り組むうちに道は開けてくるもの

変化が激しい時代に必要な力を1つ挙げるとすれば、それは「環境変化をチャンスと捉え、たくましく生き抜いていく力」だと思います。

確かに、ボーダフォン時代に上司が突然オランダ人になり、英語の使用頻度が高くなった時は驚きました。けれどもその環境変化を受け入れられたのは、「普通に会社員をやっていても、なかなかこんな体験は出来ない。大変そうだけれど面白そうだ」と、ポジティブな思考になれたからです。一方でそうした思考になれない人の中には、会社を辞めていく人も少なからずいました。

事実、前向きな気持ちを持って物事に取り組んでみると、道は開けてくるものです。英語も最初は悪戦苦闘しましたが、1年も使い続けていると、上司の英語を聞いたり、文書を読んだりすることが、それほど難しいことではなくなりました。

むしろ、実務の上で苦労したのは、日本の携帯電話市場の特殊性を外国人の経営陣や上司に理解してもらうことでした。海外には携帯メールにおける絵文字文化がありません。ですから、絵文字機能を入れるだけでも「そのような機能の必要性が分からないから不要だ」と強硬な反対に遭ったのです。価値観が異なる人たちを説得するのは、確かに骨が折れる作業でしたが、それも私にとって貴重な経験だったと今は思います。

そうした経験を積み重ねるうちに、「自分はどこでだって生きていける」という自信も付いてきます。最近、ソフトバンクモバイルはアメリカの会社を買収したので、アメリカに転勤になった社員が数多くいます。私がもしアメリカに転勤になったとしても、自分にとっての楽しい変化だと受け止めるでしょう。

しかし今の私がやるべきことは、Classiの校務支援システムの事業を無事軌道に乗せることです。実はこの事業で私は、ボーダフォンの時以上の異文化ギャップに直面しています。私はこれまで学校現場とは全く無縁の仕事をしていたので、どうすれば先生方に価値のある提案が出来るのか、よく分からないことがたくさんあります。

でも、これも経験です。それに、学校文化を熟知していない私が、このプロジェクトに参加したことにも意味はあると思うのです。学校という文化になじんでいないからこそ、違った視点で物事を考えることが出来るのではないかと思っています。そして、そこからより良い価値を持った商品・サービスが生まれる可能性もあるはずです。

この新しい環境に適応できれば、私自身、また確実に一歩成長を遂げることが出来ると思っています。

# 固定概念から自身を解き放ち「出来る方法」を考え続け創造的過疎の実現を目指す

NPO法人グリーンバレー理事長　**大南信也**さん

地方の過疎・空洞化と大都市への人・産業の集中は、日本が直面する重要な課題だ。止めることが困難に思えるこの大きな流れに、確かな変化をもたらしたとして、徳島県・神山町が全国的に注目されている。その理由の1つは、1955年の町誕生当時の3割以下にまで人口が減り続ける中で、2011年に初めて転入者が転出者を上回ったこと。前年比12人のわずかな増加だが、社会動態人口の増加は町の歴史で初めての現象だった。そしてもう1つは、ここ数年、ITベンチャー企業など約10社が神山町にオフィスを開き、更に世界に名を知られるIT大手企業が、社員研修の場所として東京から遠く離れた四国の山間部にある神山町を選ぶようになったことだ。

過疎と高齢化にあえいでいた小さな町に、どのようにして新しい光がともったのか。「日本の田舎をステキに変える！」をミッションに、アートによるまちづくりや、起業・移住者支援を行うNPO法人グリーンバレーの理事長、大南信也さんに新たな変化を自ら生み出そうとする生き方を聞いた。

## 公共事業に頼らない地域づくりのあり方を模索

アメリカの大学院で学んだ後、神山町で家業の土木・建設業を継ぎました。公共事業で山間部に道路を造ると、地域の人々は「これで生活しやすくなった」と喜んでくれて、私も自分の仕事にやりがいを感じていました。しかし、町は便利になっているはずなのに、町を離れる人の数は減らず、独り暮らしのお年寄りや老夫婦だけが残った集落を目にする度に、「公共事業に頼らない、新しい地域づくりのあり方を考えなければ……」と思うようになりました。

転機になったのは1991年、神山町とペンシルベニア州ウィルキンスバーグ市の交流事業にかかわったことです。私の母校の小学校に、アメリカから送られてきたアリスと名付けられた青い目の人形がありました。昭和初期、日本との友好親善のために1万2000を超える数の人形が贈られたのですが、日米開戦と共に人形は反米運動の対象となり、そのほとんどは壊されてしまいました。しかし、一部は難を逃れ、そのうちの1体が神山町の小学校に残されていたのです。

当時、小学校のPTA役員だった私は、人形に付属していたおもちゃのパスポートに、ウィルキンスバーグ市の名が出身地として記されていることに気付きました。「この人形の送り主はまだ生きているかも……」と興味を持った私がウィルキンスバーグ市長に手紙を書いたところ、半年ほど経って「送り主が分かった」と返事が来たのです。

「アリスを里帰りさせよう」という有志により「アリス里帰り推進委員会」が結成され、アリスと共に訪米を実現しました。これがきっかけで、民間団体の神山町国際交流協会（2004年にNPO法人グリーンバレーに改組）が生まれたのです。

## 芸術家に行きたいと思わせる充実した制作環境をつくる

協会は立ち上げたものの、目に見える大きな変化はすぐには町に起こりませんでした。ただ、私の周りには「アリスの里帰りは、とにかく面白かったなあ」と感動を共有した仲間がいました。「また面白いことをやりたい！」という挑戦する風土が生まれていたのです。

協会が出来て7年ほど経った頃、県が神山町に国際文化村をつくる計画を立ち上げました。そのような計画は、一方的に与えられたものだと、うまくいきません。だったら「こんな国際文化村をつくりましょう」と、

逆に住民から県に提案しようということになりました。私たちは「これからは、国や県がつくった施設を住民自身が管理する時代になる」と考えたのです。

芸術による町おこしは、ほとんどの場合、有名な芸術家の作品を置くことで観光客を呼び込み、地域を振興させようとするものです。そのためには、有名な芸術家を呼ぶ資金が必要ですが、神山町にはそんな資金はありません。また、芸術の専門家もいないので、そもそも作品を評価する仕組みもありませんでした。

そこで、私たちは考え方を変えました。有名な芸術家を潤沢な資金で招くことは出来ないけれど、アーティストから「日本で制作活動をするなら神山町だよね！」と言われるほど充実した制作環境を町につくることは出来るのではないかと。実際、日本の田舎の風景に憧れる海外のアーティストは少なくありません。私たちは、神山町に住みながら作品を作りたいアーティストを毎年3名ほど募り、宿舎とアトリエを準備し、住民が制作をサポートするプログラム「神山アーティスト・イン・レジデンス（KAIR）」をスタートさせました。

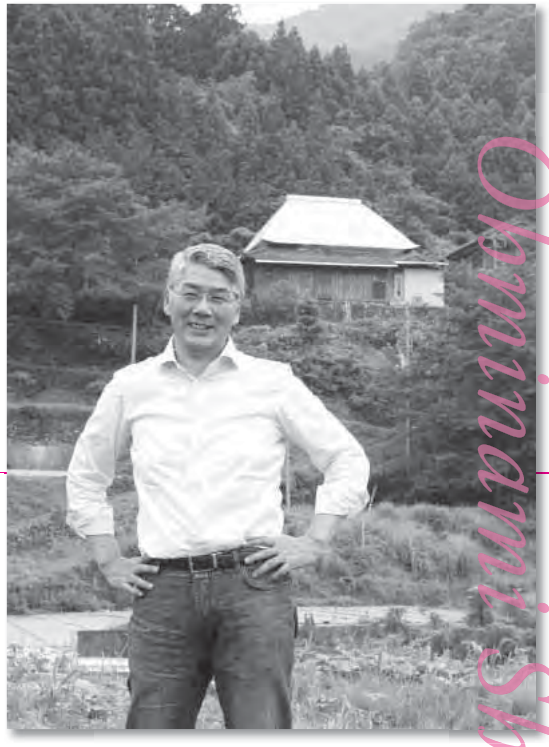
1999年にプログラムが始まると、制作が終わった後も神山町に住み続けたいと希望するアーティストが毎年出ました。町内の空き家の持ち主との折衝を手伝う中で、私たちの中に移住者支援のノウハウが蓄積されていきました。私たちは活動をビジネス面で強化するため、制作滞在を希望するアーティスト向けの旅行プログラムを考え始めました。2006年には町内全域に光ファイバー網が敷設されたこともあり、08年にアーティスト向けWebサイト「イン神山」を立ち上げたのです。

Webサイトの公開によって、私たちはある事実を知りました。それは、一番読まれたのはアートの記事ではなく、古民家情報のページだったということです。田舎での生活に関心を持っている人は少なくない。それならば、田舎に来てゼロから仕事を探してもらうのではなく、アーティストのように最初から田舎で出来る仕事を持った人に移住してもらえばよいのではないか。私たちは、「田舎は仕事がないから住めない」という固定概念から少しずつ自由になっていったのです。

## 移住者の逆指名と田舎を武器にした企業誘致

08年の団塊の世代の大量退職で、地方への移住希望者が増えると予測され、移住者支援を行う部署が全国の自治体につくられました。神山町にも移住者支援交流センターがありますが、ここがユニークなのは、役場が管理運営するのではなく、私たちグリーンバレーに業務委託されていることです。アーティストの移住支援で培ったノウハウが期待されたわけです。

私たちが行ったのは、将来町にとって必要な働き手や起業家を、受け入れ側から逆指名する「ワーク・イン・レジデンス」という取り組みです。例えば、神山町には石窯で焼くパン屋がなかったので、「この空



Oomiminamishinya

おおみなみ・しんや◎スタンフォード大大学院修了。神山町国際交流協会を立ち上げ、住民主導のまちづくりを行う。アーティストや起業家の移住・起業支援、若者の就業支援などユニークな事業を多角的に展開。NPO法人グリーンバレー理事長。有限会社大南組、大南コンクリート工業株式会社社長。内閣官房のふるさとづくり有識者会議委員。

き家はパン屋をやりたい人だけに貸し出します」などと公開するのです。先に職種を限定することで、町がデザインできるわけです。

また、一般的な移住者支援は、移住希望者にどんな古民家に住みたいかを聞くところからスタートします。一方、私たちは希望の物件を聞く代わりに、「あなたの夢や志、神山での生活設計のビジョンはどのようなものですか」と尋ねます。移住者を逆指名するなど、従来の町おこしでは非常識ですが、移住者は自分が必要とされていることを実感して神山町に住むことが出来ます。古くからの住民も「グリーンバレーが信用した人なら……」と移住者を受け入れやすくなります。

更に私たちは、空き家になった商店街の長屋の一角を改修し、クリエイター用のオフィス兼住居をつくりました。アメリカなどでは本拠地から離れた場所にサテライトオフィスを持ったり、在宅勤務を認めたりすることが当たり前になっていて、先端企業の開発者たちが、豊かな自然に恵まれた環境で生産性高く働いています。光ファイバー網が整備されている神山町のメリットを生かして、空き家を改修し、サテライトオフィスに整備することで、全国、そして世界から建築家や映像クリエイター、IT企業が、豊かな自然環境の中での仕事、生活を求めて集まってくるようになったのです。

## 社会の大きな流れに抗う いくつかの方法がある

神山町は今、地域再生の新しい形として注目され、全国の自治体などからの視察が絶えません。変化の要因はいくつかありますが、その1つは、私たちが困難な状況を感情で考えないように努めたことです。

例えば、過疎について人々は「悲しい」「つらい」と感情では語りますが、それがどういう状態で、どうなれば改善するのか、数値化して把握することをあまりしません。私たちは徳島大の人口問題の研究者にシミュレーションを依頼し、神山町では毎年子どもを持つ5世帯を呼び込もうなどと、目標を具体化しました。目標が明確にならない限り、課題への対策はやみくもなものに終わり、対策を講じている側にも成果が見えず、疲労感がたまっていきます。

古民家を改修したガラス張りのオフィスには、スーパーハイビジョン画像の編集・保存を行う企業が入っている。

ただ、「5世帯」というのもあくまで目安でしかありません。何としても達成すべき目標として設定し、数にこだわり出すと、「神山町の生活には合わないのではないか」と思う人も受け入れるようになってしまうからです。ともすると、いったん目標を立てたらそこまで1本の線を引き、線から外れることなく達成しようとしがちです。しかし、現実には計画通りにいかないことがほとんどで、実行者である本人たちも「何か違うな」と薄々分かっていながら、計画を立てた前任者や上司の顔を立てて、突き進もうとします。一方、私たちはこちらの道の方が面白そうだと思ったら、迷わずその道を選択してきました。

空き家を再生したオフィスの内部。東京に本部機能を持つNPO支援会社のサテライトオフィスとして利用されている。

また、成果を焦らないことも大切です。町おこしなどを目的に支給される行政の補助金の多くは3年、5年単位で支給されます。しかし、3年、5年程度では、周囲はもちろん、取り組んでいる本人にさえ変化は見えないのが現実です。結局何も変わらなかったと失望しながら補助金の支給が終わってしまうことも少なくありません。でも本当は、5年目くらいからやっと本人に変化の兆しが

感じられ、10年経つ頃になってようやく周囲に変化が伝わり始めるものです。変化を起こし、それを伝えるにはそのくらい時間が掛かるものです。私たちが焦らずにやってこられたのは、「アリスの里帰り」で感動を共有した仲間が、「また面白いことが出来るはず」と新しい展開を信じることが出来たからです。

## 固定概念から自由になり創造的過疎を目指す

私は、過疎を止めることは基本的には不可能だと思っています。しかし、そこに住む人々の年齢構成が健全化され、そこで働く人々の職種が多様化された上での抑制の利いた「創造的過疎」は実現できると思っています。そのためには、「山間部の仕事は農林業」といった先入観は捨てるべきです。山間部に若いデザイナーやエンジニアが集まり、働き方が多様化し、家庭を築けば、地方はまだまだ持続していくでしょう。また、日本には、力はあるのに活躍の場に恵まれていない若者がたくさんいます。地方は、そうした人たちの活躍の場になれるはずです。

「一歩踏み出すことで立ち位置が変わり、マイナスの中にプラスが見付かることもあるのです」

変化を生むには、「難しい」「出来ない」と言いたくなる気持ちを抑え、出来ない理由より出来る方法を考えることが大切です。実はサテライトオフィスは、「本社の社員が循環するだけで現地では雇用は生まれない」と言われていました。しかし、実際には既に30人以上の雇用を生み、移住する若者も増えています。物事はやってみないと分からないものです。本に「サテライトオフィスは雇用を生まない」と書かれているから諦めるのか、ひょっとすると何か方法があるかもしれないと考え続けるのか、その2つの思考の仕方は全く異なります。今、神山町の子どもたちは、「田舎には仕事がないとずっと言われてきたけれど、実は農業や林業以外でも働くことは可能なのかもしれない。そのためにどんな力が必要なのだろうか」ということを考えているはずです。

人は一歩踏み出すことで立ち位置が変わり、今まで見えなかったものが見えるようになります。行動することで、マイナスに思えた状況の中にプラスの要素を見付けられることもあるのです。固定概念に縛られて多くの人はそれに気が付きませんが、固定概念から自由になることで大きなチャンスをつかむことが出来るかもしれないのです。

社会は大きく変化しており、しかもその変化は理路整然としたものではありません。先を読むことなど誰にも出来ないのです。だから、自分の中に小さな成功を積み重ねながら、挑戦し続けるしかありません。人生とは、経験を生かしながら繰り返す実験なのだと思います。

# 想定外のリストラを機に、自分の生き方を見つめ直し本当にやりたいことに踏み出す

ファイナンシャル・プランナー **花輪陽子**さん

自分が理想とする生き方や夢を実現するためには、少なからずお金の準備が必要になる。住宅ローン、教育資金、年金制度、保険、資産運用、税金、不動産など、お金に関する幅広い知識を備え、希望する生き方や夢をかなえるための資金計画を一緒に考え、サポートしてくれる専門家がファイナンシャル・プランナー（以下、FP）だ。

花輪陽子さんはFPとして、暮らしとお金をテーマとした書籍を何冊も出版しており、テレビ出演や講演活動も精力的に行っている。ただし、花輪さんは最初からFPを目指していたわけではない。様々な経験を積む中で、FPという自分の職業や生き方を定め、キャリアチェンジを図っていった。

花輪さんはこれまでの人生のターニングポイントにおいて、何を基準にどんな選択を行ってきたのだろうか。そして、環境の変化に対応しつつ、自らキャリアを築き上げていくために、どのような力を発揮してきたのか。花輪さんに、自身のライフヒストリーを語っていただいた。

## 自分に向いたものを探す中でFPの仕事に興味を持つ

私がFPになるための準備を始めたのは、勤めていた外資系の投資銀行を退職する1年前のこと。29歳の時でした。当時の私は会社の中でやりたい仕事が出来ず、悶々とした日々を過ごしていました。

大学卒業時、就職先として外資系の投資銀行を選んだのは、海外を相手にした営業やトレーディング（＊1）の仕事に携わりたかったからです。私は国際政治経済学部で国際政治学や経済学、経営学などの科目を履修したのですが、その中で一番興味を持てたのが経済学系の科目でした。そこで、就職活動では金融機関を志望し、好きな英語を生かせる職場ということで外資系を選択したのです。

ところが私が配属されたのは、希望していたトレーダーや営業職などのフロント部門ではなく、彼らをバックアップする事務部門でした。もちろん事務職も大切な仕事ではあるのですが、「もっとバリバリ働きたい」「新しい仕事をどんどんやりたい」と思っていた私には、不本意な配属でした。何とか状況を変えるべく、上司との面談の時には自己アピールをしましたし、研修にも積極的に参加してスキルアップを図りましたが、希望をかなえることは出来ずにいました。

また、私はその頃、違う意味でも「このままこの仕事を続けてよいのだろうか」と思い悩むようになっていました。一口に金融機関といっても、法人向け事業と個人向け事業がありますが、私が勤めていた会社は法人向けに特化していました。しかし、私がやりたいのは、個人向けの事業ではないかと考えるようになったのです。

当時の私は、仕事のストレスのはけ口をショッピングやお稽古事に求めていて、その結果、２００万円のカードローンを抱えていました。私だけではなく、この業界で働いている人は、実は浪費家が少なくないのです。そうしたこともあり、「会社の取引で発生する億単位のお金はきちんと管理できるのに、どうして自分のお金についてはルーズになりがちなのだろう？」という素朴な疑問を抱き、いつしか個人の資産管理に興味を持つようになったのです。また、個人のお金の方が、生活に密着している分、実感が湧きやすいということもありました。そこで主に個人を相手に資産管理や資金計画に関する相談・アドバイスを行うFPの資格取得を目指すことにしたわけです。

＊1 株や債券、外貨などを売買すること。

## 人に会い、本を読み ロールモデルを見付け出す

私の大学卒業時の職業選択を振り返ってみると、「金融関係の分野で働きたい」という方向性自体は間違っていなかったと思います。高校や大学時代は、様々な教科・科目を勉強し、経験を積む中で、自分の興味・関心の「大まかな方向性」を定めることが大事だと思います。大まかな方向性を定めるポイントは、過去やってきたことと大きくずれていないことです。

ただし、その大まかな方向性の中から、本当に自分に合った職業や働き方を見付けるには、実際に働いてみながら、軌道修正を図るしか方法はありません。私の場合は「法人向けから個人向けの事業へ」と修正を図ったわけです。

私がFPを目指すことにしたのは、スージー・オーマンというアメリカのFPの著書を読んだこともきっかけとなりました。オーマンさんは証券会社で働く女性だったのですが、虚栄心からお金を使いすぎてしまい、数千万円単位のカード地獄に陥りました。その経験を生かし、お金との付き合い方を人々に啓発していくためにFPになったという方でした。私はオーマンさんの著書を、自分の体験に重ね合わせるようにしながら読みました。

自分の生き方を探す時には、私がオーマンさんと出会ったように、「あの人のようになりたい」というロールモデルに出来る人を見付けることがポイントになります。そのためには、いろいろな方にお会いして話を聞くのが一番ですが、会いたい人に会えない場合は、その人が書いた本やその人に関する本を読めばよいのです。読書はロールモデルを見付ける上での手助けとなります。

また、自分が何となく興味を抱いていることが、本当に自分に合ったものかどうかを判断するには、小さな試みをたくさんしてみることが大切だと思います。私もFP以外に、米国公認会計士の資格取得のための勉強をしていた時期がありました。FPと米国公認会計士で必要とされる知識やスキルには似た部分がありますし、両方の資格を持って活躍されている方はたくさんいます。

しかし、米国公認会計士の勉強を始めてはみたものの、いくら取り組んでも、この資格を取った後に会計監査の仕事をしている自分の姿をどうしてもうまく想像することが出来ませんでした。そこで、米国公認会計士の勉強は途中で断念しました。ただし、挑戦したこと自体は後悔していません。自分に合っているかどうかは、やってみないことには分からないからです。

## 思い通りにいかないことを チャンスと捉えるようにする

FPの勉強を始めたものの、その時点では独立をすることまでは考えていませんでした。ところが、想定外のことが起こりました。会社からリストラを宣告されたのです。いかにも外資系らしく、解雇を告げられたその日に会社を去らなければいけないという急なものでした。

Hanawa Yoko

はなわ・ようこ◎青山学院大国際政治経済学部卒。外資系投資銀行に入社するも、リーマンショックのあおりを受けて失業。後に、ファイナンシャル・プランナー（FP）の資格を取得して独立。講演や執筆など多方面で活躍。『夫婦で貯める1億円！』（ダイヤモンド社）、『大増税時代を生き抜く共働きラクラク家計術』（朝日新書）など著書多数。

当時は金融業界がリーマンショックに見舞われていた時期で、私が勤めていた会社でも人員整理が行われ、私もリストラの対象になったのです。

リストラを宣告されるというのは、働く側にとっては屈辱的なことです。私の周囲を見ても、すっかり落ち込んでしまい、しばらく立ち直れない人が何人もいました。けれどもその一方で、「この悔しさをバネにして、逆境を跳ね返してやろう」と、気持ちをすぐに切り替えられた人もいました。

私の場合は後者でした。正確には2つの感情が自分の中に湧いてきました。1つは「悔しい、絶対に見返してやろう」という気持ち。そしてもう1つは「これを再スタートのチャンスにしてしまおう」という開き直りの気持ちでした。ですから私は、解雇された直後はさすがに落ち込んだものの、翌週からはアクティブに動き出すことが出来ました。ちょうど2か月後に、NPO法人日本FP協会が認定する上級資格「CFP®（＊2）」の試験が近付いていました。そこで、失業保険をもらいながら受験勉強をして試験に一発合格し、そのままFPとして独立することに決めたのです。

「生き方、働き方は、『一度定めたらそれで決まり』というものではなく、常に考え、修正していくものだと思うのです」

人生は思い描いた通りにいかないことの連続です。私の場合は、就職先で希望していた職種に就けず、更にはリストラにまで遭ってしまったわけですから。私は、大切なのは、「人生は、思い描いたキャリアプラン通りには進まないものだ」ということをまず知っておくことだと思うのです。そして、物事がうまくいかなかった時には、「この挫折は自分が何をしたいのか、どう生きたいのかを、一度立ち止まって考えられるチャンスなのだ」と捉えるのです。人は物事が順調に進んでいる時よりも逆境に向き合っている時の方が、自分の人生をより真剣に見直すことが出来ます。

そうした姿勢で物事に臨めるかどうかが、挫折をした時に落ち込んで立ち直れなくなる人と、挫折をきっかけに、より良い方向に自分の人生を修正していける人との違いになるのではないかと思います。

## 生き方、働き方は常に考え、修正していくもの

FPには、大きく2つの働き方があります。1つは生命保険会社や証券会社に社員として所属し、相談業務などを行うパターン。そしてもう1つは独立をして、執筆業や講演業、個人相談業務などで収入を得ていくパターンです。

現実には、ほとんどのFPは金融機関の社員として働いています。しかし、私はFPの資格を取った時点で、独立することを考えていました。私がFPを志すことにしたのは、「多くの人が、不安の少ない充実した人生を送れるように、お金の面からサポートをしていく仕事がしたかった」からです。けれども生命保険会社や証券会社に就職すると、自分がその商品のことをどう思っているかは別として、まず会社の商品をお客

＊2　CERTIFIED FINANCIAL PLANNER®。CFP®は、米国外においては Financial Planning Standards Board Ltd.（FPSB）の登録商標で、FPSB とのライセンス契約の下に、日本国内においては NPO 法人日本 FP 協会が商標の使用を認めている。

様に勧めなくてはいけません。「それはちょっと違うな……」と思ったのです。

もちろん、FPとしては何の実績もない人間が、独立をして食べていくのは決して簡単なことではありません。そもそも私は、会社に所属していないFPがどうすれば仕事を取ってこられるようになるのかさえ、よく分かっていませんでした。そこで最初のうちは、FPの方が集まるいろいろな勉強会に参加して、様々な先輩方からお話を聞き、情報収集をしました。

また、「いきなり大きな仕事を手にするのは無理だから、わらしべ長者方式でやっていこう」とも考えました。まずは、専門誌などにマネープランに関するコラムを書かせてもらいました。そして、そのコラムを実績にして、今度は書籍の編集部を訪ねて、「こんなコラムを書いているのですが、貴社でも書かせていただけませんか」と営業活動をしました。そうやってわらしべ長者のように、少しずつ仕事のスケールを大きくしていき、ついには自分の著書を出版できるところまでくることが出来ました。本を出したことは大きな飛躍となり、取材や講演の依頼が一気に増えました。

## 時に人生の棚卸しをして生き方、働き方を修正する

独立してからの5年間を振り返ると、とにかく忙しい日々だったというのが正直な感想です。私が掲げた目標は、「好きな仕事をして、お金に困らない状態を実現すること」だったのですが、実際にはどんな仕事でも選り好みすることなく全力で取り組んできました。その仕事が自分に合うかどうか、好きかどうかは、何事も本気でやってみないことには分からないからです。やらないうちから選り好みをするのは、自分の可能性を狭めてしまうことになると思ったのです。

しかし、そうやってがむしゃらに働くうちに、私にとってまた大きな環境変化が訪れました。第1子が誕生したのです。今年の4月に長女を出産し、1か月ほど産休を取らせていただきました。

まとまった休みを取ったことは、自分の生き方、働き方をもう一度見直すとても良い機会となりました。これまで私はがむしゃらに働いてきました。けれども子どもが生まれたこれからは、仕事と家庭のバランスを取りながら働いていくことが求められます。仕事に注げる時間は確実に減りますから、時間の使い方をこれまで以上に工夫する必要があります。また、仕事の内容についても、お金になれば何でもよいわけではなくて、子どもに胸を張って言える仕事だけをやっていきたいと思うようになりました。

このように、自分自身の仕事観や生活観は、環境の変化によって常に変わっていきます。ですから、何年かに1回は、人生の棚卸しをしてみることも大切なのだと思います。そうでないと、自分としては望む生き方、働き方をしていたはずなのに、いつの間にかズレが生じていたということにもなりかねません。つまり、生き方、働き方は、「一度定めたらそれで決まり」というものではなく、常に考え、修正していくものだと思うのです。

高校生はこれから自分の人生を本格的にスタートさせる段階です。今後、予測もしていなかったことがたくさん起きるでしょう。大学進学や就職といった場面でも、必ずしも第1志望に入れるとは限らないでしょうし、入れたとしても、「頭で思い描いていたイメージとは違った」というのはよくあることです。

だからこそ、「私は本当は何がしたいのだろう」「何に向いているのだろう」と常に自分自身に問い続けられる姿勢を今のうちから身に付けておくことが出来れば、人生を生きていく上でとても強い武器になると思います。

自分の中に確固たる軸を持ち、変化に柔軟に対応する力を育むためには、高校段階ではどのような指導が求められるのだろうか。次ページでは3人の高校教師が話し合う。

座談会

# 変化を生き抜く力を学校の日常の中で育む

自分の生き方や考え方の軸を定めた上で、必要に応じて目標そのものやそこに至るプロセスをより良いものに修正していく力――想定外の変化に対応するためにも必要なその力を育むには、高校教育においてどのような指導が求められるのか。3人の教師が世代、地域を超えて闊達に話し合った。

## 都市部と地方で異なる生徒の「自己投資」

**編集長**　今回の特集では、変化の大きなこれからの社会を生き抜くために必要な「軸」とその軸に基づいた「修正力」の育成について、大学や産業界の方々に社会の変化の有り様を伺い、更に実際に軸に基づいた修正力を発揮し、環境変化を乗り越えてきた方々にもお話を伺いました。では、学校現場では社会の変化をどのように受け止め、それに対してどのような指導が行われているのか、まず現状を教えていただけますか。

**川村**　社会が変化しているということは、私たち教師も1人の社会人として実感しています。しかし、その変化を受けて、指導を変えようとしている教師はまだ多くはないかもしれません。そして、保護者や生徒は、社会が変化し、将来を見通すことが困難になっていることが分かっているからこそ、より保守的な生き方を選んでいるように思います。地元志向の進路選択をする生徒が多いのも、安心感を求めての選択であり、不確定要素が多く、不安感が増す社会だからこそ、ある程度見通しが利く、慣れ親しんだ地元で暮らそうと考えるのでしょう。

**遠藤**　先が読めないほど、地元志向が強まるというのは私も感じています。3年生の三者面談などで関西や関東の大学名が挙がると、多くの保護者が口にするのは「その大学に進学して就職は大丈夫なのですか？」ということです。先行きが不安だから、せめて自分の目が行き届く地元の大学に進ませて、子どもを支えていきたいと考えるのでしょう。

**安藤**　東京の生徒や保護者の考え方は、真逆だと私は思います。先の見通しが立たないから、自分の価値を少しでも高めようと、留学や第二外国語の習得に関心を持ち、高校の授業以外においても社会で必要とされるスキルを身に付けようと自己投資しているように見えます。しかし、それらは、自分が何をしたいのか、どうなりたいのかを熟考した上での自己投資ではなく、自分の価値を少しでも高められるのであれば何でもいいという、やみくもな自己投資です。

**川村**　これまでの社会は、経済的に

岩手県立一戸高校　副校長
**川村俊彦**　かわむら・としひこ
教職歴30年。同校に赴任して2年目。岩手県立花巻北高校、軽米高校などを経て、現職。担当科目は化学。

厳しい時期がありながらも、比較的明るい将来を見通すことができ、成功のロールモデルを描きやすかったからこそ、チャレンジングな進路選択が出来ました。しかし、今は、「ここで失敗したら将来どうなるのか?」という不安感を強く感じさせる社会であり、半面、様々な情報やデータが入手できるため、自分の将来や伸びしろをある程度予測できてしまう社会でもあります。だから地方の生徒や保護者は、確かな見返りが見込める確実な自己投資を行い、私たち教師も、冒険よりも確実性を求める生徒や保護者の意向を重視するようになっているのかもしれません。

東京都立新宿高校
**安藤直樹** あんどう・なおき
教職歴10年。同校に赴任して3年目。東京都立八王子東高校、小石川中等教育学校を経て、現職。担当科目は物理。

**安藤** ただ、都市部の生徒たちに先行き不透明で変化の大きな社会を生き抜くスキルやバイタリティーが身に付いているかと言えば、残念ながらそうとも限らないと私は思っています。大人たちから「これからの時代は異文化理解だ」と言われたから、留学してみたものの、短期間の留学でそうした理解が即座に出来るとは限りませんし、留学先で良い教育を受けてきたとしても、その経験を生かし、本人を伸ばしていく教育が日本にはまだ整っていません。留学に期待する生徒の様子を見る度に、高校の中にこれからの社会を生き抜く力を養うための、多様な学びが出来る環境をつくらなければいけないと痛感します。

大分県立中津南高校
**遠藤源治** えんどう・げんじ
教職歴13年。同校に赴任して2年目。大分県立四日市(よっかいち)高校、大分舞鶴高校などを経て、現職。担当科目は物理。

**編集長** 都市部の生徒も、地方の生徒も、自己投資をする上での「軸」「こだわり」となるものが育っていないという意味では同じなのかもしれない……先生方のお話を伺ってそう思いました。

## 日々の活動の中で、「軸」と「修正力」を育むために

**遠藤** 先が見えないから失敗を恐れ、受験校選択でも上を目指してチャレンジする生徒が少なくなったと感じています。そもそもチャレンジするための出発点となる目標が決

ベネッセ教育総合研究所
『VIEW21』高校版編集長
**柏木 崇** かしわぎ・たかし

### 大分県立中津南高校

◎設立　1893（明治26）年
◎形態　全日制／普通科／共学
◎生徒数　1学年約200人
◎14年度入試合格実績（現浪計）国公立大は、筑波大、東京大、一橋大、京都大、大阪大、広島大、山口大、九州大、熊本大、大分大などに129人が合格。私立大は、慶應義塾大、早稲田大、同志社大、立命館大、西南学院大、福岡大などに延べ242人が合格。
◎住所
〒871-0043 大分県中津市高畑2093
◎電話　0979-22-0224
◎Web Site　http://kou.oita-ed.jp/nakatuminami/

### 東京都立新宿高校

◎設立　1921（大正10）年
◎形態　全日制／普通科／共学
◎生徒数　1学年約320人
◎14年度入試合格実績（現浪計）国公立大は、千葉大、東京外国語大、東京学芸大、東京工業大、一橋大、横浜国立大、京都大、大阪大、首都大学東京などに94人が合格。私立大は、慶應義塾大、上智大、東京理科大、法政大、明治大、早稲田大などに延べ1027人が合格。
◎住所
〒160-0014 東京都新宿区内藤町11-4
◎電話　03-3354-7411
◎Web Site　http://www.shinjuku-h.metro.tokyo.jp/

### 岩手県立一戸高校

◎設立　1911（明治44）年
◎形態　全日制／総合学科／共学
◎生徒数　1学年約120人
◎14年度入試合格実績（現役のみ）国公立大は、岩手大、岩手県立大に4人が合格。私立大は、盛岡大、富士大、仙台大、武蔵野学院大、神奈川大に7人が合格。その他進学が42人、就職が53人。
◎住所
〒028-5312 岩手県二戸郡一戸町一戸字蒔前60-1
◎電話　0195-33-3042
◎Web Site　http://www2.iwate-ed.jp/inh-h/

まっていないという場合も少なくありません。人生の目標やこだわり、勉強の目的といった自分の軸となる部分をしっかりつくることがまずは大切だと思います。その上で、課題を自分で設定し、挑戦してみて、状況に応じてその後の取り組み方や目標そのものを修正していく体験が欠かせないのだと思います。

**編集長**　そうした活動は、新しい取り組みとして学校に導入していくイメージですか。それとも既存の取り組みの中での見直しでしょうか。

**遠藤**　私は既存の取り組みの中で十分に可能だと思います。例えば、部活動もその1つです。指導者が適切にサポートすることで、生徒は明確な目標を掲げて、それを達成するために何をすればよいのかを考え、自分がやってきたことを練習や試合を通してチェックし、自分自身を修正していくことが出来ます。私が顧問を務める女子バスケットボール部では、週末の練習試合の度に「反省ノート」を書き、自分とチームの良かったところ、悪かったところを振り返ります。1年生のうちは目標やこだわりが自分の中に定まっていないため、課題を見付けることがなかなか出来ませんが、自分の軸が定まると練習内容なども振り返られるようになります。自分で考えたからこそ自分を修正できるようになるのは、学習面や生活面でも同じではないでしょうか。教師が「こうすればよい」とアドバイスを与えるだけではなく、どうすればよいかを生徒自身が考え、自分の言葉で語ることが重要であり、その中で小さな成功体験を積み重ねながら、社会を生き抜く自信を付けていくのだと思います。

**安藤**　遠藤先生のおっしゃる通り、ただ部活動に参加すればよいというものではなく、それを生徒にとって気付きを得る場とするためには、指導者の力量が重要です。内省する機会をつくることはもちろん、部活動で身に付けた力が社会で役に立つこと、学習面でも役に立つのだと気付く場面を教師が意図してつくり、生徒が理解できるようにする工夫が必要です。社会人講演会や職場訪問などで、部活動での学びの大切さを実感させられる場面があるにもかかわらず、生徒がそれに気付かず素通りしてしまっていることがよくありますから。

**川村**　運動部であれば、生徒が自分たちで勝つための方法を考え、工夫し、助け合えるか、そしてその経験が社会で後々生きてくることを意識できるかが重要でしょうね。指導者の言う通りに動くだけではなく、自分で考えて動ける部活動になることが大切です。

**編集長**　そうした教師と生徒の関係は、部活動だけでなく、クラスの中でも必要だと言えますね。

**川村**　そうです。人は、苦しい場面になると逃げ出したり、楽な選択をしたりしたくなります。そういう心境になった瞬間を捉えて、生徒が自分の弱さと自ら向き合えるように導いていくのは、部の顧問であり、クラス担任です。そうした関係が築けるからこそ、社会が変化しても、同じ人間が毎日顔を合わせる学校という場に価値があるのでしょう。

**遠藤**　そのような関係を築くためには、普段から教師が自分の思いを語ることが大切ですね。教師自身が1人の社会人として、悩み、もがきながらより良く生きようとしている姿を生徒に見せないと、生徒も本音を語らないでしょう。

**安藤**　ただ、生徒に向き合うには、やる気や気合だけでは駄目だと思います。私自身、キャリアを積み重ねるうちに、指導の質を保証できるスキルを身に付けたいと思うようになりました。生徒への熱い思いは必要だけれど、生徒に向き合うためのスキルがなければ、結果的に自分の考えの押しつけになる危険性があります。ですから、面談1つ取っても、そのスキルを組織的に向上させる仕組みが学校には必要です。例えば、複数の教師が生徒一人ひとりについての授業中の様子などを持ち寄って、確認する場をつくれば、私たちにとってはベテランの視点を知る良い機会となるはずです。時間も手間も掛かることですが、教師も「生徒としっかり向き合えた」という成功体験により、向上心を持ち続けられると思います。

## 教師も変化に向き合い挑戦を続ける

**編集長**　生徒の内面に軸を定めると同時に、実際に自分自身を修正する際に必要とされるスキルを生徒に育

んでいくことも必要だと思います。目標やそこへの到達手段を修正するスキルは、どのような指導によって育んでいけるのでしょうか。

**川村**　5年後、10年後の社会がどうなっているのか分からないからこそ、生徒たちには自分の知識をうまく使って、その時その時の課題に取り組める力を身に付けさせることが重要だと思うのです。授業においても、知識を身に付けるだけでなく、知識をつなげて新しい価値をつくるような経験を積ませることが重要でしょう。様々な課題に柔軟に対応するためには多様な知識が必要であり、幅広い教科をリベラルアーツとして学ぶことが今まで以上に大切になると思います。根をしっかりと広く張ることで幹が大きく伸びていくように、各教科の知識が横断的に結び付き、知識が知性になる瞬間を授業の中でつくることが、全ての教科でますます求められていくでしょう。

**安藤**　前任校でSSH担当だったのですが、同僚と話し合い、今学んでいる内容が他の教科とどう関連しているかを、授業中に出来るだけ解説していくことにしました。その取り組み後に、「他教科を勉強するために理科が必要か」という点について調査したところ、それまではTIMSS調査での国際平均値を大幅に下回っていた数値が、国際平均値まで急上昇しました。私たちが他の教科で何を学んでいるのかを知り、それを踏まえて授業をするだけで、生徒たちの知識が知性になる瞬間はもっとつくれるはずだと確信しました。教科指導の部分でも、教師は教科の垣根を超えて一枚岩にならなければいけないと思います。

**遠藤**　成績を上げるために、私たちは手っ取り早く詰め込む指導をしがちです。知識を普遍的な知性とするためには、詰め込みに頼らない新しい授業に関心を持ち、授業改善のための勉強を続けることが大切です。

**川村**　私はこれまで様々な授業を見てきましたが、詰め込みをやめて、生徒が自ら考える活動を取り入れても、授業力があれば生徒の学力は落ちないと感じています。詰め込みの授業をやめると学力が落ちるというのは、私は教師の固定観念だと思います。生徒を信じ、自分の授業改善を進めないと、これからの社会に必要な課題解決力は養えないということを私たちはもっと意識すべきです。

**遠藤**　私は、教職10年目の研修で、アクティブラーニングの研究を行い、グループでの学び合いを取り入れた授業に挑戦しました。生徒へのアンケート結果から、授業で学んだ知識を体系的に理解し、自ら発展させて考える生徒が多くなったなど、様々な手応えがありました。更に、校内模試の結果も他のクラスと比べて決して遜色はありませんでした。教材研究など乗り越えるべき課題はありますが、せっかく新しい学び方の可能性を見いだしたのですから、いろいろな先生と情報交換をして自分を高めていくべきだと、川村先生のお話を聞いて強く思いました。教師も生徒と同様、勇気を持って踏み出さなければいけませんね。

**安藤**　大学進学とこれからの社会で必要な力の習得の両立は出来ないと、確たる証拠もないまま私たちが思い込んでいるだけなのかもしれませんね。両立できるまでとことんやってみる決意が今こそ求められている気がします。大きく変化する社会を生徒がたくましく生き抜いていけるよう、私たち教師も挑戦し続けることが必要なのだと思います。

# 新課程先行実施生 3年生後半の指導のあり方

2015年度の大学入試は、数学・理科において新課程に対応した入試の初年度となる。
理科のセンター試験での科目の負担増などを踏まえ、
今後の指導をどう進めていけばよいのかが難しい課題だ。
そこで、例年、多くの生徒が国公立大に合格する北海道札幌西高校、愛知県立豊田南高校に、
これまでの指導を振り返り、入試までの後半期の指導をどう行っていくのかを聞いた。

学校事例❶

## 北海道札幌西高校
## 教師間の情報共有を徹底し 生徒に入試までの見通しを示す

### 生徒に見通しを示し 最後まで諦めさせない

北海道札幌西高校は北海道大に毎年約100人が合格する進学校だ。新入生の志望校調査では、約3分の2が北海道大を第1志望に挙げる。そうした生徒たちを、最後まで目標を下げさせることなく学習に向かわせることが、毎年の課題だ。特に、現3年生は入学時点で従来より中位層が多かったため、入学段階から学力の底上げも課題だった。加えて新課程入試となるため、大半の生徒は理科の負担が重くなる。例年以上に学習への意識付けが重要になっていた。

そこで重視したのが、生徒に入試までの見通しを示すことだ。2年生10月の修学旅行後、学年集会で各教科の学習進度、模試や講習の計画を説明し、3年生4月には、更に学習到達目標、時期ごとの過ごし方などを明記した計画表を一目で分かるようにカラー印刷で配布した。模試や講習の計画表には、受験日や返却日だけでなく、目的や内容、受験対象となる生徒などを明記し、生徒が目的意識を持って受けられるようにした。3学年を担当する浅野泰弘先生はこう話す。

「2年生の2、3月に外部模試を受けさせ、自分の目標と現状の差を認識させました。その上で入試までにすべきことを生徒個々に伝えました。たとえ模試の判定が悪くても、見通しを持てれば目標に向かって頑張れるからです。実際、3年生になると早朝の教室で自習をする生徒が100人以上となり、

受験生としての自覚をしっかり持っていることが見て取れます」

## 教師も初体験だからこそ現状を見える化し共有

見通しを持つことは教師にも重要だ。新課程は教師にとっても初体験で、今までの経験則や暗黙知が通用するとは限らない。同校では例年、3年生9月までに国数英の基礎を完成させ、10月以降は演習に入り、その中で理社を集中的に完成させてきた。しかし理科の負担が増えた分、10月以降、今まで以上に理科に時間を取る必要がある。他教科との進度調整と情報共有が重要になるため、全教科の指導バランスも盛り込んだ進路指導計画書を作成し、4月の学年会において全教師で確認した。進路指導部長の上野昌生先生はこう話す。

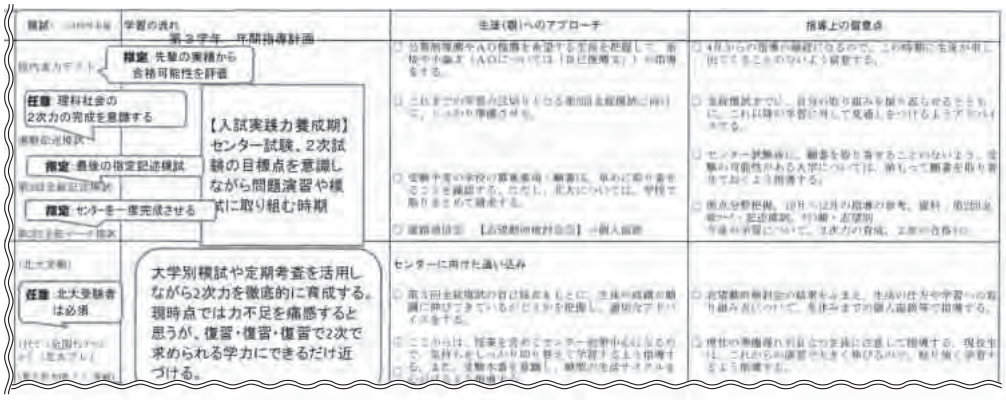
「計画表は毎年作成していましたが、十分活用できていませんでした。新課程になり、教師間で目線合わせをして指導することが一層重要になると考え、生徒用の計画表同様、入試までの日程をより詳しく示し、経験則で進めていた指導上の留意点、生徒への声掛けのポイントなども明記しました」

月1回の学年会では、4月に配布した計画表を見ながら、各教科の進度や課題を確認し、今後の予定を共有。また、教員向けの進路通信も配布するなど、生徒と同様に情報を提供し、学年団全員が常に見通しを持てるように工夫している。また、3年生の年4回の志望校検討会（4、8、10、1月）では、志望校だけではなく、生徒個々の学習状況も共有する。

6月の模試では初の試みとして、各教科担当に科目の結果分析と8月の模試に向けた指導計画を数行ずつ書いてもらい、全科目を一覧にして、7月の学年会で共有した。

「国数英はある程度得点できるようになり、例えば数学では『数列、ベクトルが出来ていない』など、各教科で具体的な課題が挙がり、対策の見通しが立ちました。一方で、理科はどの科目でも遅れが見受けられました。そうした現状を学年団で共有し、全教科を見通した上で今後の指導を考えられるようにしました」（上野先生）

**図　3年間の進路指導計画**




*学校資料から抜粋して掲載。ベネッセ教育総合研究所のウェブサイトで全文をご覧いただけます。
http://berd.benesse.jp > 教育情報>高校向け

## 10月の実力テストで進度に応じた実力を確認

3年生後期以降も、これまでと同様、学年団で情報共有をし、都度、課題に応じて軌道修正をしていく。

1つのポイントと見ているのが、10月の実力テストだ。例年は特に生徒に準備をさせていなかった。しかし今年は、各教科で出題範囲を生徒に明示するだけでなく、テストのアドバイスをまとめた要項を、夏休み明けに生徒に配布する。9月に入ると難関私立大の推薦入試の校内募集も始まり、浮き足立

**北海道札幌西高校**
**上野昌生**
うえの・まさき
進路指導部長。数学科。教職歴16年。同校に赴任して6年目。

**北海道札幌西高校**
**浅野泰弘**
あさの・やすひろ
進路指導部。数学科。教職歴29年。同校に赴任して4年目。

◎「自由、自律、叡智、創造」を校訓に真のリーダーの育成を目指す。2012年度からスーパーサイエンスハイスクール指定校。◎全日制・定時制／普通科／共学／1学年約320人◎14年度入試実績（現浪計）◎国公立大は北海道大、東京大、京都大など205人が合格。私立大は中央大、早稲田大などに延べ293人が合格。

つ生徒も出てくる。そのような時期だからこそ、生徒に学習の指針を示して目標に向かわせ、実力を試すテストに位置付けを変える。もちろん結果は学年団で共有し、生徒の個別指導に生かす予定だ。

各教科の進度は今のところ予定通り進んでいる。数学は1年次に作成した3年間のシラバスよりも早く進み、9月中に教科書を終え演習に入る。また、物理は9月までに教科書を終え、10月から演習に入る予定。生物は分量の厚い分野を先に進めているため、現段階では進度が遅いが、それが終われば スムーズに進む予定だという。

「新課程では、学年団の情報共有が一層重要だと感じます。特に、数学や理科の成績が振るわず、第1志望校を諦めてしまう生徒がいますが、他教科の進度や今後の予定を把握していれば、模試の結果が悪くてもまだ授業で習っていないからだと受け止められ、自信を持って担任がアドバイスできます。3年生の後半は志望校合格に向け、記述力をじっくり育てていきたいと思います」（浅野先生）

学校事例❷

## 愛知県立豊田南高校

# 授業進行と並行した定期的な振り返り演習により、基礎・基本の定着を促す

### 2年生3学期の演習で数学の模試の結果が向上

愛知県立豊田南高校は、例年約150人が国公立大に合格する進学校だ。生徒の希望進路の実現に向け、「最後までやり切る」を合言葉に、年度ごとの生徒の学力や気質に合わせた指導に努める。3学年主任の橋本豊明先生は2014年度3年生の特徴をこう話す。

「本校の生徒は志が高く、授業態度は真面目ですが、少々受け身の姿勢が見られます。それでも例年は、背中を一押しすれば自分で気付いて動き出していましたが、今の3年生は二度三度と押さないと自ら動くのは難しいようです」

現3年生に対しては、そうした生徒の気質を踏まえると共に、新課程入試を見据えた指導をしてきた。例年との違いは、数学と理科の演習の内容や時期を変更したことだ。

まず、数学の指導から見ていく。例年、理系の数学の授業は、2年生2～3学期に「数学Ⅱ・B」の教科書を終えると、すぐに「数学Ⅲ・C」の教科書に入った。そして、3年生1学期に「数学Ⅲ・C」の教科書を終え、総復習となる演習に移行していた。しかし、現3年生は「数学Ⅱ」を終えた後、2年生2学期に「数学Ⅲ」に入る一方、「数学B」を終えた後は、2年生3学期に基礎事項の演習を実施した。「数学Ⅲ」の教科書は3年生の1学期までに終わらせ、夏休み以降は演習を行う予定だ。進路指導主事の山崎博司先生は、そのように順序を変えた理由をこう話す。

愛知県立豊田南高校
**山崎博司**
やまざき・ひろし
進路指導主事。数学科。教職歴27年。同校に赴任して15年目。

愛知県立豊田南高校
**橋本豊明**
はしもと・とよあき
3学年主任。数学科。教職歴26年。同校に赴任して9年目。

◎部活動やボランティア活動、国際交流活動にも積極的に取り組み、幅広い視野を備えたバランスの良い生徒の育成に努める。◎全日制／普通科／共学／1学年約360人◎14年度入試実績（現浪計）◎国公立大は、愛知教育大、名古屋大などに135人が合格。私立大は、愛知大、南山大、立命館大などに延べ865人が合格。

「これまでは、出来るだけ早く教科書の内容を終えることを最優先に授業を進めていました。しかし、今年は教科書の分量が増えたこと、また、最近、途中で諦めてしまう生徒が増えていることを考慮し、『数学Ⅱ・B』を終えた時点で一息つき、基礎事項の定着度を高めるための演習を行うことにしました」

その結果、以前に比べて基礎学力が全体的に高まった。数学の模試結果を見ると、2年生2月の結果は例年と変わらなかったが、3年生5月はここ5年間で最も良い結果が出たという。

## 生徒主導の演習で基礎学力を培う

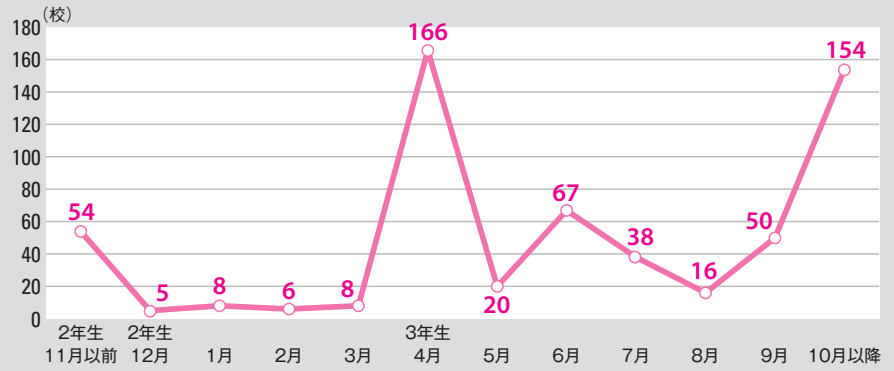
3年生の学校設定科目の数学でも、文系・理系共に「数学Ⅰ・A・Ⅱ・B」の演習に取り組む。記述式問題を課し、生徒が自分の解答の過程を板書し、皆に解説するという方法を採っている。

「3年生の前半までは、正解かどうかよりも、答えに至るまでのプロセスをしっかり理解させることが大切と考え、文系・理系共に記述式問題に取り組ませています。もちろん、記述式といっても、文系に課すのはセンター試験レベルの問題です。10月頃からは、センター試験対策として、マーク式の問題に切り替える予定です」（橋本先生）

生徒が解説するスタイルは一昨年から取り入れた。教師主導の授業よりも時間が掛かり、取り組む問題数が減る。それでも、生徒には好ましい変化が見られるという。

「『どうしてこういう解き方になるのか』と、自分が納得するまで考える生徒が増えました。教師も生徒も、受験直前はどれだけ問題を解いたかという『量』で安心するところがありますが、生徒の思考力・判断力・表現力を高めるためにも、3年生後半もこのスタイルを一部継続します」（山崎先生）

資料 3年生理系での理科における演習指導の開始時期（現状または予定）




旧課程では、演習の開始時期は「10月以降」が多かったが、新課程では、「3年生4月から」と「10月以降」で2極化している。これまで通り、教科書を全て終えてから演習に入るか、豊田南高校のように、授業進行と並行する形で演習を行って定着を図るか、方針は大きく2つに分かれるようだ。 ＊「新課程レポート・特大号・コミュニケーションシート」集計結果より作成

## 学習内容が増えた理科はこまめに演習を挟む

次に理科の指導を見ていく。履修科目は、文系は、1年生「物理基礎」「生物基礎」、2年生「化学基礎」、3年生「化学基礎」と「生物基礎」の演習、理系は、1年生「物理基礎」「生物基礎」、2年生「化学基礎」、「物理」または「生物」、3年生「化学」、「物理」または「生物」だ。

理科も学習内容の増加に伴い、教科書を終える時期は旧課程に比べて遅くなる。従来は教科書を全て終えてから演習に取り組んでいたが、新課程ではこまめに振り返りの演習を取り入れている。理系クラスでは、3年生の夏休みに基礎を付さない2科目の3年生1学期までの内容の演習をする予定だ。

「早く教科書を終わらせようと急ぐと、消化不良になる恐れがあります。教科書と並行して演習を行い、基礎・基本の定着を図れれば と思っています」（山崎先生）

センター試験の理科の受験科目は、文系が「物理基礎」「化学基礎」「生物基礎」のいずれか2科目、理系が「物理」「化学」「生物」のいずれか2科目を選ぶ指導をしている。

看護系を希望する生徒の指導は細心の注意を払う。文系クラスの中に看護系希望者が約20人いるが、看護系でもセンター試験の理科で基礎を付さない2科目を課す大学がある。そのため、生徒個々に受験科目を確認していく。今後、看護系や医療系を希望する生徒には、1年生の時点で原則として理系を勧める予定だ。

3年生も後半期に入る。今後も情報収集に努めると共に、応用力の養成を図っていくつもりだ。

「3年生の前半までは、じっくりと基礎力を培うことに力を入れてきました。学習内容の根本から納得して理解する姿勢は、学問の基礎となり、入試で求められる応用力の土台となります。最後まで粘って頑張れるよう、精神面の支援も強化し、生徒の希望進路の実現を後押ししていきます」（山崎先生）

長野県
## 上田高校

進学実績向上

# 生徒個々に応じた指導を全校体制で徹底し東京大合格者数を回復

◎1878（明治11）年設立の上田変則中学校が前身。上田藩主館跡に校地を有し、表御門を継承した校門は、堀・塀と共に上田市文化財に指定されている。2014年度、SGHアソシエイト校の指定を受け、「地球市民のリーダー」育成を推進している。

**設立**
1900（明治33）年

**形態**
全日制・定時制／普通科／共学

**生徒数**
1学年約320人

**2014年度入試合格実績（現浪計）**
国公立大は、北海道大、東北大、筑波大、東京大、東京工業大、信州大、名古屋大、京都大、大阪大、九州大などに232人が合格。私立大は、慶應義塾大、上智大、明治大、法政大、早稲田大、同志社大、立命館大、関西大、関西学院大などに延べ643人が合格。

**住所**
〒386-8715
長野県上田市大手1-4-32

**電話**
0268-22-0002

**Web Site**
http://www.nagano-c.ed.jp/ueda-hs/

### 変革のステップ

**背景**
◎2012年度入試から２年連続で東京大合格者ゼロ。同校の歴史上まれに見る事態に危機感を募らせる
STEP 1

**実践**
◎学校のミッションや生徒情報を共有して教師の意識変革を促し、生徒一人ひとりの課題に応じた手厚い面談、添削指導を実施
STEP 2

**成果**
◎2014年度入試で東京大理系学類に現役で３人が合格。国公立大合格者も過去５年で最高の実績を上げる
STEP 3

## 実力のある生徒の力を伸ばし切れない

２０１３年３月、東京大受験者が全員不合格だったと伝えられた瞬間、長野県上田高校の進路指導室は沈痛な空気に包まれた。東京大合格者ゼロという結果は前年に続くもので、過去十数年をさかのぼっても例がないことだった。

同校は、国公立大に毎年２００人以上が合格する進学校だ。ただ、学校を取り巻く環境は、必ずしも恵まれてはいない。上田市の人口は近隣の長野市の半数以下と、子どもの数自体が少ない。更に、交通の便が良いことから、地域の成績最上位層の中には、徒歩圏の同校ではなく、長野市の進学校を選ぶ生徒もいる。そうした状況でも、旧帝大、国公立大の医学部医学科、早慶上智などの難関大・学部・学科への合格者数は、この数年、右肩上がりだった。それだけに、13年度入試の結果は、教師たちに「東京大に受かれば」という無念さをより一層感じさせた。

しかし、数字以上に教師に危機感を抱かせたのは、生徒たちが東京大に合格できる力を持ちながら、本番で実力を発揮できなかったことだ。特に、12年度の３年生には、入学時から十分に東京大を狙える学力を持つ生徒がいたのにもかかわらず、生徒の力を伸ばし切れなかった。名門復活に向けてすべきことは何か。教師たちは早急な対策を迫られた。

## 不振の原因究明と教師の意識改革を推進

同校がまず取り組んだのは、不振の原因を明らかにすることだ。進路指導係が中心となって当該学年の活動を検証したところ、浮き彫りになったのは、最上位層を伸ばそうという教師間の共通認識、意識の希薄さだった。進路指導主事の小岩井秀樹先生はこう話す。

「『東京大合格』というミッションを明確にしていなかったことが、最大の原因だったと思います。責任の所在があいまいで、『東京大合格』に向けて何を仕掛けるかという明確な指針もなかったため、最後の最後で生徒が力を出し切ることが出来なかったのです」

長野県上田高校
**小岩井秀樹** こいわい・ひでき
教職歴35年。同校に赴任して8年目。進路指導主事。「『汝の馬車を星につなげ。Hitch your wagon to a star.』」

長野県上田高校
**小宮山勝人** こみやま・かつひと
教職歴25年。同校に赴任して9年目。進路指導係。教務SGHアソシエイト担当。「生徒にも、自分にも『やらずの後悔』をしないように心掛ける」

長野県上田高校
**中村 克** なかむら・まさる
教職歴4年。同校に赴任して5年目。進路指導係。数学科。「まずは、自分が楽しい授業をし、自分が楽しんで学校生活を送る」

生徒個々の学力データを分析すると、教科の学力バランスが悪く、英語に時間を掛け過ぎて数学が足を引っ張った、センター試験では高得点が取れているが、個別学力試験では点数が取れていないといった状況が明らかになった。

そうした課題を踏まえ、最初に着手したのは教師の意識改革だ。毎年5月、全校で実施する進路報告会が、教師の意思統一を行う最初の場として設定された。

報告会の目的は、前年の取り組みの振り返り、入試結果の総括だが、13年度は自校のデータだけでなく、他校の進学実績との比較、東京大・京都大の入試改革の現状を示した。次に、事例研究として、東京大に合格できなかった生徒の模試結果を基に、不振の原因は教科の学力バランスの悪さであることを明らかにした。そして、「東京大合格者を毎年出す」というミッションを改めて確認し、教師の意識改革を促した。

報告会では初の試みとして、各教科担当の総括を行った。各教科の前3学年担当者が2～3分ずつ、学年の指導方針や特徴的な取り組み、入試への対応などについて報告した。その狙いを、進路指導係の小宮山勝人先生はこう語る。

「学年ごとに教科の指導方針が変わり、指導の一貫性に欠けるのも本校の弱点でした。効果的な取り組みがあっても教師独自のノウハウにとどまり、次の学年に受け継がれないことが少なくありません。特に、13年度は多くの教師が異動したため、ノウハウを公開して指導の連続性を担保する必要がありました」

他教科の指導内容を知ることは、担任の指導にも良い影響を及ぼすと、数学科の中村克先生は指摘する。

「教科によってセンター試験対策や添削指導の時期は違います。英語が記述対策に重点を置いている時に、自分の教科の感覚で『今はセンター試験対策をした方がよい』などと指導してしまったら生徒を混乱させるだけです。他教科の状況を知ることで、担任としても適切な指導が出来るようになりました」

## 「面接シート」で生徒個々の情報を共有し、課題に応じた指導を徹底

教師の意識改革と共に、生徒個々の課題に応じたきめ細かい指導にも力を入れた。

個に応じた指導を行うには、何より生徒把握が必要となる。そこで、13年度3年生で活用したのが「面接シート」だ（P・32図）。年度初めに東京大志望者を把握し（13年度は10人）、進路指導係が志望者と個々に面談を実施。各教科担当の名前、模試の結果、部活動、学習上の悩み、塾や通信添削講座の利用状況などを1枚のシートにまとめた。シートはデジタル化して校内LANのサーバーに入れ、教師が自由に閲覧できるようにした。

「担任だからこそ知っていること、教科担当が把握している情報などを、その生徒にかかわる全ての教師が共有し、全員で支援する体制を築こうとしました。学習状況や個人的な問題まで把握することで、やる気を高めるための的確な声掛けや連携が可能になると考えています」（小岩井先生）

難関大・医学部医学科志望者向けの模試添削指導も、生徒個別の課題に応じた指導だ。夏と秋に行う大学別模試の受験者のうち、希望者が受験後すぐに自分の解答用紙をコピーして教科担当に提出し、個別指導を受けるというもの。

「模試結果が返却されるまでの1か月間を無駄にしたくないという思いで始めました。コピーを取ることによって、生徒は「どうしてこういう解き方をしたのか」といった自分の考えが鮮明なうちに復習することが出来、教科担当は生の答案を見て、数値だけでは分からない意外な弱点を見付けることが出来るようになりました」（小宮山先生）

きちんと理解していた上で正解できたのか、理解はあやふやだったがたまたま正解できたのかは、生の答案を見なければ分からない。理解が不十分な生徒には、過去問の類似問題を課すなど、生徒個々の課題に応じた指導をして弱点克服を促した。

図　「面接シート」

面接シート

寛大・理Ⅰ（→理Ⅱ）　変更 3年（ ＊ ）組（ ＊ ）番　氏名（ O.H. ）［○○中学校］

| 教科担任 | 国語 | | 数学 | | 理科 | | 地歴・公民 | | 英語 | | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | 現代文 | 古典 | | | 物理 | 化学 | 日本史 | | | | 英語探求 |
| | A | B | C D | | E | F | G | | H | I | |

校内での個人指導の状況

| 変態教科 | 英作文 | | | |
|---|---|---|---|---|
| 担当者・内容 | J | | | |

| | |
|---|---|
| 学校に望むこと | |
| 将来の夢 | 地球というシステム全体の改善に係る仕事をしたい。物理・化学が面白いと思う。 |
| メールアドレス | |
| 所属クラブ等 | 小学校 野球　中学校 野球　高校 軟式野球（引退） |
| 生徒会活動・委員会 | 小学校 会長　中学校 議長　高校 文化祭・現事 |

| 学校以外の学習 | 通信添削 | 塾 | 現時点での達成感等について（順調に進んでいるか…） |
|---|---|---|---|
| | ・名称（＊）<br>・受講期間<br>（ ）年<br>（ ）月～<br>・受講科目<br>（ ） | ・名称（＊）<br>・受講期間<br>（2）年<br>（ ）月～<br>・受講科目<br>（ ） | ・高2まで、○○（今も、入ってはいるが…数学と英語）<br>・△△予備校＝高3から。数学と理科 |

「面接シート」の項目は、他に学習上の悩み、得意科目とその理由、不得意科目とその理由がある
＊同校の資料を抜粋して掲載

## 「チーム医療」をキーワードに教師一人ひとりの力を結集

生徒一人ひとりの課題に応じた指導を、同校では「チーム医療」に例えている。医師、看護師、放射線技師など、各分野の専門家が連携して治療に当たるように、管理職、各分掌、担任、教科担当が、それぞれの立場から生徒一人ひとりに焦点を当て、専門スキルを駆使して指導するというものだ。教科・進路・生徒指導のあらゆる側面から、生徒を支えていく体制が、学校教育には欠かせないという考え方が背景にある。

もちろん、教科や分掌の枠にとらわれていては、チームとはならない。教師全員がプロの教師としての自覚を持ち、生徒にかかわろうとする意識を持つことが、同校の「チーム医療」の神髄である。

「『進路指導は進路のプロがやればよい』という考えもありますが、生徒に毎日接し、面談をするのは担任です。進路指導係はデータの準備など、担任をサポートするのが役割です。全ての担任が進路指導のプロという意識で生徒にかかわることが、生徒一人ひとりの進路実現に欠かせない視点です」（小岩井先生）

3年次に6回行う志望校検討会の運営を、学年主体に切り替えたのは、担任団の主体性を引き出すためだ。それまで、資料の準備や進行は進路指導係が担当していたが、13年度から、各学年が主体的に運営していく形に変えた。必要なデータは、学年団が進路指導係に依頼して用意するようにした。司会進行も全て学年主体で行うことにより、学年団が一丸となって指導に向かう意識が醸成されているという。

## 低学年時からトップ集団づくり学校全体を牽引する存在に

低学年時から難関大を意識させるための取り組みも、13年度に始めた。12月、1・2年生の希望者を対象に「難関大学ガイダンス」を実施し、進路指導係による講演、外部講師による進路講演会や教科の対策講座などのプログラムを

通して、難関大の情報を提供した。進学意識を高めるのが目的だが、真の狙いは「集団づくり」にあると、小岩井先生は明かす。

「本校の生徒は、人前で目立つような行動を取るのが苦手です。『東京大に行きたい』『医学部医学科を目指す』など、自分の進路希望を人前で言うことなどはありません。だからこそ、夢を語り合える雰囲気をつくり、高い目標に向かって切磋琢磨し合う集団が出来ればと思いました。いずれは、学校全体を牽引するトップ集団になればと考えています」

ガイダンスの実施前には、担任に偏差値60以上の生徒に声を掛けてもらった。当初、担任団からは取り組みに対して否定的な意見もあったが、小岩井先生が取り組みの意義を粘り強く伝えることで担任も動き、1・2年生合わせて約140人が参加した。

また、毎年3月には、同校の同窓会館に外部講師を招いて「難関大学対策講義」を実施している。12月のガイダンス、3月の対策講義との相乗効果でトップ集団を形成し、2・3年生に向けて弾みを付けるという流れをつくるため、12月のガイダンスの内容を検討していく。

## グローバルな進路指導の可能性を模索する

全校一丸で進めた改革により、14年度の大学入試の実績は目覚ましい回復を見せた。最大の懸案だった東京大には、理系学類に現役で3人が合格。国公立大全体でも過去5年間で最も多い232人が合格した。

今後の課題は、教師の異動によってノウハウが途絶えることのないよう、3年間を見通した指導ストーリーを構築することだ。長野県は教師の異動サイクルが短く、教師間の指導の平準化、ノウハウの継承は大きな課題だ。

2つめの課題は、地域の最上位層の生徒がより多く入学してくるよう、地域に同校の魅力を今以上にアピールしていくことだ。ここ数年、公開授業に合わせて年2回「小学生と保護者対象の学校紹介」を開催しているのも、その布石の1つである。

3つめの課題は、14年度、スーパーグローバルハイスクール（SGH）のアソシエイト校としての実践だ。

「現段階ではSGHの取り組みそのものを模索中ですが、活動の中で東南アジアの医療について学んだことの影響もあってか、『医学部医学科に進みたい』『国連職員になりたい』という希望を語る生徒も現れています。今後は、本校から直接、海外の大学への進学を希望する生徒が出てくるかもしれません。国内の大学だけでなく、海外を視野に入れた進路指導のあり方も模索していきたいと考えています」（小岩井先生）

### 若手教師が語る、指導変革へ 情熱

## 初任者も1人の教師として尊重する学校風土

進路指導係 **中村 克**

初任で本校に着任し、4年が過ぎました。この間、担任として、進路指導係として、さまざまなことに挑戦し、多くの経験を積んできました。

2013年度に3学年の担任となった時は、進路指導係の模試担当として、成績上位層向けの模試対策講座を担当しました。以前は模試の手順を説明するだけの場でしたが、せっかく生徒が時間を割いて集まるので、生徒の受験意欲を伸ばすような取り組みにしたいと考えました。模試に向けた心構えや、難関大攻略に必要な勉強法、入試本番に向けたストーリーなどについて語り、受験生としての心構えを持たせるように努めました。

私がアイデアを出し、良いと思ったことを実行できたのも、先輩方が私を新人として見るのではなく、1人の教師として尊重してくださったからです。私自身、ベテラン教師でも若手教師でも、生徒の前に出れば1人の教師に変わりはないということを常に意識して、生徒と接してきました。そういった私の気持ちを酌んで、意見を取り入れてくださったのだと思います。

長野県は異動サイクルが短いため、私も近いうちに他校に赴任すると思います。そこでは、中堅教師として指導に加わることになるでしょう。私が先輩方に育てていただいたように、私も若手の先生を1人の教師として尊重し、お互いに高め合い、率直に意見を言い合える関係を築いていきたいと思っています。

今回のテーマに関連する過去の記事はベネッセ教育総合研究所のウェブサイトでご覧いただけます。
2012年12月号指導変革の軌跡「静岡県・私立加藤学園暁秀高校・中学校」など
▶▶▶ http://berd.benesse.jp → HOME > 教育情報 > 高校向け

奈良県大和高田市立
## 高田商業高校

進学実績向上

# 全校体制の小論文指導で進学にも就職にも強い商業高校へと変貌

◎校訓は「礼儀・清純・誠実」。人づくりを教育の主軸に据え、挨拶、言葉遣い、礼儀作法の習得、資格取得に積極的に取り組む。部活動では、ソフトテニス、バスケットボール、バドミントン、弓道、簿記部やワープロ部、珠算電卓部などが全国大会に出場。

**設立**
1954（昭和29）年

**形態**
全日制／商業科／共学

**生徒数**
1学年約200人

**2014年度入試合格実績（現役のみ）**
国立大は、信州大、滋賀大、和歌山大、山口大、高知大に計5人が合格。私立大は、法政大、明治大、同志社大、立命館大、関西大、関西学院大、近畿大などに延べ165人が合格。他に、短大20人、専門学校12人、就職35人。

**住所**
〒635-0011
奈良県大和高田市材木町8-3

**電話**
0745-22-2251

**Web Site**
http://web1.kcn.jp/ichisho/

### 変革のステップ

**背景**
◎全国の商業高校の動向を受け、市内唯一の市立高校として「進学も出来る商業高校」への転換の必要性を感じていた
STEP 1

**実践**
◎商業科対象の推薦入試に向けて小論文指導を開始。2009年には全校体制での指導に。模試の導入によるデータ活用も進行中
STEP 2

**成果**
◎国公立大、関関同立も含め大学進学者数が急増。教師間の意識改革も進み、全校体制の指導を確立
STEP 3

## 商業科対象の推薦入試を進学実績向上の切り札に

大和高田市立高田商業高校は、奈良県中西部に位置する大和高田市唯一の市立高校だ。繊維産業を基盤に商業都市として発展してきた歴史を背景に、「商都高田に商業高校を」という市民の声を受け、県下初の商業高校として開校した。検定資格取得のために商業科の教師が補習を行い、毎年多くの検定資格取得者を出しているのが、同校の商業科の特色だ。その同校が4年制大への進学指導に力を入れ始めたのは、十数年前のこと。当時の進路状況について、進路指導部長の山下善啓（よしひろ）先生は次のように話す。

「本校の4年制大への進学者が毎年数人程度である一方で、全国には進学実績を着実に伸ばしている商業高校がありました。本校も、『進学も出来る商業高校』への転換の必要性を強く感じていました」

当時、同校の大学進学のルートは指定校推薦入試やスポーツ推薦入試が中心であり、国公立大や関関同立は高嶺（たかね）の花だった。そこで注目したのが、私立大で導入が進んでいた商業科卒業生を対象とした推薦入試だ。推薦入試の受験希望者がいれば、学級担任が国語科に相談。国語科で担当を割り振り、1対1で早朝や放課後に小論文指導を行った。

同校には全国大会で活躍する部が多く、当初、

部の顧問から「練習時間が少なくなって困っている」と言われることもあった。しかし、入試で関西大や近畿大などの合格者が続出すると、商業科推薦が大きな武器になるという認識が教師間に共有されていった。取り組みを主導してきた国語科の大島利隆先生はこう振り返る。

「初めは批判的だった先生が、次第に、部員に『大学合格に近づくから補習を受けてこい』と声を掛けられたと聞いた時、胸が熱くなりました。生徒のためになると分かれば前向きに協力してくださるのが、本校の先生方の良いところです。私自身も『絶対合格させる』と決意を新たにすることが出来ました」

県内に商業科推薦入試を利用する学校が少なかったこともあり、推薦入試合格者は順調に増えていった。数年後には国公立大合格者が出て、関関同立の合格者数は2桁に達した。実績が上がるにつれて大学進学希望者も増え、他教科の教師も小論文指導に加わっていった。

大和高田市立高田商業高校
**山下善啓** やました・よしひろ
教職歴29年。同校に赴任して29年目。進路指導部長。商業科。「卒業後、どんなことがあってもへこたれない生徒を育てる」

大和高田市立高田商業高校
**登利昌記** のぼり・まさのり
教職歴33年。同校に赴任して31年目。進路指導部。地歴・公民科。「『継続は力なり』を肝に銘じて、生徒に接するよう心掛けている」

大和高田市立高田商業高校
**大島利隆** おおしま・としたか
教職歴13年。同校に赴任して13年目。進路指導部進学主任。3学年担任。国語科。「ピンチこそチャンス。くじけずたゆまず、生徒と共に走る」

大和高田市立高田商業高校
**米田 碧** よねだ・みどり
教職歴9年。同校に赴任して5年目。進路指導部。3学年副担任。理科。「一期一会を大切に、自分の発した言葉に責任を持つ」

## 進路指導部の主導により全校体制の指導がスタート

進学希望者の増加に伴い、新たな課題が浮上した。指導者不足である。10人程の教師で60～70人の生徒の指導に当たる状況が続き、教師の負担が年々増えていくばかりであった。

転機が訪れたのは、山下先生が進路指導部長になった2009年だ。当時の校長から「どうせやるなら全員で取り組んではどうか」と提案されたのだ。山下先生は、教師全員に指導に加わるように呼び掛け、担当者の一覧表を作成して配布した。

当然反発はあった。「自分には出来ない」「小論文指導をしたことがない」という教師には、進路指導部が「大人が読んでおかしくない文章であれば、生徒を褒めてあげてください」と伝え、プレッシャーが掛からないように配慮した。また、4月から夏休みにかけて、外部講師を複数回招き、小論文指導の研修会を開いた。「良い小論文とは何か」「構成力を高める工夫」といった技術面から、「集中力を高める」といった精神面まで、教師も指導法を学んだ。理科の米田碧（みどり）先生も、4年前の赴任時から毎年3、4人の生徒を受け持っている。

「小論文指導は初めての経験だったので、先輩の先生方の指導や外部講師から得た知識を最大限に活用しました。1年目は結果が出るまで不安で仕方がありませんでしたが、生徒が『合格しました』と報告してくれた時は本当にうれしくて、自分の指導は間違っていなかったのだと確信できました」

良いと思ったことは、何でも挑戦するという姿勢も大切にした。

「発表力を高めるために、生徒に『あいうえお作文』を書かせ、全校生徒の前で発表するという活動をしたこともありました。生徒も教師も楽しかったのですが、効果があまりないと分かり、翌年は行いませんでした。結果的に無駄ではありましたが、トライ&エラーの繰り返しの中で、指導力は高まっていくのだと思います」（大島先生）

## 「勉強とはどういうことか」を徹底的に追求させる

国公立大の合格者増に向けた挑戦も始まっ

た。国公立大の小論文では、よりレベルの高い知識や記述力が必要となるため、指導にも一層厳しさが求められる。国公立大の小論文指導を担当する地歴・公民科の登利昌記（のぼりまさのり）先生は次のように述べる。

「本校では商業系の検定試験合格を目指した指導に力を入れるため、国公立大の小論文入試に必要な知識が不足していることは明らかでした。一方、部活動の加入率は100％で、小論文学習に本格的に取り組めるのは、部活動を引退する3年生の7月以降です。入試までのわずか3、4か月の勝負になるので、生徒には最初から厳しい要求をしています」

小論文指導では、生徒に事前にテーマに関することを調べておくよう伝える。TPPであれば、正式名称はもちろん、交渉参加国の数とその変遷、各国の主要産業は何か、どこの国との貿易が盛んなのかといったことまで、事前に調べておかなければならない。下調べが不十分なため、登利先生に質問され、困惑する生徒もいるという。

「プレッシャーを掛けすぎているかもしれませんが、本気で勉強するとはどういうことかを生徒に体感させたいのです。単に大学に合格させるのではなく、大学進学後、あるいは卒業後も必要な知識、学習に対する姿勢を身に付けさせたいという思いで取り組んでいます」（登利先生）

## 外部模試を導入し全国レベルを意識させる

より精度の高い進路指導を行うため、進路資料の活用にも着手した。12年度に初めてベネッセの「実力診断テスト」（＊）を導入したのもその一環だ。

「本校には、進学指導を行うためのデータが不足していました。進路指導には職人芸的な面があります。ベテラン教師は経験に基づいて効果的な指導が出来ますが、それでは学校全体の指導力は向上しません。『この時期、この成績ならA大でも合格圏に入る』というようなアドバイスを、どの教師も自信を持って生徒や保護者に提示するためには、客観的なデータが不可欠です」（山下先生）

模試の結果は、大学・学部ごとに進路情報をまとめた内部資料に反映される（図）。1枚の紙に、過去に大学を受験した生徒の評定平均値、所属部、取得した資格、更に学部・学科の定員や競争率、過去の小論文入試のテーマや面接の内容、指導した教師の所感などを一覧表にしたものだ。これを全教師で共有し、面談などで活用する。

同校の生徒は、他校に比べて、模試に対する意識が低いという。「スポーツ推薦入試を受けるから、模試は必要ない」という生徒もいる。教師も同様で、以前は「小論文受験が中心だから模試は関係ない」という声もあった。しかし、その認識は間違いだと、山下先生は指摘する。

「大学に入れば、一般入試で合格した学生と推薦入試で合格した学生が一緒に授業を受けます。一般入試で合格した学生とは学力的に差があるという自覚を促すためにも、模試は欠かせません。また、模試は、社会で生きていく上で必要な知識・技能の定着度を測る指標でもあります。本校では上位層の生徒でも全国と比べればまだまだであり、『井の中

**図　進学内部資料サンプル**

大学・学部ごとに、生徒情報、受験情報、入試問題、分析をまとめる。1人でも受験した大学・学部があれば追加し、教育資産として蓄積していく。
＊学校資料サンプルを掲載

＊ベネッセの模試「進路マップ」の1つで、教科書レベルを中心に基礎学力を測るテスト。

の蛙』とならないために、全国との力の差を意識させ、更なる努力を促すことも、模試の大切な役割だと捉えています」

模試の導入により、授業改善に対する教師の意識も高まっているという。

「模試の結果を見れば、自分たちの授業が生徒の学力向上に役に立っているかどうか一目瞭然です。先生方の切磋琢磨を促す上でも模試は良い効果を生んでいます」（大島先生）

外部模試の導入が生徒の視野を広げ、教師の授業改善への意欲も促しているのだ。

## センター試験に向けた基礎学力の向上が今後の課題

小論文指導に始まる同校の改革は、多くの成果をもたらした。近畿大などの中堅大はもちろん、国公立大や関関同立の合格者が安定的に出るようになった。国公立大の合格者数が2桁に達する年もある。「大学進学も出来る商業高校」として地域に認知され、進学意欲の高い生徒が入学するようになった。そして、好調な就職実績も、進学を後押ししている。

「内定率100％という就職実績があっての進学であり、商業高校として、就職という軸はぶれてはいけない点です。大学の推薦入試よりも先に就職が決まります。就職希望者が熱心に、時には涙を流しながら面接の練習をしている姿を見て、進学希望者も刺激を受け、『自分たちも頑張ろう』と意欲を高めるなど、進学希望者に良い影響を与えていると思います」（山下先生）

目指す進路は違っても、それぞれがやるべきことに真剣に取り組むことによって、生徒同士が刺激し高め合う好循環を生んでいるのだ。

次の課題は、基礎学力の向上だ。推薦入試・AO入試の合格者数は飽和状態になりつつある。外部模試を導入したのも、センター試験利用型の推薦入試、あるいは一般入試まで目を向けなければならない時期が近づきつつあるという切迫感も背景にあった。

「今後も、小論文と面接だけで勝負できるとは限りません。学科試験でも勝負できるよう基礎学力の向上を図っていきたいと考えています。まずはセンター試験の受験者数を増やして、合格者を少しでも出すことが出来れば、後に続く生徒たちの学習意欲も高まると期待しています」（大島先生）

もう1つは、もう一段上の意識改革だ。

「生徒も教師も進学に対する意識がまだ甘いと、私は感じています。読んだ本を生徒に紹介したり、新聞記事を解説したりして、日々、生徒の意識の向上に努めています。まだまだやれることはあるという意識を持って、保護者を含めた三位一体の意識改革に取り組んでいきたいと思います」（登利先生）

### 若手教師が語る、指導変革へ 情熱

## 小論文にも生かせる授業へと発想を転換

進路指導部 **米田 碧**

本校に赴任し、「理科が嫌い」「必要ない」と思っている生徒があまりにも多いことに戸惑いました。前任は進学校で、いかに試験の得点を上げるかが指導の中心でした。本校には生物を受験科目にする生徒が少ないこともあり、単位数が少なく、実験をする時間の確保も難しい状況です。赴任当初は、学校文化の違いや指導上のギャップに悩む日々でした。しかし、小論文指導を受け持ってからは、徐々に考えが変わっていきました。小論文を書くためには、書き方のスキルや時事的な知識に加えて、多角的なものの見方、考え方も必要です。「ものの見方・考え方」を養う科目として、生物を位置付けられると発想を転換したのです。

それからは、小論文にも生かせる授業を心掛けるようになりました。知識を教えるだけではなく、なぜそう思うのか、生徒に理由を語らせることによって、思考力や表現力を養うのです。私の授業で「分かりません」は禁句。教師が諦めてしまうと、生徒も諦めることを覚えます。ヒントを出してでも必ず自分で答えを見付け、達成感を持たせることを大切にしています。

看護学科の希望者が増える中で、理科の単位数が少ないことが今の悩みです。推薦入試で合格できても、生物に関する知識が不十分なまま、進学せざるを得ない生徒も少なくありません。限られた単位数の中で、いかに必要な知識を身に付けさせるかも、考えていきたいと思います。

今回のテーマに関連する過去の記事はベネッセ教育総合研究所のウェブサイトでご覧いただけます。
2013年4月号指導変革の軌跡「**秋田県秋田市立秋田商業高校**」など
▶▶▶ ***http://berd.benesse.jp*** → HOME ＞ 教育情報 ＞ 高校向け

「もっと響く指導」にするために！

# 生きたデータの徹底研究

「データ」を活用して客観的に生徒の状況を捉え、指導の方針を整理する方策を2006年から12年まで伝えてきた「生きたデータの徹底活用」のコーナー。更に響く指導を実現するために、これまで掲載した記事を基に現場の先生方と改めて指導のポイントを確認し、「データ」の改良を検討します。

## テーマ 1年生夏休み明けの意識付け

「生きたデータ」2007年9月号を参考に、夏休み後の生徒把握を行ったところ……

●チェックリスト

ダウンロード

**A 夏休み中の生活チェックリスト（生徒用）** 夏休み明け直後のホームルームなどでチェックさせる

- ☐ 夏休み中は週5日以上の家庭学習に取り組めなかった
- ☐ 夏休み前と後で生活習慣が変わった
- ☐ 夏休みを振り返って。満足できる点、不満だった点が整理できていない
- ☐ 家族と進路について話をしていない
- ☐ 夏休み中の目標学習時間が達成できなかった
- ☐ 生活習慣が夜型に変わってしまった
- ☐ テレビやインターネットの時間が増えてしまった
- ☐ 趣味にも打ち込めず、怠惰な時間を過ごした

**B 夏休み後のチェックリスト（教師用）** 9月中にクラスを見回して各生徒の様子を観察する

- ☐ 上記チェックリストで、多くチェックが入っている
- ☐ 遅刻・欠席が増えた
- ☐ ホームルームなどでうつむき気味（夏休み前との変化）
- ☐ 夏休みの課題が未提出
- ☐ 授業中に集中できなくなったり、居眠りをするようになった
- ☐ 頭髪、服装に変化（茶髪、パーマ、制服の着崩しなど）が見られる
- ☐ 部活動をやめた
- ☐ 月曜日に休みがち

**私の狙い**

生徒の夏休み中の生活・学習習慣の実態を教師、生徒自身がチェックし、振り返ろうとした

**取り組み内容**

夏休み明けにチェックリストを活用し、生徒の変化を見逃さず対応していこうとした

**感じた課題**

チェックは行ったが、数値化し、定量的に分析して指導することまでは出来なかった。また、生徒は出来ていないことが多い割には、挽回の気持ちをあまり持とうとしなかった

「もっと響く指導」のポイント ①

## 「出来た感」を意識させながら、1学期・夏休みを振り返らせる

1年生の夏休み明けから秋にかけては、その後の成績推移に大きな影響を与える時期です。私もこれまで、夏休みを振り返らせて9月の中だるみを防ごうとしてきました。しかし、**夏休み中の「出来なかったこと」や夏休み明けの「出来なくなってしまったこと」は明らかになっても、それが生徒の中で「改善しよう」という意欲につながっている手応えがありません。**「これから何をすべきか」を明確にさせたいのですが……。

夏休み明けから学習習慣が乱れる生徒は、確かに少なくありません。同僚の先生の中には「夏休みがなければいいのに！」と半ば本気で言う人もいますよね。**入学直後から夏休み前まで、私たちは生徒を細やかに指導し、学習習慣を身に付けさせてきました。**それが**教師の手を離れる夏休みを経て、変化が生じるのは当然のこと**と言えます。私たちは、高校3年間を通じて主体的に学ぶことが出来る生徒を育てようとしており、生徒が出来るようになったことを確認しながら、少しずつ手を離していかなければなりません。そこで、「夏休みに教師の手を離れても、**高校生として出来ていることは何か」という視点で、自分の成長を確認する**ことから始めてみてはどうでしょう。

確かに1学期は、学習面でも段階的に生徒を引き上げてきました。夏休み明けにどの段階まで維持できていて、どこから再スタートすればよいかが把握できるとよいですね。

＊このコーナーは、高校の先生方（今回は関東・中国・四国地方）との検討会の内容を基に構成しています。

若手先生代表

**A先生（30代）** 四国地方の公立高校に勤務。14年度は2回目の1学年担任。

中堅先生代表

**B先生（40代）** 四国地方の公立高校に勤務。14年度は1学年主任を務める。

## 「もっと響く指導」のポイントと「生きたデータ」活用改訂案

●チェックリスト

ダウンロード

| | 第1段階 | 第2段階 | 第3段階 |
|---|---|---|---|
| 学習 | 「学習時間ゼロ」の日をなくす<br>④ できている<br>③ ほぼできている<br>② あまりできていない<br>① 全くできていない | 家庭学習の開始時間を一定にする<br>④ できている<br>③ ほぼできている<br>② あまりできていない<br>① 全くできていない | 教科バランスを考えて学習する<br>④ できている<br>③ ほぼできている<br>② あまりできていない<br>① 全くできていない |

| | | 夏休み前 | 夏休み後 |
|---|---|---|---|
| 生活 | 午前 8 時 20 分までに登校 | できた　できなかった | できている　できていない |
| | 授業開始 5 分前に着席 | できた　できなかった | できている　できていない |
| | 提出物の期限の厳守 | できた　できなかった | できている　できていない |
| | ケータイ・スマホ使用時間の管理 | できた　できなかった | できている　できていない |
| | 朝型の生活 | できた　できなかった | できている　できていない |
| 部活動 | テーマを持って練習に取り組む | できた　できなかった | できている　できていない |
| | 仲間と話し合い、練習を改善する | できた　できなかった | できている　できていない |

「もっと響く指導」のために改訂すると……

まず、学習面では本校の場合、１学期では「学習時間ゼロの日をつくらない」からスタートし、学習習慣の質を上の表のように３段階で高めようとしてきました。学習状況調査や面談などを通して、１学期には多くの生徒が達成できていたことは確認済みです。そこで、夏休み明けに**「1 学期に積み重ねてきた 3 段階のどこまでを維持できているか」「再スタートするのはどの段階か」を本人にチェックさせてみたい**と思います。

**出来ていることと出来ていないことを整理し、「出来ていることもある」ということを自覚させられれば、自己肯定感を保ちながら、更に上の段階を目指して、自律的に学習習慣を改善する**ことが出来そうですね。学習面だけではなく、生活面でのチェックも出来ればいいですね。

生活習慣や部活動については、１学期を通じて大切にしてきたことをリスト化し、「夏休み前と夏休み明けで出来ていることが変わったか」を確認させてはどうでしょうか。チェックした項目を比較することで、**夏休み明けの生活習慣の乱れが具体的に把握できれば、夏休み明けからの学習習慣の乱れの原因が生活面の変化にあることが分かる**かもしれません。学力の土台には、自律的な生活習慣や充実した部活動があることを伝えられるとよいですよね。

プラスαの検ポイント From 編集部

### 夏休みまでの指導の段階を学年団は言語化できるか？

今回の記事の検討会で議論が活発化したのは、「1 学期に生徒をどのように段階的に引き上げてきたかを振り返る」という観点です。「入学時からの段階的指導を、９月の段階で教師が振り返ることは、２学期以降に学年団の指導がぶれないという意味でも重要」と意見が一致しました。その一方、「行ってきた指導を言語化できるかどうか、教師自身の力量が問われる」という声も上がりました。１学期の指導を言語化する作業を若手教師が行うことで、学校全体の指導力向上の機会とすることも出来るのではないでしょうか。

「もっと響く指導」のポイント ②

# 文理選択での生徒のこだわりと課題を学年全体で共有する

「生きたデータ」2007年9月号を参考に、文理選択までのプロセスを確認させたところ……

●文理選択確認シート　ダウンロード

- ☐ 取りあえずで決めていないか
- ☐ 仲の良い友達と一緒だからという理由で決めていないか
- ☐ 教科の好き・嫌いだけで決めていないか
- ☐ 自分で考えて決めたか
- ☐ 保護者と話し合って決めたか
- ☐ 文系・理系それぞれに進んだ場合の履修内容の違いを理解しているか
- ☐ 文系・理系それぞれ、どのような職業へと道が続くのかを理解しているか
- ☐ 文系・理系それぞれの進学先ではどのような学問が学べるのかを理解しているか
- ☐ 高2や高3の先輩に話を聞く機会はあったか
- ☐ 自分が選んだコースには、どのような進学先（大学や短大など）があるかを知っているか

検討した結果、最終的に選んだのは（　文系　理系　）
保護者確認欄

| 私の狙い | 取り組み内容 | 感じた課題 |
|---|---|---|
| 科目の好き嫌いだけで文理を決めるといった安易な選択ではなく、多角的な視点からの選択を促したかった | 文理選択確認シートを活用し、保護者の確認も得て、文理を考える際の視点を押さえているかを確認した | 文理選択の視点を生徒や保護者に確認させることは出来たが、選択する上でのこだわりやこれからの学習に対する覚悟などを読み取ることが出来なかった |

１年生２学期の大きな進路イベントが文理選択です。実は、前任校で１年生を担任した時失敗をしたんです。２学期の後半、ある先輩先生から「Ａ先生のクラスのＹくんは、なぜ文系を選んだの？」と聞かれた時、私は「そう言えばそうですね…」と答えてしまい、先輩先生から「生徒把握が出来ていない」と叱られました。**文理選択で押さえるべき観点は整理して伝えていたのですが、結局その生徒がどんな希望、こだわりを持って文理を決定したのかまでは把握できていなかった**のです。

理系の素養を持つＹくんが文系を選んだのだから、**それに見合った進路のこだわりなどを担任が把握しておくべき**だと先輩は思ったのでしょう。でも、生徒の思いを十分に把握しないまま、決定を受け入れてしまうことは現実にあると思います。**社会経験の少ない高校１年生がどんな理由で文理を選んだのか、そして、今後どのような努力が必要なのかについて本人がどの程度理解しているのかをチェックしたいものです。**

正直、「なぜ文系（理系）を選んだのか？」と不思議に思う生徒は例年必ずいます。しかし、「本人が希望するのだから」とこちらも自分に言い聞かせ、納得させている状況です。**「あれ？」と感じる選択をした生徒にどう向き合い、２学期以降どんな指導を行えばよいか、先輩方の考えを聞く場があればいいのに**と思ったこともあります。

ダウンロード　このマークのある図版は、加工可能なデータとして、ダウンロードできます！　生徒指導・進路指導ツール集

ベネッセ教育総合研究所　http://berd.benesse.jp

生きたデータ　検索

HOME→教育情報→高校向け→
生徒指導・進路指導ツール集でご覧ください

今回のテーマと関連する過去のバックナンバーも同じウェブサイトでご覧いただけます。併せてご活用ください！

2008年10月号　1年生2学期の成績層別面談指導
2009年9月号　1年生秋の中だるみ対策と「第一歩」としての文理選択
2012年10月号　学び続ける集団をつくる１年生２学期の定期テストデザイン

## 「もっと響く指導」のポイントと「生きたデータ」作成改訂案

●文理選択確認シート

ダウンロード

- ☐ 取りあえずで決めていないか
- ☐ 仲の良い友達と一緒だからという理由で決めていないか
- ☐ 教科の好き・嫌いだけで決めていないか
- ☐ 自分で考えて決めたか
- ☐ 高2や高3の先輩に話を聞く機会はあったか
- ☐ 自分が選んだコースには、どのような進学先（大学や短大など）があるかを知っているか

文理選択の最大の決定要因･一番のこだわり（　　）

検討した結果、最終的に選んだのは（　文系　理系　）

これから最も力を入れて勉強すべき科目と勉強の方針

1番目（科目名／　　勉強の方針／　　）

2番目（科目名／　　勉強の方針／　　）

保護者確認欄

担任所感

前任校では、10月に1学年団が文理検討会を行い、成績や希望大学・学部・学科などを集約した資料を見ながら、**「この生徒が文系を選んだのは、数学が苦手になったという理由だけではないか？」など複数の目でチェックしていました。**そして**必要に応じて、「本当に文系でよいのか」「今後どんな努力が必要なのかを理解しているか」を担任が面談で確認していました。**面談で押さえるポイントは検討会で確認したものです。

どんな視点で生徒の希望進路を確認し、フォローしていけばよいか、若手にとって勉強できるよい機会ですよね。入学時から数学が苦手なのに医学部を志望する生徒の指導などは、若い担任1人の力では難しいですから。学年団が一体となって確認してもらえると、とても心強いです。

ただ、多忙な時期に生徒全員の希望進路を詳しくチェックしていくのは簡単ではありません。そこで、**学年団全体でチェックが必要な生徒を見抜く工夫が必要**です。その観点で見直した文理選択確認シートが上のものです。**文理選択の観点を整理するだけでなく、選択する上で一番自分が大事にしたこと、こだわったことを記述させ、更に今後の学習でどんなことに力を入れたいか、本人の覚悟までを聞く**のです。

ここまで確認すれば、理系科目の成績が振るわないのに、理系を希望している生徒について「どんなこだわりを持った上での選択なのか」「今後の学習の見通しは立っているか」が把握できますね。「この生徒についてどう思いますか？」と先輩の先生にも相談しやすいと思います。

### プラスαの検ポイント From 編集部

**文理選択でも個別のフォローが必要な生徒がいるという前提に立つ**

今回の記事の検討会で、先生方は「なぜ文系（理系）？と疑問に思う生徒は毎年必ずいる」と口をそろえました。ただ、そのような生徒について「この先苦労するだろうと思いながら、本人の希望を優先する」と吐露する先生もいれば、「面談で再考を促し、希望を貫く場合でも相当の努力が必要であることを覚悟させる」という先生もおり、対応は大きく分かれました。個別のフォローが必要な生徒をそのままにしておくことがないよう、各クラスで「想定外の選択」をした生徒を挙げ、名前だけでも早期に共有する仕組みが必要かもしれません。

半歩未来 考える 教育オピニオン

# 「21世紀型能力」の明確化で教育はどう変わるのか？

国立教育政策研究所 西野真由美 白水始（しろうず はじめ） 後藤顕一

国立教育政策研究所では、プロジェクト研究「教育課程の編成の基礎的研究」を行い、研究開発学校の先進的な事例や諸外国の動向などの観点で研究を進め、２０１３年３月、報告書をまとめた。これからの社会に求められる資質・能力を背景とした学校教育目標としての資質・能力目標を「21世紀型能力」として整理し、教育活動の質を高めていくことを提言した。知識・技能に加え、それらを習得し活用するために思考する力、社会や他者とのかかわりの中で考えたことを実践する力を構想している。本稿では、まず「21世紀型能力」を総括し、次にこの研究にかかわった国立教育政策研究所の３人の総括研究官に、その意義と実際の学習活動における運用について聞いた。

## 「生きる力」育成の指針を基礎、思考、実践の三層で整理

変化が激しく、予測が難しい現代社会では、未知の問題に答えを生み出すための「思考力」、多様な価値観を共有する他者との対話を通して現実の問題を解決できる「実践力」が求められる。それらを、日本の教育が目指す「生きる力」の根幹であると捉え、21世紀を生き抜くための実践的な問題解決力・発見力に結実するように構造化して示したのが、国立教育政策研究所が整理する「21世紀型能力」である。

「21世紀型能力」は、生きる力としての「知・徳・体のバランスの取れた力」を教科等横断的

## 資質・能力を基に教育政策をデザインする

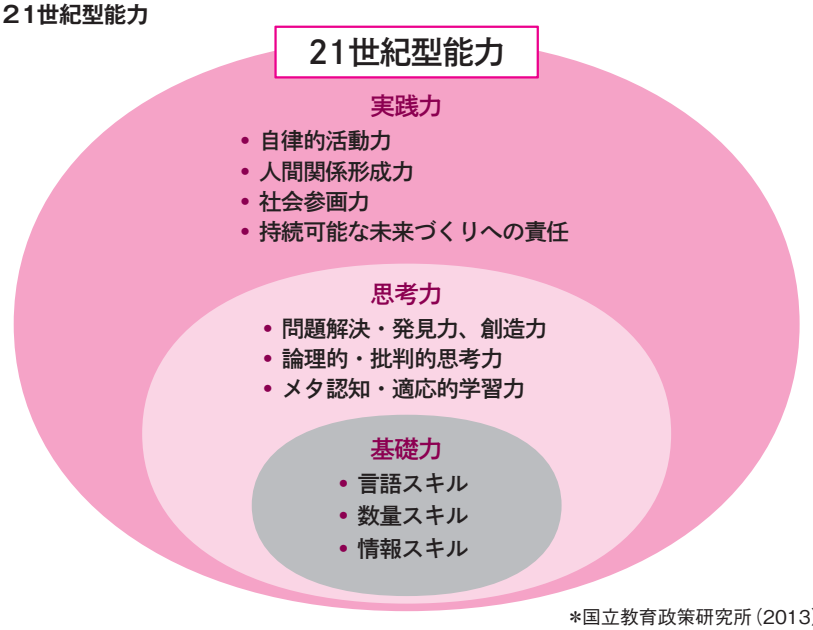
◎欧米を始めとする諸外国では１９９０年代以降、知識・技能だけでなく、人間の全体的能力であるコンピテンシーを基に教育目標を設定し、教育政策をデザインする動きが定着した。ＯＥＣＤでは人間関係の形成や社会の発展にかかわる力を「キー・コンピテンシー」と定義し、ＰＩＳＡなどの学力調査に取り入れた。アメリカなどでは「21世紀型スキル」が提唱され、評価のあり方を検討するプロジェクトが進められている。日本でも、内閣府の「人間力」を始め、厚生労働省の「就職基礎能力」、経済産業省の「社会人基礎力」、文部科学省の「学士力」などが次々と打ち出され、汎用的な認知・社会スキルの育成を目指してきた。

21世紀に求められる汎用的な資質・能力を定義し、それを基礎にカリキュラムを開発する動きは世界の潮流といえる。これを受けて国立教育政策研究所では、２０１３年３月の『社会の変化に対応する資質や能力を育成する教育課程編成の基本原理』で「21世紀型能力」として整理。これまで日本の学校が培ってきた「知・徳・体」の考え方を踏まえ、「生きる力」を育成するための具体的な方向性を示したものとして注目されている。

に育成すべき資質・能力の視点で再構成したものである。いわば、生きる力を資質・能力を育成する学習に高めていくという視点から、基礎、思考、実践からなる構造で再構成したものである（図）。

中核としているのが、「思考力」だ。それは、

図 21世紀型能力




*国立教育政策研究所（2013）より

一人ひとりが自ら学び判断し、自分の考えを持って他者と話し合い、考えを比較吟味して統合し、より良い解や新しい知識をつくり、次の問いを見付ける力である。さまざまな課題を解決するための核となる能力で、問題の発見・解決、新しいアイデアの生成にかかわる問題解決・発見力・創造力、その過程で発揮される論理的・批判的思考力、自分の問題の解き方や学び方を振り返るメタ認知、そこから次に学ぶべきことを探す力などである。

その「思考力」を支えるものとして位置付けているのが「基礎力」だ。言語、数、情報（ＩＣＴ）を、目的に応じて道具として使いこなすスキルである。学力の三要素の１つである「基礎的・基本的な知識、及び技能の習得」のうちの、特に道具として使えるようになった技能的なものに該当すると考えることも出来る。ＩＣＴ化の進展が著しい今日、読み書き・計算などと共に、情報スキルが重要になっていることも念頭に置いた整理になっている。

## 体験を通して学びを価値付け、生活で発揮できる力に

「基礎力」「思考力」の使い方を方向付けるものとして、「実践力」を位置付けている。日常生活や社会、環境の中に問題を見つけ出し、自分の知識を総動員して、自分やコミュニティー、社会にとって価値のある解を導くことが出来る力だ。具体的には、自分の行動を調整し、生き方を主体的に選択できるキャリア設計力、他者と効果的なコミュニケーションを取る力、協力して社会づくりに参画する力、倫理や市民的責任を自覚して行動する力などが挙げられる。

学力三要素の１つである「主体的に学習に取り組む態度」などの情意面は、主体的な学習活動と密接にかかわるものであり、能力の育成と関係付けて捉える必要がある。そうした教育課程を構想するためには、学んだ知識を実生活・実社会で「どう使うか」という視点を盛り込むことが重要である。そのため、「21世紀型能力」の「実践力」では、学んだことを価値付けたり、それを生活において意味ある行為へとつなげたりすることを重視している。

「21世紀型能力」は、知と心身の発達を総合した力の変化を、これからの社会でどう働かせていくのかを示したものであり、学力の三要素と呼応するだけでなく、認知と情意を総合的に捉えようとすることで、教育基本法でいわれる「知・徳・体のバランス」の達成に資するものとなっている。すなわち、知・徳・体いずれの育成においても、あるいはどの教科等の学習においても「学ぶための道具を使いこなして、自己・他者・社会との対話を通して考え、世界で生きる力を付けること」によって、それらの学びの質を高め、生きる力の育成に結び付けていこうとするものである。（ＶＩＥＷ21編集部）

座談会

# 「21世紀型能力」を「生きる力」の育成に生かす

## 教科・領域を横断する汎用的な力を明示

**――国立教育政策研究所（以下、国教研）が「21世紀型能力」を整理した背景を教えてください。**

**西野**　２００８年の中央教育審議会の答申において、「生きる力」はキー・コンピテンシーを先取りしたものとして位置付けられました。「生きる力」「自ら学び考える」という考えは当時新しく、日本の学校教育の重要な転換点になりました。しかし、「生きる力を育む」という画期的な理念を学校教育で実現するためには、日々の授業実践がどのように「生きる力」につながるかを示すことが大切です。

各教科でどのように「生きる力」を具体化するかは、今回の学習指導要領作成に当たってかなり研究され、実践にも生かされています。しかし、教科全体を貫く資質や能力がどのようなものなのかについては、もっと具体的に示すことが必要ではないかと思います。教科・領域全体を横に貫く汎用的な力を示すことによって、「生きる力」に必要な資質・能力をより明確にしたい。それが、「21世紀型能力」を構想した最大の狙いです。

**白水**　現行課程では、「生きる力」を育成するために、知識・技能の他に思考力・表現力・判断力を重視することが明確に打ち出されました。その重視が、「知・徳・体のバランスの取れた『生きる力』」にどうつながるのかを、より豊かに示していく必要があります。

例えば、「思考力」「判断力」「表現力」は、既にどの生徒も持っていると考え、「どのように授業の中で使うのか」と意識を変えることも考えられます。知識を習得してから初めて思考力などを使うのではなく、使いながらその力を高めていき、より安定した力として発揮できるようにしていくのです。「21世紀型能力」では、それを基礎・思考・実践という三層構造に整理し、相互に連関し合いながら、それぞれの力を高めていくという点を強調しました。

## 基礎・思考・実践の三層を有機的に連関させる

**――旧課程の時は、「生きる力」の具体像が見えないという声が学校現場からも聞こえました。そうした課題を踏まえて育成すべき力を再構成したということでしょうか。**

**西野**　元々、日本の学校教育では「知・徳・体」を総合的に育てることを重視してきました。ところが、いつしかそれらが分離して捉えられるようになり、「知」は国語や算数などの教科学習で、「徳」は心を扱う道徳・特別活動、情操面を伸ばす音楽・美術で、「体」は体育で育成というような分業的な見方がなされがちになっています。現行課程の理念である「生きる力」は、この分業的な見方を超えて、子どもの学びを生きることへと統合的に捉えようとするものです。子どもの学びは、孤独な営みではなく、仲間と一緒に行うものです。その中でおのずと、どうすればさまざまな友だちと仲良くやっていけるか、どのように自分を主張するかという課題に出合います。喜びを感じ、葛藤しながら、五感を働かせてさまざまな体験をする。これらを全て合わせたものが「学び」であり、その中で「知・徳・体」が総合的に伸びていくのです。基礎・思考・実践の三層も、それぞれが独立しているのではなく、授業で有機的に関連付けていくことが大切であり、そうした考え方を整理するために「21世紀型能力」として示しました。

**白水**　注意すべき点は、まず基礎を習得し、それを思考力によって活用し、実践に進むことで学習意欲が育つというように、学力の習得を段階的に捉えないことです。例えば、数学の「平均」という概念は、概念を習得させて数量判断

の基礎とする授業だけでは、基礎力の範囲となりますが、「南半球や北半球のGNPはどうなっているのか」という問題で考えると、実践的な課題になります。「こんなに経済格差があるなら何とかしなければ」という課題意識が生まれれば、格差問題や資源問題を考えるきっかけにもなるでしょう。そのように、抽象的な概念も実社会の問題と絡めて課題を設定することで、基礎・思考・実践の三層を貫く授業が出来るのではないかと期待しています。

## 互いの考えを認め合う教室風土が生徒を成長させる

**――「21世紀型能力」育成の可能性を探るために、研究開発校の実態を調査されたそうですが、どのような成果が見られたのでしょうか。**

**後藤**　国教研では、小・中・高合わせて160校以上の実践をまとめました。例えば、東京都新宿区にある小学校は、学校案内が8か国語あるほど外国籍の児童の比率が高く、日本語の習得が大きな課題でした。こうした場合は、まずドリル学習などで基礎となる日本語の習得を徹底し、それから話し合い学習を行う教育が考えられます。しかし、ある年、それをやめ、課題解決型学習を進める中で、少しずつ日本語の習得を目指しました。すると、思考力やコミュニケーション能力など心の面で成長を遂げると共に、日本語力も急速に伸びました。このように、心の面と知の面を一体化させて学習を進めている学校が、総じて成果を上げています。

**白水**　うまくいっている授業を見渡すと、みんなが1つの問いに対して考えをどんどん出し、話し合いながらまとめていく形態が多いと感じます。友だちと意見を共有することで、答えがよりレベルの高いものになる一方で、一人ひとりの到達する答えは異なっていてもよいという雰囲気も共通していると思われます。

**後藤**　生徒主体の学びが、先生方のやることを制限してしまう点で窮屈に感じられるかと心配しましたが、研究開発校の先生方に話を聞くと、「学びの自由度が高くなった」と言われることが少なくありません。自分の考えを持って発表できる、他人の考えを聞いて自分の考えを更に深めていく経験が、子どもを成長させているという実感を持たれる先生もいました。「資質・能力」を現場が意識することで、先生方の指導や子どもの学びが広がっているのを感じます。

**西野**　道徳の研修会で、「子どもから多様な意見が出た時に、最後のまとめはどうすればよいのでしょうか」という質問がありました。あらかじめ考えておいた狙い通りの言葉で授業を終わりたいのに、子どもから多様な意見が出てきてしまったために、どうまとめればよいのか悩んでしまったというのです。「正しいまとめをしなくてはいけない」という思いが、先生方を苦しめているのかもしれません。いろいろな意見が出て楽しいと感じられる授業、たくさん意見が聞けて良かったと言えるような授業を積み重ねていく。そうすることで、子どもたちは違う意見を言うと先生は喜んでくれる、自分の意

国立教育政策研究所
教育課程研究センター基礎研究部
総括研究官
**西野真由美**
にしの・まゆみ◎お茶の水女子大大学院人間文化研究科比較文化学専攻修了。お茶の水女子大大学院人間文化研究科助手を経て、1990年から国立教育研究所（現・国立教育政策研究所）に所属。

見を先生は聞いてくれるという思いを抱き、より活発な授業が出来るようになると思います。

**白水**　それが子ども自身にとっても、一番自然で楽しく、頭が働きやすい状態かもしれません。

## 生徒自身が自己の変容に気付ける評価が理想

**――「21世紀型能力」における評価のあり方について、どのようにお考えでしょうか。**

**白水**　基礎力・思考力・実践力では、それぞれ方法論が異なると思います。基礎力は、教科の技能や知識を基に「読み書きそろばん」の現代版ともいうべき「リテラシーやヌメラシー（＊）、ＩＣＴ」等をどれだけ使いこなせるかで評価することになると思います。思考力は、教科等の基本となるような根本的な概念について、どれだけ深く考えることが出来るかが評価対象です。評価において、特に難しいのは実践力です。答えの分からない状態で合意形成していく力だとすると、先生がそのプロセスを見取る目が重要になるでしょう。そのプロセスの質を判断する基準は、各校の課題や教育目標に応じて異なってもよいと思いますし、評価の過程で基準が発展的に変わっていくこともあるでしょう。

ゴールを決めて、そこに到達できたかしか見ない評価は、誤解を恐れずに言えば、大学入試に合格するかどうかだけを問う評価と同等のものです。そうではなく、評価の観点を「社会に出た後に生きる力」に据えることで、例えば「この生徒は大学で生き生きと活躍してくれるだろうか」というように、先生方も意識を変えていただけたらと思います。そうすれば、日々の授業も教科書を終わらせることだけを意識したり、用意しておいた結論にこだわったりするのではなく、いかに一人ひとりの生徒が自分にとって意味のある質の高い考えを持てるかを問う方向に変わっていくのではないでしょうか。

**西野**　文部科学省の「生徒指導提要」では、「自己指導能力」という言葉で、自分自身を評価する力を高めることを重視しています。目標を立ててそこに向かっていく、目標にどのくらい近付いたのか、もっと近付くために何をすればよいのかを自分で見極めることは、「21世紀型能力」で育てたい力そのものです。自分に何が足りないのか、どこが頑張れたのかを客観的に見る力も育てていくために、自己評価が重要な役割を果たすようになるでしょう。

**後藤**　評価というと、どうしても教師目線で成果を測るという側面が強くなりますが、評価は何のためにするのか、いま一度、原点に戻ってみてはどうでしょうか。評価の究極の目的は、生徒自身が自己の変容に気付くことです。学校が育てたい生徒像を打ち出すことは大切です。加えて、どのように成長できたのかを生徒自身が気付けるような評価観が、これからは求められると考えます。

## 学習意欲を喚起することで受験学力を高めていく

**――高校では、大学入試の指導も意識せざる**

**国立教育政策研究所**
**初等中等教育研究部**
**総括研究官**
**白水 始**

しろうず・はじめ◎名古屋大大学院文学研究科心理学専攻博士課程中途退学。中京大情報理工学部情報メディア工学科准教授等を経て、2012年8月から現職。


＊numeracy。基本的な数に関する能力、計算能力のこと。

**を得ません。資質・能力の育成を目指しながら、同時に受験学力を伸ばすことは可能でしょうか。**

**後藤**　数学や理科が好きで、将来の自分に重要だと考えている生徒が多い学校を調べてみると、豊かな学びを追求していることが特徴にあると感じます。

ある高校では、生徒たちが数学の別解を見付ける競争をしていて、別解が見付かれば、速報で「別解ニュース」を配布して、別解を鑑賞したり、皆でたたえ合っていました。また、「総合的な学習の時間」などで、教科で学んだことを統合するような時間を意図的に設けて、その価値や意義を意識させている学校は、教科学習の意欲も高く、成績の向上につながっていることが、私たちの調査で明らかになっています。

**西野**　特に、学習意欲に課題のある生徒は、主体的に活動するカリキュラムを設定することで、学びの楽しさに目覚め、進学意欲も高まるという結果が得られています。難しいのは、むしろ受験学力だけが学力だと考えている生徒たちです。自分1人で勉強していれば十分だと思っている子どもに、仲間と一緒に学ぶ意義、問題意識を持って学ぶ楽しさをいかに実感させるかは、難しい課題だと思っています。

**白水**　「何のために学ぶのか」という生徒がよく持つ疑問に、「大学に行くため」「大人になって成功するため」という以外の答えを、生徒が自分で見付けられるような教育課程になればよいだろうと思います。

例えば、概念というものは、人類が世界や社会の仕組みを一生懸命理解し、制御しようとしてつくってきた道具なのだということが納得できれば、自分もそれを使って世の中のために何かしたいという意欲を持ちやすくなるでしょう。そうした積み重ねが、結果的に主体的に受験勉強に取り組んでいこうとする意欲を高め、ひいては受験学力の向上にも結び付くのではないでしょうか。

**西野**　そもそも受験学力は、授業だけで身に付くものではないと思います。生徒が家でも学校でも、自分で勉強することによって身に付く力であり、授業時間の勉強だけで受験を突破できると考えている生徒もあまりいないと思います。先生も教室で行う授業だけで受験学力を身に付けられるとは思っていないはずです。学んだことを更に自宅で復習し、深めていくことによって初めて受験学力が身に付くのです。

私たちが考えているのは、そうした学びに向かうための原動力になる学習意欲に働き掛けることです。自分で目標を持って頑張ろう、将来を見据えて、大学に入ったらこんなことをしたい、だからこの大学を目指す。そうした意欲を高めていきたいと考えています。それによって、学校でしか教科書を開かなかった子どもたちに、自宅でもっと勉強しよう、自分でやってみようという気持ちになってもらえることを、何よりも期待しています。

**――本日はありがとうございました。**

**国立教育政策研究所**
**教育課程研究センター基礎研究部**
**総括研究官**
**後藤顕一**

ごとう・けんいち◎埼玉県立松伏高校教諭、埼玉県立浦和高校教諭、埼玉県教育局高校教育指導係指導主事を経て、2009年4月から現職。

最先端の研究を大学の先生が誌上講義！

51

# 課題の発見・解決を繰り返し より豊かな社会を実現する

東京大公共政策大学院・法学政治学研究科　城山英明研究室

現代社会は、環境や税制など、複合的な要因による多くの課題を抱えている。それらを解決するためには、一つひとつの要因を突き止め、解明する必要がある。そこで武器となるのが、社会制度や政策について分析する学問、行政学の知見だ。その第一人者である、東京大公共政策大学院・法学政治学研究科の城山英明教授は、科学技術の開発推進と環境保護など、同時に両方を解決するのが難しい課題についても、多くの施策を提言している。豊かで暮らしやすい社会を実現するには何が必要か、話を聞いた。

## フローチャートで分かる城山英明研究室

### 大学院生の主な出身分野

法学

政治学

理工学

など

◎社会制度や政策に関する研究室であるため、法学や政治学を修了した学生が目立つ。また、社会問題と密接にかかわる研究を行っているため、社会人経験のある学生も多い。

### 研究にかかわる学問分野と研究内容

◎政治学の一分野である行政学は、広く社会全体を研究対象とする。そのため、社会にかかわるあらゆる学問と関連がある。

### 研究成果と社会のかかわり

社会の課題を可視化

課題を解決するための方策を提案

など

◎調査を通して社会の課題を明らかにし、これを公表する。また、課題を解決する方策を提案している。

## 社会を見つめ、課題を見いだす力が大切

**行政学が求める学生像**

社会に対する関心

課題を発見し判断する力

諦めずに粘り強く取り組む力

行政学では、環境保護政策や原子力発電所の安全規制というように、現代社会の具体的な政策や制度について研究し、解決策を考えます。そのため、社会に対する関心が何よりも求められます。社会には、無数の課題が互いに絡み合って存在します。ある課題への対策によって、別の課題がかえって大きくなることも珍しくありません。例えば、年金が少ないという課題では、支給額を安易に増やして解決しようとすれば、保険料や税率を上げなければならないという別の課題が出てきます。そこで求められるのが、最も重要な課題は何かを冷静に判断する力です。更に、法学や経済学、医学などいくつもの分野の専門家と話し合って初めて解決策が見えてくることが多いため、コミュニケーション能力も欠かせません。

また、課題についての情報がうまく収集できないなど、研究はしばしば困難にぶつかります。たとえすぐに結果が出なくても、忍耐強く取り組む力が大切です。

**高校生へのメッセージ**　高校時代には、興味があることをとことん追究してください。そうすることで、粘り強さが身に付くはずですし、自分で工夫するようにもなると思います。例えば、プラモデルであれば、初めは説明書通りに作っていても、色や形などにこだわるようになれば、進んで試行錯誤を重ねるようになるでしょう。他者の指示にただ従っているだけでは、大学や社会で求められる自分で判断する力は伸びません。高校生のうちに自分で考える習慣を付けておきましょう。

**城山英明** 教授

しろやま・ひでであき　東京大公共政策大学院院長。同法学政治学研究科教授。東京大大学院博士課程教育リーディングプログラム「社会構想マネジメントを先導するグローバルリーダー養成プログラム」コーディネーター。東京大法学部卒業後、東京大大学院法学政治学研究科助教授などを経て、現職。2001年、日本ITU協会国際活動奨励賞を受賞。主な著書に『国際行政論』（有斐閣）など。


### 研究を志したきっかけ

## 社会を動かす政治の仕組みを学びたい

自分で考えて結論を出すこと。その面白さに気付かせてくれたのは、高校の世界史の授業です。担当の先生は、歴史学の先端的な研究内容や通説とは異なる学説など、教科書に書いていないことを詳しく話してくださいました。1つの事実について複数の解釈が可能であることを学んだ私は、事実の背後関係などを調べ、仮説を立てるのが楽しくなりました。周りにも同じような友だちが大勢いて、よく意見をぶつけ合いました。

多様な視点から歴史を読み解けるようになりたいと、社会学や文化人類学など、歴史にかかわるさまざまなジャンルの本を読むようにもなりました。次第に私は、個々の史実だけでなく、それが発生した社会制度や統治の仕組みについて関心を抱くようになり、政治学を学ぼうと、法学部に進んだのです。

大学に入った当初は、比較の観点を持って歴史を勉強したかったのですが、やがて考えが変わりました。大学入学の前後に国際的な議論になり始めた日米貿易摩擦[1]など、今まさに起きている政治問題に興味が移っていったためです。特に、政治的な意思決定がどのように行われるのか、その実態を把握したいという思いが強くなりました。そこで、行政学の研究を志したのです。

### 研究概要

## 制度や政策の課題を浮き彫りにし改善案を提案

行政学は政治学の一分野で、制度や政策が形成・実施される過程などを分析し、社会的な利益を多く実現する方法について考察する学問です。

都市開発や道路敷設といった国家事業では、財務省や国土交通省などいくつもの省庁が力を合わせることになりますが、連携がスムーズにいかなければ、時間も費用も多く掛かり、社会的な不利益が生じます。日本の場合、省庁間の意思疎通の壁となる要因の1つに、各省庁の意思決定のプロセスの相違が考えられます。これは、いわば文化の違いなので、すぐに統一するのは困難でしょう。そこで、私たちは1990年代

に、当時の全17の中央省庁のうち15省庁について意思決定のプロセスを比較しました。共通点と相違点を明らかにし、効率の良い連携方法を考えるための資料を作成したわけです。

科学技術に関する政策についても研究しています。科学技術が発達すれば、生活が便利になるというメリットがある半面、環境破壊のようなデメリットも生じます。東アジアでは、中国の急激な経済成長に伴い、政策による環境規制について盛んに議論されるようになりました。

中国では、エネルギー生産の大半を石炭に頼っているため、大気中に放出される二酸化炭素[2]や二酸化硫黄[3]の量も多くなります。そこで、日本は、高度経済成長期の公害防止に効果があった脱硫装置[4]を簡易化し、これを中国の工場が設置できるように技術支援を行いましたが、うまくいきませんでした。その要因の1つとしては、中国の環境行政について十分に把握していなかったことが考えられます。日本の技術支援より前に、中国政府は、二酸化硫黄の排出量に応じて企業に「排汚費」を課すことを法制化しました。中国の地方環境保護局は、「排汚費」を主要な財源としていたので、脱硫装置が普及して二酸化硫黄の排出量が減ることを警戒し、脱硫装置の導入・運用に必要な費用よりも、「排汚費」を安く設定したのです。日本では考えられませんが、国際支援は多様な行政の仕組みを持つ国や地域に対して行います。日本との違いを踏まえ、制度や政策を分析してこそ、有効な支援策が生まれるのです。

また、科学技術を運用するためには、政府による安全規制が不可欠です。私は、99年のJCOの臨界事故[5]後に発足した研究チームに参加し、安全性を高める制度を体系化することに取り組んでいます。

例えば、原子力発電の安全性については、従来、原子力工学の専門家内での議論に偏りがちで、化学工学など隣接する学問分野とはあまり連携してきませんでした。先にお話しした省庁の例と同じように、共に理系の学問であっても、細分化された分野ごとに文化が異なるためです。しかし、発電所を安全に運用するためには、分野を横断して連携することが求められます。

そこで、私たちは化学プラント[6]や医療施設などと安全規制の内容を比較し、原子力発電所が備えるべき規制とそれを実現する政策などについて、原子力工学や化学工学、行政法や刑事訴訟法など複数の学問分野の研究者と共に検討しました。異なる学問分野を結び付け、1つの政策のために知見を集約していけることは、行政学を研究する醍醐味の1つです。

研究の展望

## 高度な専門知識と広い視野を持った人材を育てたい

ほとんどの社会問題は、複数の原因が複雑に絡み合っています。解決策を見いだすためには、いくつもの分野にわたる研究者が協働する必要があります。

そこで、東京大学院は、文系・理系合わせて9研究科21専攻が参加する博士課程教育リーディングプログラム「社会構想マネジメントを先導するグローバルリーダー養成プログラム」を始めました。高度な専門知識と専門外に及ぶ広い視野を持ち、得た知見を社会に還元できる人材を育てていきたいと考えています。

### 用語解説

**1 日米貿易摩擦**
日本とアメリカとの間の貿易紛争。日本の高度経済成長に伴って拡大した。1980年代には自動車の輸出入などが大きな争点となった。

**2 二酸化炭素**
地球温暖化の要因とされる、温室効果ガスの1つ。

**3 二酸化硫黄**
硫黄や硫黄化合物を燃やすと発生する、刺激臭のある無色の気体。酸性雨の要因となる。

**4 脱硫装置**
二酸化硫黄などをろ過する装置。

**5 JCOの臨界事故**
1999年9月に、茨城県の核燃料加工施設で発生した臨界事故。核分裂連鎖反応によって、大量の放射線が発生。日本国内の原子力関連施設の事故としては初めて、被ばくによる死者が出た。

**6 化学プラント**
化学製品を生産する工場施設や装置の総称。

# ペーパーレス化を行政組織に普及させたい

羅 芝賢さん

な・じひょん　東京大大学院法学政治学研究科博士課程1年。貞和女子高校卒業。

**Q なぜこの分野に進んだのですか**

**A** 私は、大学時代に交換留学で訪れた日本が好きになり、日本のIT企業に就職しました。音楽や動画を配信する仕事などで、知的財産に関する法律をよく参照しました。そこで、時代の変化に法律が対応し切れていないと感じるようになったのです。例えば、著作権法はITが発達する前に制定されたものなので、インターネット上で著作物が保存・共有されることを想定していないため、IT事業者は既存の法律の枠に事業内容を無理やり合わせようとします。そのことに、私はもどかしさを感じていました。

社会制度は新しく開発された技術をどのように受け入れていくのかについて興味が湧いた私は、行政学を学んでみようと考えたのです。

**Q 城山先生の研究室での研究内容を教えてください**

**A** 修士課程では、IT技術を導入・活用する時に行政組織にどのような反応が見られるかについて、日本と韓国を比較し研究しました。全省庁のデータベースを一元管理するシステムが出来上がっている韓国の方がスムーズに取り入れていると予測していたのですが、研究の結果、どちらの国でもかなり強い抵抗があることが分かりました。日韓両国の省庁を訪問し、技術の導入を決めた部署の役人、技術を用いることになった部署の人など十数人に聞き取り調査をしたところ、導入はしていても、使用はしていないケースが両国に多く見られたのです。

博士課程では、日本の行政組織におけるペーパーレス化の取り組みについて研究しています。韓国やシンガポールなど、ペーパーレス化が進んでいるとされる国と比較することで、日本のペーパーレス化の現状を明らかにし、遅れているとしたらその要因を突き止めたいと考えています。ペーパーレス化を進める施策にもつながると期待しています。

**Q 日本の高校生へのメッセージをお願いします**

**A** 会社を辞めて大学院に進もうと決めた時は、「大学院で学んだとしても、私が研究者になれるのだろうか」と、不安でいっぱいでした。ただ、そんな私の気持ちは、実際に城山先生の研究室で学ぶうちに変わっていきました。何か特別なことをしたわけではありません。読むべき文献を読み、すべき調査をするという、大学院生として当たり前のことを続けているだけですが、良い研究を見分けられるようになるなど、自分が成長しているという実感が得られています。最近ようやく、「私でも研究者になれるかもしれない」と、思えるようになりました。

目標を実現できると最初から確信している人は少ないと思います。自分が今何をすべきかを確かめ、全力で取り組んでいくうちに、少しずつ自信が付いてくるのです。皆さんにも、将来の夢に果敢に挑戦してほしいと思います。不安はあるでしょうが、何もしないうちに諦めてしまうなんて、もったいない。勇気を出して足を踏み出してください。

---

**私の高校時代**

## 勉強と部活動の両立で得た自分を信じる力

●子どもの頃からヒップホップなどのダンスが好きだったので、高校時代はダンス部に所属していました。

韓国の高校、特に進学校では、「部活動は勉強の妨げになる」というイメージがあります。私も、両親や担任の先生に反対されましたし、勉強に専念するように何度も促されました。それでも、ダンス部をやめようと思ったことは一度もありませんでした。友だちや先輩と一緒に踊るのが楽しかったですし、いったん始めた以上、途中でやめるのは嫌でした。もちろん、勉強にもしっかり取り組みました。「ダンス部の活動のせいで成績が落ちた」と思われたくなかったからです。部活動をしていなかったら、逆に勉強は怠けてしまっていたかもしれません。

自分を信じて勉強と部活動を両立させた経験が、会社を辞めて大学院進学を決意する時に私の背中を押してくれました。

VIEW'S REPORT

教育再生実行会議委員の知事たちが語る

# 地方における教育の重要性、学校教育が担う役割とは

2013年1月に始まった「教育再生実行会議」は、現在の教育課題に対してさまざまな提言を行ってきた。今号では、その委員である高知県の尾崎正直知事と、熊本県の蒲島郁夫知事に、同じく委員であり、東京都立高校の校長を務めた経験のある鈴木高弘氏が、知事らの教育にかける思い、自県の教育行政について話を聞いた。

聞き手

専修大学附属高校理事

**鈴木高弘**

すずき・たかひろ

◎東京都立高校教員として、定時制、単位制、島嶼（とうしょ）部など多様な高校に33年間勤務。指導困難校の1つだった東京都立足立新田高校の校長に赴任し、再建に尽力した。主著に『熱血！ジャージ校長奮闘記』（小学館）。

KOCHI

## 学校、家庭、地域、行政が一体となり子どもたちの知徳体を育んでいく

高知県知事 **尾崎正直**

### Uターン、Iターンの促進も鍵を握るのは教育の充実

**鈴木**　高知県は5つの基本政策に基づき取り組みを進められていますが、その1つに「教育の充実」を掲げられています。尾崎知事は教育についてどのような考えをお持ちですか。

**尾崎**　本県に限らず、地方行政のあらゆる根幹にあるのが教育であり、学校ではないでしょうか。

本県は、基本政策の1つめに「産業振興計画の推進」を挙げています。その理由は、1990年に全国でもいち早く人口の自然減少が始まっていたからです。知事に就任した当時、全国的に景気は回復していましたが、その中においても本県は、人口減によって県内市場が縮小し、有効求人倍率は全国と比べて厳しい状況が続いていました。その負のスパイラルを断ち切るため、地産地消だけでなく「地産外商」を掲げると共に、観光資源を発掘し、県外からの観光客を増やそうとしました。しかし、モノが売れ、観光客が来たとしても、少子化や過疎化により、担い手が限られているために、規模拡大のチャンスを逃してしまうことになりかねません。

そこで、県内の人材育成強化だけでなく、県外からの移住促進に努めていますが、その時に重要なポイントとなるのが学校です。移住希望者に必ず質問されるのは、地域に良い学校があるかどうかです。本県に魅力を感じていただけても、子どもを安心して育てられる環境がなければ移住を決断してくれません。教育の充実というのは、産業を担う人材の育成はもちろん、Uターン、Iターン促進にもつながると認識しています。

### どんなに小さくても小学校は地域に残したい

**鈴木**　地域と学校は深く結び付いているものですが、中山間地域が多い

高知県では、過疎化による学校の統廃合は大きな課題かと思います。

**尾﨑**　学校の統廃合は、少子化、過疎化が進む中で地域にとって避けては通れない課題です。ただ私は、地域の学校は出来る限り維持することが必要ではないかと考えます。地域に学校がなくなれば、子育てが出来なくなり、働き手となる若い世代が住めなくなります。地域再生のためにも学校は必要です。一方、中学校や高校になると、社会性を育み、仲間と切磋琢磨する場であることも重要になるので、一定規模が必要と考えます。ただ、通学の便などを考えると、統廃合にも限界があります。このような小規模校の課題解決の手段として、ＩＣＴの活用が考えられると思います。普段はインターネットなどで交流し、長期休業時に直接会って交流する。小規模でありながら大規模校と同じような他者との交流が出来ます。ＩＣＴは地域という制約を超えて、子どもの可能性を広げる手段になると考えます。

**鈴木**　県内で人材育成をするためには、大学教育や社会人教育も重要になると思います。

**おざき・まさなお**◎高知県・私立土佐中学・高校、東京大経済学部卒業。大蔵省（現財務省）入省。外務省在インドネシア大使館書記官、財務省主計局主査、同理財局計画官補佐、内閣官房副長官秘書官等を歴任後、2007年、高知県知事に就任。現在２期目。教育再生実行会議委員、内閣府子ども・子育て会議委員等も務める。

**尾﨑**　県内の大学には社会科学系の学部が少ないため、県外の大学に進学し、そのまま帰ってこないという問題がありました。そこで、２０１５年度、高知工科大に経済・マネジメント系の学部を設置する予定です。更に、教育力強化のため、高知県立大を設置する法人との統合も行います。社会人教育としては、「土佐まるごとビジネスアカデミー」を産学官連携で運営しています。受講生は延べ１６００人以上に上り、社会人教育のニーズを感じています。

## 変化の激しい時代だからこそ幅広く学ぶことが重要

**鈴木**　日本全体のみならず、地域の発展にはグローバル化が欠かせません。尾﨑知事は財務省時代にインドネシアの大使館に赴任されていますが、その経験からグローバル人材に必要なことは何だと思われますか。

**尾﨑**　インドネシア政府で活躍している人、世界各国から大使館に派遣されている人と交流していて痛烈に感じたのは、世界で活躍している人は、文理の区別なく、実に幅広く勉強しているということです。数学を専攻しながら並行して法律を勉強してきたという人、工学が専門だが歴史にも詳しい人。それも、ただ詳しいだけでなく、大半の人がｐｈ．Ｄ（博士水準の学位）を修得していました。

**鈴木**　小学校での英語の教科化が検討され、中高では英語の授業は英語で行う方針が出されています。そのため、グローバル人材の育成というと、英語力向上に目が行きがちです。

**尾﨑**　確かに英語力は大切です。特に聞く・話すは重要であり、この力がなければ直接のコミュニケーションが出来ません。私も留学時代、だいぶ苦労しました。ただし、会話が成り立っただけでは意味がなく、海外では自分で導き出した考えを発信していかなければ、相手にされません。ですから、外国人と渡り合うためには独創性や創造性が必要であり、それらは幅広い知識や教養があってこそ生まれるものです。

　また、幅広い知識や教養は、何もグローバル人材だけに求められるものではないと考えます。社会の変化、技術の進歩が激しい中、いかに専門的な知識、実践的な技術を持っていたとしても、それらはたちまち陳腐

化してしまいます。でも、幅広い知識や教養があれば、専門分野を貫きながらも、社会の変化に対応していくことが出来るでしょう。

将来の目標をある程度決めている高校生もいるでしょう。そのような生徒には、その分野や関連する科目だけを勉強していてはかえって将来の可能性を狭めてしまうと言いたいです。一方で、目標がまだ定まっていないならなおさら、どの教科も満遍なく勉強して、自分の道が決まった時に備えてほしいと思います。

## 教育委員会で算数・数学、国語の教材を開発

**鈴木**　教育の充実という面の具体的な取り組みを教えていただけますか。

**尾﨑**　私が知事に就任した2007年に文部科学省「全国学力・学習状況調査」が初めて実施されましたが、その結果を見て、正直、驚きました。小学校・中学校とも全教科が全国平均を下回り、特に中学校は全国平均群からかなり低い正答率でした。子どもの学習状況を分析すると、宿題をする割合が低く、家庭学習時間が他県に比べて少ないことが分かりました。また、08年の体力テストの結果は全国でも最低水準にありました。

早速、「学力向上・いじめ問題等対策計画」（以下、緊急プラン）を策定し、08年6月にさまざまな取り組みを始めました。力を入れた取り組みの1つが算数・数学の教材開発です。単元ごとに一人ひとりの習熟度合いを把握・分析して指導し、学習内容の確実な定着を図るため、小単元のテストを教育委員会が作成しました。初年度は中学1～3年生、翌年は小学校にも拡大しました。また、授業や家庭学習で活用できる算数・数学や国語の学習シートも作成し、全小中学生に配布しました。これは、団塊世代の大量退職によって若手教員が増える中、経験の浅い先生でも一定の指導が出来るようにしたいという理由もありました。

## 良き社会人として送り出すための高校教育を

**鈴木**　学校現場と共に進めた取り組みの手応えはいかがですか。

**尾﨑**　何よりも先生方の熱心な指導があり、「全国学力・学習状況調査」の正答率は、年々上昇しています。小学校では国語・算数ともに全国平均に達し、中学校では全国平均との差がかなり縮まってきています。

このように一定の成果が出たことを受け、12年4月から「高知県教育振興基本計画　重点プラン」（以下、重点プラン）を推進しています。緊急プランは問題への対症療法的な面がありましたが、重点プランは知徳体の課題全般にアプローチする骨太な内容です。本県では不登校出現率や非行率、中退率が、全国に比べて高い状況にあります。最初にあらゆる政策の根幹に教育があるとお話ししましたが、学力と共に、それらの課題の背景には家庭の経済的な厳しさ、つまりは県の産業の停滞があります。産業振興を図って家庭環境の改善に結び付けると同時に、学校、地域、行政が力を合わせて子どもたちを育み、志を持って社会に羽ばたけるような教育に取り組んでいます。

**鈴木**　高校教育についてはどのような取り組みをお考えですか。

**尾﨑**　高校は社会に出る最後の教育段階です。小・中学校の学習内容を十分に習得できていないまま高校に進学する生徒もいます。また、基礎学力調査で就職も厳しいと思われる学力層の生徒が、本県では多いことも把握しています。将来の高知や日本を牽引する人材の育成も重要ですが、社会人になる準備をしっかりすることが高校教育の役目だと考えます。そして、それは学力だけでなく、健康教育や防災教育など知徳体全てにかかわることです。健康に気を使い、我が子の教育もしっかり考えられる。そういう良き社会人に育てて送り出すことが、社会から期待されています。これまでは義務教育に注力してきました。今後、高校の課題にもしっかり取り組んでいきます。

KUMAMOTO

# 「逆境の中にこそ夢がある」誰もが持つ無限の可能性を支援する

熊本県知事 **蒲島郁夫**

## 家庭の経済力による教育の差が出ないよう支援

**鈴木** 教育再生実行会議で活発な議論がなされる中、蒲島知事も多くの提言をされています。教育にどのような思いをお持ちでしょうか。

**蒲島** 蒲島県政が目指すのは、「貧困の連鎖を教育で断ち切る」ことです。

私は貧しい家庭で育ち、小学生の時から高校卒業まで新聞配達のアルバイトで生計を助けてきました。高校時代の成績はいつも220人中200番台の落ちこぼれで、大学進学など頭にはなく、高校卒業後は農協に就職しました。ところが、ずっと抱いていた牧場経営の夢をかなえようと、21歳の時に農業研修生としてアメリカに渡ったのが転機となりました。勉学の面白さに目覚め、ネブラスカ大に入学して畜産学を、ハーバード大大学院で政治経済学を学びました。そして、帰国後は筑波大や東京大の教授となったのです。

このような私自身の経験から、家庭環境や学業成績に関係なく、誰にでも可能性は無限大にあると感じています。そして、夢を持ち、その夢をかなえるための一歩を踏み出すことが重要だと思います。蒲島県政ではそれを具現化する施策を行っています。

**鈴木** 具体的にはどのような取り組みでしょうか。

**蒲島** 1つは、生活保護世帯の子どもに対する支援と、1人親家庭等への支援に精力的に取り組んでいます。生活保護世帯の大学進学者に対する生活費の無利子貸付や、1人親の就労支援などです。熊本県立大には、生活保護世帯の生徒の推薦入学枠を設置しました。先日、その制度で入学した学生の1人から手紙をもらいました。そこには、「大学進学を諦めていましたが、チャンスをいただき、その期待に応えようと、一層頑張れました。おかげで、良い成績を残すことが出来ました。ありがとうございます」と書かれていて、とてもうれしく思いました。

私自身、アメリカでの大学の学費や生活費の大半を、大学の奨学金で賄っていました。そうした経験から、夢を持つ人を社会全体で後押しする制度が全ての子どもの可能性を広げると考え、この施策に力を入れています。

## 農業研修生として訪れたアメリカで勉学に目覚める

**鈴木** 蒲島知事は、教育再生実行会議でも夢を持つ重要性を訴えられていますが、ご自身はどのような夢を持たれていたのでしょうか。

**蒲島** 私は読書が大好きで、小学生の時から小説や偉人伝などを読んでいました。主人公は夢に溢れて魅力的で、私に知らない世界を教えてくれるのが楽しくて仕方ありませんでした。その影響で3つの夢を持つようになりました。1つめは小説家に

かばしま・いくお◎熊本県立鹿本（かもと）高校卒業後、地元農協に就職。21歳で農業研修生として渡米。それが転機となり、ネブラスカ大農学部に入学。ネブラスカ大大学院修士課程修了後、ハーバード大大学院博士課程に進学し、政治経済学で博士号を修得する。帰国後、筑波大教授を経て、東京大教授に。2008年、熊本県知事に就任。現在2期目。東京大名誉教授。

なること。本が好きだから自分も小説を書きたいと思いました。2つめは政治家になること。プルタークの『英雄伝』を読み、ジュリアス・シーザーのような素晴らしい政治家になりたいと思いました。3つめは大草原で牛を飼うこと。いつも本を読んでいた丘から見える阿蘇山のふもとで牧場を経営したいと思いました。

**鈴木**　ただ、夢を持っていても、「自分にはその力がない」「どうせかなわない」と踏み出せない人もいます。

**蒲島**　私は財産も学歴もなく、失うものが何もないからこそ、牧場経営を夢見て、アメリカ行きにチャレンジできたのだと思います。

実は、農業研修はかなり厳しいものでした。牛や羊に餌をやったり、畜舎の掃除をしたりと、朝から晩までずっと重労働でした。また、牛や羊の健康管理や出産の世話など、生き物相手の仕事は想像以上に難しいものだと分かりました。自分には牧場経営が務まらないと挫折しそうでした。しかし、研修の終盤にあったネブラスカ大での学科研修で、私の人生観が大転換しました。牧場での体験を思い出しながら、その裏付けとなる理論を学ぶことによって、牧場での体験の意味が身に染みてよく分かり、初めて夢中になって勉強したのです。

**鈴木**　落ちこぼれだった生徒が、勉学に目覚めたわけですね。

**蒲島**　「もっとここで勉強したい」と思うようになり、私の夢は大学進学に変わっていきました。もちろん、そこには大きな壁がありました。1つはお金の問題、もう1つはSAT（大学の入学試験）です。

農業研修担当のクリントン・フーバーさんに相談したところ、翌年の研修で日本語通訳として雇ってくれることになりました。私は通訳の仕事で当面の生活費を稼ぎながら、勉強に取り組みました。フーバーさんの期待に応えるためにも一生懸命に頑張ったのですが、現実は甘くはなく、試験は不合格でした。日本に帰るしかないと諦めかけていた時、私が通訳を務めていたジョー・ハドソン先生が、私が予想以上に頑張っている姿を見て、助け舟を出してくれました。驚いたことに、入試担当官に私を入学させるように直談判してくれたのです。その結果、なんと仮入学となりました。私は24歳で大学生となったのです。

## 期待に応えたい！という思いで120％の努力を

**鈴木**　入学を直談判してくれた人がいる上に、不合格だった人を入学させてくれるなんて、日本では考えられないことです。

**蒲島**　アメリカには、年齢や人種に関係なく、夢に向かって一生懸命に頑張る人を応援する気質があるのでしょう。私も大勢の人に支えられてここまで来られました。

ただ入学できたとはいえ、成績が悪かったら即退学という条件付きでした。でも、自分が待ち望んだ勉強の機会が与えられたのです。更には、ハドソン先生の期待を裏切ることは絶対に出来ません。崖っぷちにあったからこそ、私は真剣に勉強に取り組めたのだと思います。農学の専門書はもちろん、生物、化学、数学などの一般科目の教科書も分厚く、当然、英語で書かれているため、私は授業を録音し、家でカセットテープを何度も聴きながら復習しました。高校時代に落ちこぼれだった私が、「やってやろう！」という前向きな気持ちで猛勉強したのです。

**鈴木**　1学期の成績はどうだったのでしょうか。

**蒲島**　自分でも驚きの「ストレートA」でした。日本の大学でいうと「全て優」です。農学部にいる約400人の学生の中で、「ストレートA」はたった10人でした。おかげで、正式に入学が認められただけでなく、特待生となりました。特待生にはいくつかの奨学金が与えられ、1年生から指導教授が付いて好きな研究に取り組めます。私の人生は大きく開けていきました。

夢を持つことは大切です。でも、夢を持つだけでは何も起こりません。夢に向かって一歩踏み出す。そして、ここぞと思った時には120％の努力をする。それが、次のチャンスにつながるのではないでしょうか。

## グローバルマインドと英語力を中高段階から育てる

**鈴木**　政府はグローバル人材の育成を推進しています。熊本県の施策ではご自身の経験がどう生かされているでしょうか。

**蒲島**　若い時に留学などで異文化を体験すること、中高の段階から実践的な英語力を強化することが大切であると考えています。アメリカのモンタナ大への高校生の短期派遣や、長期留学者に対する支援金の給付など、高校生の海外留学や海外大学への進学支援をしています。

　代表的な取り組みは「海外チャレンジ塾」です。海外進学などを目指す中高生を対象に、英語力や英文エッセー作成能力などの英語力向上を支援すると共に、国際的に活躍している方や海外の大学を卒業した方の講演会などを開き、グローバルマインドの育成にも努めています。

　また、中学生を対象とした英語音声教材のCDを製作し、全中学生に配布しました。私自身の経験から、中学3年生程度の英語力がしっかり身に付いていれば、外国人とのコミュニケーションは十分取れると考えています。

**鈴木**　「海外チャレンジ塾」の受講生のうち、2013年度は5人が海外の大学に進学と、成果が早くも表れているようですね。

**蒲島**　将来の熊本のため、日本のため、世界を股に掛けて活躍することを期待しています。熊本から海外の有名大学に進学したり、世界で活躍する人物がいることは、県民にとって誇りに思えますし、何よりも子どもたちに夢を与えます。海外進学は人材の流出ではなく、大勢の後進を育てることにつながると考えます。「海外チャレンジ塾」の開講式で、私は英語でスピーチをしました。生徒が真剣に耳を傾けて聞く姿に頼もしさを感じると共に、こちらも一層頑張らねばと元気をもらいました。

　また、グローバル人材の育成は、英語に特化した課題ではありません。海外で求められるのは、秀でた専門性を複数持つユニークな人物です。英語力に加えて、数学、歴史、科学、スポーツなど、他分野でも優れていることが必要です。学校教育において、学校全体で取り組んでいただきたいと思います。

　更に、社会人でも夢と意欲があれば学ぶことが出来る制度も必要と考え、県職員の海外研修派遣や東京大大学院などでの学位取得も支援しています。

**鈴木**　私立高校への支援にも力を入れているとうかがいました。

**蒲島**　熊本県の高校生のうち約3割が、私立高校に通っています。私立学校も公立学校と同様に支援していこうと、私学振興課を設置しました。更に、私立高校の横のつながりを強化するために「熊本時習館構想」を始めました。各校それぞれに建学の理念や文化があり、県の関与を受けたくないと反発があるかと思いましたが、今では講演会や教職員研修など、連携して教育活動を進め、生徒が切磋琢磨する場となっています。

## 逆境だからこそ、夢を持ち、踏み出す素晴らしさを伝える

**鈴木**　就任以来、県内の小中高の各校を訪問し、「知事出前ゼミ」を開いているとお聞きしています。

**蒲島**　2013年度までに57回行い、約3万人の子どもたちに語り掛け、触れ合ってきました。私の経験を踏まえながら、「人生の可能性は無限大である」「逆境にこそチャンスがある」「夢を持ち、夢に向かって一歩を踏み出す」「踏み出したからには、120%の努力をする」という4つのメッセージを伝え続けています。今の状況が悪いからといって、決して悲観することはありません。逆境だからこそ、大きな夢にチャレンジでき、将来の喜びは2倍にも3倍にも大きくなるのです。

　教育は夢をかなえる舞台の1つです。教育や社会のあり方がその方向性に沿っていなければ、政治の力でつくり出すことが重要ではないでしょうか。熊本県はこれからも、子どもたちの夢を育み、夢を大きく広げ、夢を支えることに力を注いでいきます。

# ウェブで参観できる シリーズ「授業大公開」がオープン!

2014年2月14日公開

## 英語

兵庫県立川西緑台高校 **大目木俊憲** おおめぎ・としのり

## 生徒が「英語で考え、情報を得た」と実感できるよう、英語で授業を行う

**◎導入の15分で『教科書を読みたい』と思わせる**

私が初めて英語で授業を行ったのは、初任校1年目の時です。つまらなそうに授業を受けている生徒たちを見て、試しに英語で授業をしてみたのです。英語が苦手な生徒でも意欲的に取り組む姿を見て、私はその意義を感じ、それ以降、英語で行う授業のあり方について考えてきました。

授業で最も大切にしているのは、生徒に「英語で考え、英語で情報を得た」と実感させることです。そのため、生徒が「教科書を読みたい」と思うように、導入の15分に力を入れています。続いて、生徒が教科書の素材文を理解しやすくなるよう単語や熟語の確認をした上で、素材文の内容に関する質疑応答を行います。ここでは、素材文の最初の行についてから質問するのではなく、要点となる内容について聞いたキー・クエスチョンを投げ掛けます。全ての質問に答えた時に、生徒が素材文の内容をある程度、把握している状態にするわけです。

もっとも、英語で授業を行うことにこだわるあまり、生徒が正しく情報を理解できなければ本末転倒です。英語だけでは情報を伝え切れない場合、日本語で指示を出したり、日本語で考えさせたりするようにしています。例えば、今回の授業で扱った地雷の問題は、解決方法をしっかり考えてほしいと思い、英語で考えるのは難しいという生徒には日本語で考えるよう指示しました。

**◎英語による授業は緊張感を生み、集中力を高める**

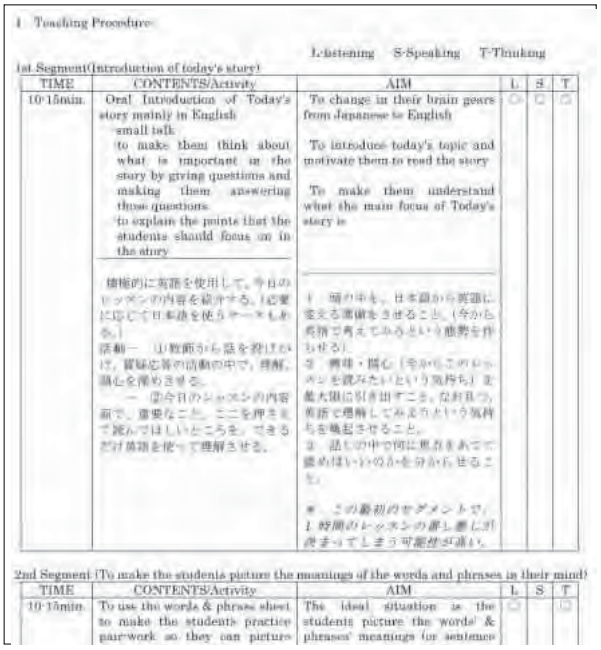
英語で授業を行うメリットの1つは、生徒の集中力が高まることです。True or FalseやQ&Aのように質問がパターン化してしまうと、生徒はそれに慣れ、次第に集中力が低下していきます。しかし、英語で授業を行うと、生徒はどんな形で質問されるのかを予測できないため、緊張感が生まれ、授業に集中するのです。また、英文から情報を得るスピードが速くなり、英語力が向上する成果も見られます。

**◎肩ひじを張らず、自分なりの方法で内容を伝える**

英語の授業を英語で行うことに悩まれている先生にお伝えしたいのは、1行目から全て英語で話そうと肩ひじを張らなくてもよいということです。教科書の素材文の内容を最初から最後まで全て伝えるというスタンスから少し発想を変えて、自分なりの方法で素材文の内容を伝えてみてはいかがでしょうか。

私の授業を見ていただき、さまざまなメッセージをお寄せいただければ幸いです。

**■大目木先生のティーチングプラン** ＊ウェブサイトで全てご覧いただけます



1 Teaching Procedure

L-listening S-Speaking T-Thinking

1st Segment(Introduction of today's story)

| TIME | CONTENTS/Activity | AIM | L | S | T |
|---|---|---|---|---|---|
| 10-15min. | Oral Introduction of Today's story mainly in English<br>small talk<br>to make them think about what is important in the story by giving questions and making them answering those questions<br>to explain the points that the students should focus on in the story<br><br>積極的に英語を使用して、今日のレッスンの内容を紹介する。必要に応じて日本語を使うケースもある。<br>活動一 (1)教師から話を投げかけ、質疑応答の活動の中で、理解、関心を深めさせる。<br>一 (2)今日のレッスンの内容前で、重要なこと、ここを押さえて読んでほしいところを、できるだけ英語を使って理解させる。 | To change in their brain gears from Japanese to English<br><br>To introduce today's topic and motivate them to read the story<br><br>To make them understand what the main focus of Today's story is<br><br>1 頭の中を、日本語から英語に変える準備をさせること。(今から英語で考えてみるという態勢を作らせる)<br>2 興味・関心(今からこのレッスンを読みたいという気持ち)を最大限に引き出すこと。なお且つ、英語で理解してみようという気持ちを喚起させること。<br>3 話しの中で何に焦点をあてて読めばいいのかを分かれさせること。<br><br>＊ この最初のセグメントで、1時間のレッスンの殆ど全部に引きまってしまう可能性が高い。 | ☐ | ☐ | ☐ |

2nd Segment (To make the students picture the meanings of the words and phrases in their mind)

| TIME | CONTENTS/Activity | AIM | L | S | T |
|---|---|---|---|---|---|
| 10-15min. | To use the words & phrase sheet to make the students practice pair-work so they can picture | The ideal situation is the students picture the words' & phrases' meanings (or sentences | ☐ | | ☐ |

**アクセスはこちら！**

ベネッセ教育総合研究所のウェブサイト（http://berd.benesse.jp）にアクセスいただき、トップ画面右のメニューバーから「シリーズ　授業大公開」を選択してください。

教師全体の教科指導力を向上させるためには、指導内容・方法の共有が不可欠であり、共有の場として設けられるのが公開授業です。ただ、時間的・地理的制約などで誰もが参加できるわけではありません。そこで、ベネッセ教育総合研究所は、実際の授業を撮影した動画をウェブ上で発信する形での公開授業を実現しました。初回は２人の先生が登場。ぜひご覧いただき、ご自身の授業改善にお役立てください。

2014年3月14日公開

## 地理

神戸大学附属中等教育学校　**高木　優**　たかぎ・すぐる

# 個人思考の時間を大切にすることで、グループでの言語活動の効果を最大化させる

### ◎グループ学習と生徒との対話を組み合わせた授業

私は新任の頃から、生徒と対話をしながら授業を進める生徒参加型の授業を心掛けてきました。それに、本校が50年以上継承してきたグループ学習の要素を組み合わせたのが、今の私の授業スタイルです。

今回公開する授業では、ヨーロッパの中でも生徒が具体的なイメージを持ちづらい東欧について考察しています。教科書では、東欧はＥＵの中でも労働賃金が安く、労働力の供給場所と位置付けられており、日本の製造業も進出して西欧で売る製品を製造している、とされています。そうした理解が本当に正しいのかどうか、データを基に検証するのがテーマです。

私の授業では、自作のワークシートを使いながら、テーマについて個人で深く考える時間、仲間と共有して視野を広げる時間を設け、それを基に個人の考えを更に深めていくというプロセスを大切にしています。

### ◎個人学習とグループ学習の繰り返しで考えを深める

今回の授業を例にして説明します。まず、個人で東欧のイメージを考えてシートに記入し、続いてグループで、ヨーロッパ、アフリカ、ユーラシア大陸を中心とした３枚の世界地図を使って、東欧の地理的な位置付けを考えます。

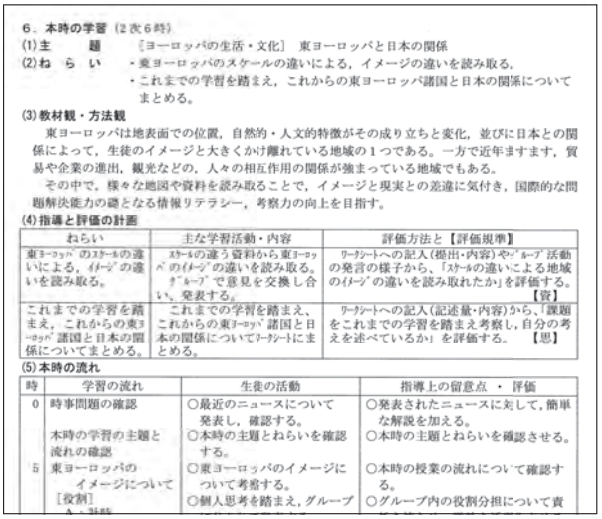
次に最新の論文を提示し、教科書とは別の切り口から東欧の産業構造について考察します。グラフを丁寧に見ると、東欧では確かに製造業は多いのですが、ポーランドにある日系企業の50％以上が卸売・小売業であり、東欧に近いオーストリアには日本企業の販売統括部門があることが分かります。これらは、東欧が労働力の供給場所というだけでなく、市場としても開拓が見込まれていることを示しており、そこに生徒が気付けるかどうかが、今回の授業のポイントです。

グループで話し合った内容をホワイトボードに書いて発表し、全体で共有した後、個人で本時の授業を踏まえて、東欧と日本との関係を100字程度の文章でまとめ、授業は終了となります。

言語活動を取り入れた授業は、講義型の授業以上に生徒の意欲を引き出せることが、テストの結果でも明らかになっています。同じ単元について、４年生（高１に該当）には言語活動を取り入れた授業、５年生（高２に該当）には講義型の授業と分けて行ったところ、４年生の方がテストの点数が良いという結果が出ました。

授業公開の際、私が意識しているのは、先生方が気軽に取り入れられる授業をすることです。これからも、先生方が「これならやってみよう」と思えるような授業を追究していきたいと考えています。グループ学習や言語活動を取り入れてみたいという先生は、ぜひ、本校へ授業見学にいらしてください。

**■高木先生のティーチングプラン**　＊ウェブサイトで全てご覧いただけます



６．本時の学習（２次６時）

(1)主　　題　〔ヨーロッパの生活・文化〕　東ヨーロッパと日本の関係

(2)ね　ら　い　・東ヨーロッパのスケールの違いによる，イメージの違いを読み取る。
・これまでの学習を踏まえ，これからの東ヨーロッパ諸国と日本の関係についてまとめる。

(3)教材観・方法観

東ヨーロッパは地表面での位置，自然的・人文的特徴がその成り立ちと変化，並びに日本との関係によって，生徒のイメージと大きくかけ離れている地域の１つである。一方で近年ますます，貿易や企業の進出，観光などの，人々の相互作用の関係が強まっている地域でもある。

その中で，様々な地図や資料を読み取ることで，イメージと現実との差違に気付き，国際的な問題解決能力の礎となる情報リテラシー，考察力の向上を目指す。

(4)指導と評価の計画

| ねらい | 主な学習活動・内容 | 評価方法と【評価規準】 |
|---|---|---|
| 東ヨーロッパのスケールの違いによる，イメージの違いを読み取る。 | スケールの違う資料から東ヨーロッパのイメージの違いを読み取る。ｸﾞﾙｰﾌﾟで意見を交換し合い，発表する。 | ワークシートへの記入（提出・内容）やｸﾞﾙｰﾌﾟ活動の発言の様子から，「スケールの違いによる地域のイメージの違いを読み取れたか」を評価する。【資】 |
| これまでの学習を踏まえ，これからの東ヨーロッパ諸国と日本の関係についてまとめる。 | これまでの学習を踏まえ，これからの東ヨーロッパ諸国と日本の関係についてﾜｰｸｼｰﾄにまとめる。 | ワークシートへの記入（記述量・内容）から，「課題をこれまでの学習を踏まえ考察し，自分の考えを述べているか」を評価する。【思】 |

(5)本時の流れ

| 時 | 学習の流れ | 生徒の活動 | 指導上の留意点・評価 |
|---|---|---|---|
| 0 | 時事問題の確認 | ○最近のニュースについて発表し，確認する。 | ○発表されたニュースに対して，簡単な解説を加える。 |
| | 本時の学習の主題と流れの確認 | ○本時の主題とねらいを確認する。 | ○本時の主題とねらいを確認させる。 |
| 5 | 東ヨーロッパのイメージについて［役割］ | ○東ヨーロッパのイメージについて考察する。<br>○個人思考を踏まえ，グループ | ○本時の授業の流れについて確認する。<br>○グループ内の役割分担について責 |

## 生徒がまじめに語る機会をつくることが生徒の意識を変える

6月号の特集を読み、日頃、学校生活を共にする生徒たちがまじめに「自分のこと・未来のこと」を語る機会をつくることで、生徒の意識を変えることが出来るのだと感じた。埼玉県立大宮光陵高校の久保島昌一校長は「自分の考えを十分に表出できて、ようやく生徒の視線は他者へと向けられていく」と言われていたが、自分の考えを身近な仲間に話すためには生徒同士の信頼関係を築くことが前提であり、その部分で多くの時間が必要である。表面的、マニュアル指導ではない、生徒の中にしっかりと入っていく指導が求められると感じた。

［京都府・匿名希望］

## 学校文化を継承させる師弟関係に感動

6月号「私を育てたあの時代、あの出会い」を読み、学校の「文化」がこのように継承されていくのだと素直に感動した。熊本県立熊本高校の原田大賢先生が、体重が5kgも落ちても仕事と向き合い、「仕事と宴席は断らない」という信念に基づいて仕事をされている姿に頭が下がる。熊本県立済々黌高校の山本朝昭副校長が原田先生を評する「周囲の思いを察知して先回りして動いてくれる行動力」という言葉からも、原田先生の精力的な仕事ぶりがうかがえる。また、山本副校長の「若手は、経験から学ぶことが出来ないのであれば、先輩から学ぶしかない」という言葉にはっとした。自分自身、積極的に学校経営に参画しながら、若手を育てていく年代になった。言葉だけでなく、自分の背中で若手を育てられるような実践を積んでいきたい。

［滋賀県立守山中学・高校・堀浩司］

## 若手教員の発想を生かしながら学校を活性化させる必要性を感じた

若手教員の増加はどの県でも見られるが、彼らの指導力を向上させ、その新しい発想を生かしていくことが、今後の学校の活性化につながると考える。6月号「指導変革の軌跡」の兵庫県立神戸高校が実践している実力考査を通した作問能力向上と実力考査後の研修会は、若手を育成する上でも、またベテランの持つノウハウの継承の意味でも重要だと思った。

［和歌山県・匿名希望］

## 「共に育てる信頼関係」の必要性を改めて確認

若手教師にとって保護者と向き合って何をするか、何を話すかは大きな課題だ。どの学年でも同じだが、「共に育てる信頼関係」に尽きると思う。特に1年生では、6月号「生きたデータの徹底研究」でも指摘されているように、保護者のニーズに合わせ、進路情報を提供する必要がある。保護者、教員の共通の課題を見つけることが大切だと考える。

［福島県立相馬高校・武内義明］

# 読者のページ Reader's VIEW Volume 3

**読者の先生方からのご意見を紹介します**

**教師川柳**

担任は 実りの秋の サポーター

埼玉県・氷川の杜


『VIEW21』高校版は
ウェブサイトでも
ご覧いただけます！

本誌の最新号、及びバックナンバーは、ベネッセ教育総合研究所のウェブサイトで公開しております。誌面のPDFや「生きたデータの徹底研究」の図版もダウンロードできます。ぜひご活用ください。

詳しくは
VIEW21　高校版　検索

http://berd.benesse.jp/magazine/kou/

**編集後記**

◎変化する社会を生き抜く上で必要な力とは何なのか。その答えを求め、多くの先生にお話を伺い、たどり着いたのが、「軸をつくる力」とその軸に基づいた「修正力」です。これらの力の育成について、今号からシリーズで考えていきます。（柏木）

◎「1人でも多くの高校生に、進路実現の可能性を広げてほしい」という願いが今回の「修正力」の特集になりました。生徒が生きる上での軸を持ち、これからの社会に立ち向かっていけるためのご指導の参考としていただければ幸甚です。（竹内）


VIEW21 8月号 Vol.3　2014年8月23日発行

発行人　山﨑昌樹
編集人　春名啓紀
発行所　（株）ベネッセコーポレーション　ベネッセ教育総合研究所
印刷製本　凸版印刷（株）
編集協力　（有）ペンダコ
執筆協力　中丸 満、二宮良太、長谷川敦
撮影協力　荒川 潤、谷口 哲、ヤマグチイッキ
イラスト協力　カモ

VIEW21編集部
〒163-0411 東京都新宿区西新宿2-1-1　新宿三井ビルディング14階
電話　03-5320-1215


©Benesse Corporation 2014

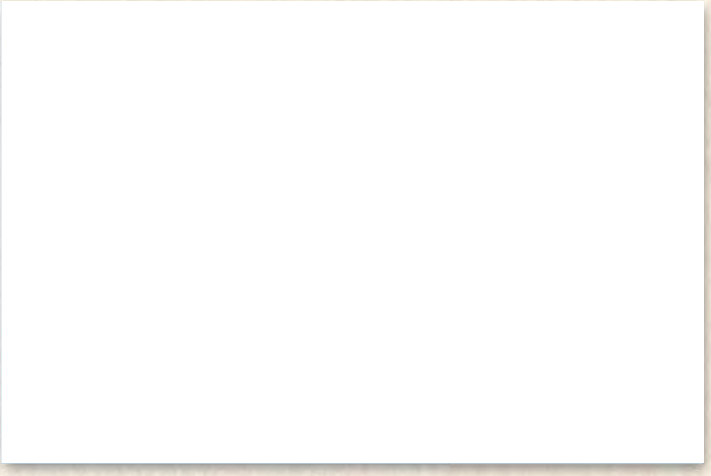

VIEW21 2014 October 10月 Volume 4

次号は
10月24日発行（予定）
『VIEW21』高校版は
年6回の発行です

COVER STORY
教師と生徒の肖像

# 生徒と共にやり切る

表紙の学校　福井県立美方高校 **橋本有司**先生



模擬面接を「検定方式」で行う福井県立美方高校。第１段階は担任、第２段階は進路指導部教員、第３段階は学年主任で、それぞれ合格しなければ次には進めない。最終段階は進路指導部長の橋本有司先生だ。推薦・ＡＯ入試、就職の希望者全員が受けるため、延べ数百回の面接を行うが、先生は安易に合格を出さない。「１人でも多くの生徒に希望進路を実現してほしい。その願いと責任があるからです」。制服のボタンが外れていたら、入室時に即「やり直し」。生徒自身にその理由に気付かせるため、先生は何も言わない。そして、志望理由が具体的でなければ質問攻めだ。いつから思ったのか、きっかけはあるのかなど、話をだんだん掘り下げ、自己認識が出来るように導いていく。「生徒は皆、思いを持っていて、それを引き出すのが私たち教師の役目。何度も繰り返すうちによく練られた内容になり、生徒の顔つきも変わっていきます」と先生は言う。

粘り強い指導は学習面においても同じだ。６月には模試Ｅ判定指導を行い、安易に希望を下げる必要はなく、これからの過ごし方が大事であることを訴えた。生徒にそれまでの家庭学習を見直させ、各教科の教師に相談した上で、今後の家庭学習の計画を考えて提出させた。「自分で決めた目標に向け、全力を尽くしてやり切るという経験をしていれば、粘り強さや諦めない気持ち、もし駄目だったとしても次につなげようとする意識に結び付くと思うのです」と願いを込める。

生徒もその思いを受け止める。「最後までやり切るとか、当たり前だけど大事なことをいつも言ってくれる」「受験生として持つべき志を示してくれ、心強く感じる」と生徒たち。入試本番まであと数か月。今年も先生は、生徒たちに寄り添い、最後まで一緒に走り切る。

VIEW21
ビュー21　高校版　Volume3　2014年8月号
2014年8月23日発行／通巻第347号　発行人 山崎昌樹　編集人 春名啓紀　発行所 (株)ベネッセコーポレーション ベネッセ教育総合研究所
©Benesse Corporation 2014

お客様
サービスセンター
［フリーダイヤル］0120-350455
受付時間　月～金 8:00～19:00／土 8:00～17:00（祝日、年末・年始を除く）
株式会社ベネッセコーポレーション岡山本社　〒700-8686 岡山市北区南方3-7-17